
とある忘却の水支配者（ヒュドラー）

aqua ruler

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある忘却の水支配者^{ヒュドラー}

【Nコード】

N1646K

【作者名】

aqua ruler

【あらすじ】

とある一人の男が、学園都市第7学区で倒れていた。

『警備員』『風紀委員』『救急隊員』が出動していた。

出会った男は、パラレルワールドから来たと告げる。

原石である可能性のあるらしい男は、連れ去られた。

その出来事は、学園都市上層部の人間にも知れ渡ることになる。

動き出した学園都市。

とある男と科学が交差した時、新たな物語は始まる。

序章（前書き）

主人公ちよい強め。ご都合とかあるかもしれない……
楽しんで書くんで、一緒になって楽しんでいただければ、幸いです。

一応全巻読みましたが、実家に置きっぱなんで、間違ってたらすみません。

それでは、続きどうぞ！

序章

何も無い。ただそれだけ。

周りが暗いのか明るいのかさえ解らない。

ぼんやりと何かが体に入っていく…。
抵抗するもしないもない。

考えることすらまなならない。

何も無い。ただそれだけ。

意識が覚醒し始める。

薄らと頭の角の方で、「次は何処へ行くのだろう」と期待と不安
でいっぱいだった……のだろうか？

どちらにしても、記憶が虚数空間へと消え失せるし、記憶力もな
い。

何も無い。ただそれだけ。

それでも、目覚める。

“ 無
” から
“ 有
” へと
……

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
.
.
.

序章（後書き）

あとがき？（笑）

このあと、1話始まります。

初めましての方も、MUV・LUV ALTERNATIVE

IF 〳 など、他作品を読んでいたいた方も、おはようございます。 暁巧です。

他にも色々考えてますよ？短編とか二次ですけど。

オリジナルは、文章力UPしてからですかね？

そんな感じでがんばりますので、応援よろしくお願いします。

感想、アドバイス等々、いただけましたら尚更がんばれます！

が、今回は特に自由に書くと思うんで、期待しないでくださいな
（笑）

あ、いつも自由に書いてました。すみません。

とりあえず、次回！

第1話 出会いは、事件（トラブル）と共に

— b e t o g e t h e r —

とある一人の男が、学園都市第7学区で倒れていた。

『警備員』『風紀委員』『救急隊員』が出動していた。

出会った男は、パラレルワールドから来たと告げる。

その男に近づく^{バードスーツ}駆動鎧達。

とある男と科学が交差した時、物語は始まる。

学園都市。

東京西部に位置する完全独立教育機関。

総人口230万人の人々が住む町。

外部と隔離された巨大都市に最先端の科学を研究する研究所、それらを実証する各種実験施設、その対象となる学生たちの教育機関、それらを支える農業、工業、各種インフラなどすべて揃った自己完結した都市。

東京西部を中心に東京都・神奈川県・埼玉県・山梨県（ごく一部）に跨って位置し面積は東京都の約3分の1ほどで高さ5メートル・厚さ3メートルの塀で囲まれた完全な円形の都市。都市は23の学区に分かれており、各学区ごとに特徴がある。

その中の第7学区が、学生たちの居住・通学している主要な場所。中学・高校といった中等教育機関を主としており、同校に通う学生や勤務教師たちの生活圏となっていて、それに付随する形で生活商店などが立ち並んでいる。

超能力が科学によって解明され、人口の8割が学生である学園都市では超能力の開発が進められていて、全ての学生はそれぞれが通う学校で『能力開発』の特別授業が導入された『授業』^{カリキュラム}を受けている。授業以外にも、宿題や試験、補修などの学習、夏休みなどの長期休暇、部活動、放課後の自由時間など、一般的な学生生活^{ライフサイクル}が存在する。

存在していたはずである。

この路上に倒れている男にも…

ここは、学園都市第7学区の路上。

といつても、道路の上で倒れていないだけましだろう。車にひかれていたら大惨事だ。

ウー…！

サイレンの音が聞こえてきて、男の近くに停止した。

どうやら、救急隊に『風紀委員』と『警備員』まで来たようだ。

学園都市の警察は対能力者の専門部隊、学生から選抜された
シャッジメント

『風紀委員』

と、

教員有志による

アンチスキル

『警備員』

が治安維持を担当するのだが、その二つの組織に加え、救急隊まで出動してきていた。

…路上に倒れている今の状況でも、十分大事になっているようだった。

「すみませーん、起きてくださあい！」

「起こす気無いじゃんよ…」

「そそ、そんなことありません！」

頭に大量の花を飾っている（遠目に見ると頭に花瓶があるように見える）女性『風紀委員』の言葉を聞いていたが、直ぐ様切り替えて、『警備員』の女性は男に声をかける。

「おい！ 意識はあるか！」

『警備員』の女性の大きな声に反応して、男が身動きして声を漏らす。

「う…」

「キミ、大丈夫か？」

少しずつ男の目が覚醒していき、状況が理解出来ずにキョロキョロと辺りを見回す。

「あれ？…ここは…」

男は見慣れない場所にいるようだった。

それどころか、こんなところを歩いた記憶すら無い。

「何でこんなところ…」

「大丈夫ですか？」

「大丈夫じゃん？」

「…」

何かを話そうと思ったのだが、記憶が欠落しているようで言葉にならない。

（「巧^{たくみ}…」）

男が思い出せたのは凡その年齢、自分に関する多少のこと（好き嫌いとか）と“巧”という名前だけ…。

自分の置かれているであろう状況に軽くパニック状態に陥ってしまっ。

「うえっ？ あー。あれ？…」

「なにが言いたいじゃんよ？」

「お、落ち着いてください。私達は何も危害を加えるつもりはありません。ね？」

すーっ…。と深呼吸してから話し始める。

「自分でも、今一状況が理解出来ていないっていうか…」

「何があっただじゃんよ？」

「んと…、こんな話して信じてもらえるかどうか…」

お前何言ってるの？って顔してから、当然！と言わんばかりの顔になり、『警備員』の女性は男の頭を撫でる。

「信じる信じないの話じゃないじゃん。大人は、子供の話を信じてやるもんじゃんよ」

『風紀委員』の女子も、安心させるように話しかける。

「大丈夫です。話してみてください」

戸惑いつつも、男は話し始める。

「あー、えっと…パラレルワールドってわかります？」

「パラレルワールドって言う…」

「並行世界…。多世界観解釈のことです」

「白井さん！ どうして？」

「初春がトロいからですわ」

「えー、そんなことないですよ」

やって来たのは、白井しらい 黒子初春と同じ『風紀委員』だ。初春より小柄なツインテールのお嬢様。

「で、それがどうしたじゃんよ？」

「オレ、パラレルワールドから来てさっき目が覚めました……たぶん」

後半の方はぼそぼそと小さい声になっていた。

「…はあ？」

少しの間を空けて、3人は素つ頓狂な声を上げる。

「冗談です。えっと、記憶喪失みたいです。名前くらいしか覚えてません」

「…はあ！？」

またもや3人でハモってしまう。

「本当じゃん？ それ」

「嘘ついても仕方ないですよ」

「さっき冗談言ってましたけどね」

「それはそれ」

「冗談も嘘も変わりありませんわ」

（「ど」すつかなー？」）

黄泉川も何か考えてるようだ。

「どうかしました？」

「ちよっと待つじゃん」

「あの、取り敢えず倒れた原因とか覚えてないでしょうか？ 直前の記憶でも構いません」

「えっと…」

何やら答えに困っていると…

「記憶喪失だつて言ってたじゃん？」

「記憶喪失だつて言っていましたわ」

「記憶喪失だつて言わなかったかな？………新手の虐めとか？」

「ち、違いますちよっと忘れてただけで」

「同僚としてこれってどうなの？」

「さすがに、ないですわね」

「じよ、冗談です！」

「初春苦しいですわ…」

「ていうか、それも無いじゃんよ」

初春を横目に、みんなツツコむ。

「『風紀委員』は嘘をつく、もしくは誤魔化すのを生業としてるん？」

「違いますわ！ ちよっと、初春！」

「『警備員』つてのも…」

「アタシまで変な目で見られたじゃん」

「私のせいじゃないですよ！？」

「」「え？」「」

3人で見事にハモる。

「私だけ、のけ者にされてませんか！？」

「「全然」」」

「ハモらないでくださいっ！」

その遣り取りが面白く、巧は笑い出してしまふ。

「ぷっ！… あははっ！ はは、ふふふっ」

暫く笑ってから、だいたい5分程して――漸く笑いが治まった。

「ははっ」 はあー、笑ったあ」

「笑い過ぎです！」

「仕方ありませんわ」

「白井さんっ！」

「ま、いいじゃん？ やつと明るい顔になった」

「え？」

「さっきまで何処か暗かったじゃんか」

巧は、『警備員』のに言われるまで全く気がつかなかったようだ。

「そつか。そんなつもりなかったのに…」

「何でそんな顔してたじゃん？」

「いや、まあ、たぶん…」

「何ですか？ うじうじと男らしくありませんわ」

「ちよつと、白井さん！」

言い淀んでいたけど、隠したところで容易に想像がつくだろつと話し始める。

「いや、ね。 オレ、何も無いんだなって。 そついう事考えちゃつてたんだと思う」

「何も無いって…」

「どついう事じゃん？」

「家も家族も友達も… ゼーんぶ、無いって事だよ」

「あ」

初春だけが声を発するが、他の2人も何も言えなかった。

「ま、それだけのことやから気にすんなって」

重苦しい雰囲気を変える為に男が軽口で話す。

それに白井が乗ってくる。

「そうですね。それよりも、偶に口調が変わってますわよ？ 猫が被りきれてませんわ」

「いや、初対面の人やし、猫被るっつか、敬語みたいな使うやろ？」

「みたいなのもって、適当じゃんかよ」

「ま、いっかなーって」

「面倒くさくなったんですね」

普段どおり喋った途端、次々と矢継ぎ早にツッコまれる。

「何かツッコミ激しくなってるわね？」

「フレンドリーに接しているんです」

「そのとおりですわ」

「はは…。何だかなあ」

「でも、その方が良いでしょうよ。」

「まあ」

「ま、同居人同士これからよろしくじゃん」

「……………は？」

今度は男が素っ頓狂な声を上げる番だった。

訳が解らず聞き返す。

「ええーっと、何て言いました？」

「これからよろしく、って言ったじゃん」

「いやいや、その前」

「ああ！ 同居人同士って言ったじゃんよ」

「それっ！ そう、それ！ っつか、誰と誰が！？」

「あたしとアンタ」

「なんでやねん！ 何の説明も無く、突然そんな事言われてどうしろっていうんだっ！」

「言う通りにするじゃん」

「いやいや、そうじゃなくて。本気で聞いているんですけど!？」

「本気に決まってるじゃんよ」

「初対面やん！」

「引き取り手の無い記憶喪失の成年に、手を差し伸べないなんて有り得ないじゃんか」

「えっと……まあ……」

どうしていいのかわからず、巧は曖昧に返事をする。

すると『警備員』の女性は胸を反らして巧に問いかけた。

「あたしの何が不満じゃん？」

巧は何を勘違いしたのか、場違いな答えを言う。

「そのプロポーションに全くの不満はありませんっ！」

「そんな事聞いてないじゃんよ……」

「ケダモノですわね」

「確かに。スタイル良いですもんねー」

「うぐっ!……」

言葉を発せない巧に、さらに続ける。

「てことは、だ」

「？」

「嬉し恥ずかしスクールライフの始まりって訳じゃん」

「「「……」」」

「「「はあ!？」」」

「ちょっと待って! また聞き捨てならないことを!？ っていうか、どういう事!？」

「だから、学校行くんじゃんか」

「そうじゃないって! つーか、人の人生左右する出来事何ですけど!？」

「よかったじゃん?“また”学校行けて。しかも、担任はあたしじ

やんよ」

「までも爆弾を投下する。」

「どこまでも横暴!? “また” って言い方からして、大学じゃない事は確かだけど、20過ぎた人間が、高校とか中学とかは、ムリじやね? ってのがオレ的見解何ですじゃ、これ如何か」

「パニックになり過ぎて、言葉がおかしいことになってますよ!」
「さすがに、憐れに思いますわね」

3人が何か言ってるのを横目に『警備員』の女性は一人呟く。

「暗さを感じない。これが、普段どおりの……………」。

あ…、名前」

「え?」

「名前だよ。っつーか、自己紹介してないじゃん!」

「そうでしたわね」

「今さらですか!？」

「てか、オレ無視かよ…」

女性『警備員』の言葉で、それぞれ自己紹介をすることになった。
「とりあえずあたしが『警備員』の黄泉川 よみかわ 愛穂 あいほ じゃん」

男は、黄泉川と握手を交わす。

そのまま流れるように、自己紹介が続く。

「私は、『風紀委員』の初春 ついはる 飾利 かざり です」

「ハナちゃん…いや、お花屋さん……」

「お花屋さんって何ですか!？ お店じゃないですか! どーしてっ、言い直してそれ何ですか!？ ちゃんと、名前で呼んでくださいよお!」

「飾利」

「ふえっ!？」

巧は初春に言われた通りに名前で呼ぶが初春は、驚いて奇声を上

げる。

「初春、何変な声出してますの？」

ふう……。と息を吐いた後、「やれやれ」と言いたげに首を振って続けた。

「そしてわたくしが、『風紀委員』の白井しらい 黒子くろこですわ」

「覚えやすい名前やな」

「白だか黒だか解らないと言われますけれど……」

「黒やな」

「どういう意味ですか？」

「色々な意味合いで」

「黒以外あり得ません！」

白井が透かさず、初春の左右のほっぺを、むにいくつと伸ばす。

「どおいう意味ですか？ うーいいいはあーるうー！」

「いたひ、ひたひれす！ しらひさん！」

2人は放つて置いて、男も自己紹介を始める。

「オレは、——巧たくみ。空と笑顔が大好きや！ よろしくな？」

巧のセリフに、3人は笑顔で返す。

「こちらこそ」

「よろしくですわ」

「改めて、よろしくじゃん？」

黄泉川が、巧の背中を叩く。

「良かったら、……ついでに、友達になつてくれますか？ とか言ってみたりなんかして」

黄泉川は、にかつと笑って快く返事を返す。

「お安いご用じゃん、な？」

「もちろんです！」

「ま、構いませんわ」

笑顔で満たされるこの空間に、黄泉川は、遠足前日の子供のような心境だった。

（「明日から、楽しみじゃん」）

初春と白井の2人も笑顔で承諾して、自己紹介もつつがなく終わりを告げようとしていた。

パンツ！ 乾いた音が笑顔で満ちたその空間を壊す。

黄泉川は咄嗟に頭を庇って周りを確認する。

振り返ると、そこには5体もの駆動鎧パワードスーツがこちらに向かって来ていた。

（「何々じゃんよ、いったい？」）

「巧さん！ 巧さん！！」

「！」

黄泉川は、初春の声に我に還る。

巧に何かあったのだと見てみると、笑顔で立っていた巧が、肩から血を流して踞っていた。

（「何で……何で……？ 何で……！」）

「何で！ 何でじゃんよ！？」

黄泉川は、途中から溢れる怒りが抑えきれず、口に出していた。

第1話 出会いは、事件（トラブル）と共に

— b e t o g e t h e r

あとがき？（笑）

第1話如何でしたでしょうか？

楽しんでいただけたなら、嬉しいです♪

まだ、始まったばかり。どんどん突っ走って行きます！！

第2話 原石…？ | i s t h i s o r e o r o r b ？（前書き）

駆動鎧から「保護する」と告げられるが、納得のいくはずが無い。
黄泉川が問いかけて、返って来たのは、自分勝手な巫山戯た答え
だった。

「先も言ったと思うのだが？」

第2話 原石…？ | i s t h i s o r e o r o b ?

駆動鎧の一人が「その人間を保護する」と告げてきた。

保護しようとする人間を射つなんてあり得ない。黄泉川は、最初、巫山戯ふざけているのだと思った。でなければ納得がいかない。

黄泉川は、怒りを抑えて問いかけた。その為、少し声が低くなつたがそんなこと気にもならない。

「なら、なぜ射つじゃんよ」

「貴様には関係ない」

その言葉の間にも奴等は、無機質に歩み寄つて来る。

それらから守るように、黄泉川は巧の前で両手を広げて駆動鎧達を睨み付ける。

「邪魔をするというなら、貴様を排除するだけだが？」
「っ！？」

駆動鎧は銃口を黄泉川の方に向ける。それを見た巧の頭に血が上つて飛び出しそうになつたが、なんとか踏み止まって、黒子と初春にそつ…と話かける。

「…黒子、オレがあいつらを引き付ける。あの人と3人で逃げろ」

「あなた、頭がおかしいんじゃないやありませんの？」

「なら、他に方法があるか？」

「白井さんの能力を使えば…」

「黒子の能力？」

「レポート空間移動能力です。けれども、一度に全員を運ぶのはムリですね。

精々2人が限界」

それを聞いて巧が黒子に先程の案を強く推す。

「そっか、ならイケる。何とかして連れて来るから、その後3人で逃げろ」

「はあ……。呆れてものも言えせんわ」

「とにかく頼んだ」

「ちよつと！」

巧はそう告げると、左肩を押さえながら、黄泉川のところへ歩き出した。

「何々ですの、全く」

黒子は、巧が温和おとなしく保護？とやらをされたところで、ただで済むとは思えなかった。このまま策も練らずに、事の成り行きを見守るだなんて有り得ない。

——駆動鎧。そんなものを動かせる人間などそうそういない。黒子は、学園都市の上層部の人間だろうと当たりをつけていたが、それでも、警告も無しに行き成り銃を発砲する人間に、安心なんてできるはずがない。

この人達は、安心できない。危険だ。一方的に暴力を奮われた。

——つまり、“ただの暴漢”だ。ならば……………

（「敵ですわね」）

そう考えて、全力でみんなを助け出す算段をつけ始めた。

3分にも満たない短い時間……。黒子からしてみれば、2分も経つ

てしまった。という思いの方が強かったが、焦ってし損じる訳には
いかない。

初春を呼んで、黒子は行動を開始する……。

「貴様、死にたいのか？ 殺しても構わないのだが？」

「すみません、ちよつといいですか？」

駆動鎧の男の言葉に割り込む勢いで、巧が声をかける。だけど、
場違いなその雰囲気は黄泉川と駆動鎧達の両者とも、一瞬言葉を紡
げずにぽかんとする。早く立ち直ったのは、駆動鎧の方だった。

「わざわざ、そちらから来てもらえるとはな」

「ちよつ……！ 何してるじゃんよ……！」

遅れて黄泉川も声をかける。だけど、巧はそれには答えずに駆動
鎧に話をする。

「オレが目的なんですよね？」

「そうだが？ それがどうしたというのだ」

「温和しく投降します。だから、この人をこれ以上傷つけないでく
ださい」

「交渉の“こ”の字も知らないのか」

「交渉じゃない。お願いしてるんです」

駆動鎧の挑発には乗らず、巧はお願いしたが、駆動鎧は、変わら
ない調子で続ける。

「お願い？ できる立場にあると思うのか？ 貴様と私。対等な立
場では無いと思うのだが？ それに、交渉事をしに来たのではない。
貴様を保護しに来たのだが？」

「それを承知でお願いして！ るん…です。何でオレを保護しに来たのか知りませんけどね」

巧の言葉を聞いて、駆動鎧の男が笑い出した。

「そうか、そうか」と言っただけで何か得がいったと言わんばかりだった。そして駆動鎧の男が、楽しそうに話始める。

「私も始めはおかしいと思ってたんだ。徒、男一人を保護だかを守る為だけに、駆動鎧を5体も出すという事に」

「……」

巧も黄泉川も、黙って駆動鎧の男の話に耳を傾けた。

「だが、話を聞いて是非とも手に入れたと思った！ 道端に転がっている奴は原石の可能性もあると……」

そこで言葉を切って、駆動鎧の頭部が巧の方をしっかりと向き直り、言葉が続けられる。

「成功例のない絶対能力進化（レベル6シフト）。Level 5の第1位、最強と言われる『一方通行』^{アクセラレーター}を超える、Level 6を、私の手で作り出してみせるっ！」

腕が すっ と伸びて、巧の喉を掴む。「っがっ!?」と喉の奥から音が漏れる。咄嗟の事に、巧も黄泉川も、反応出来ずにいた。

「私には、キミが必要なのだ。これで理由も解ったと思うのだが？」
「それは、アンタの勝手な言い分じゃないよ!!! その子は何の関係もないっ！」

「んー…」と駆動鎧の男が唸って器用に、ごつい駆動鎧の首を捻って見せた。そして、聞き分けの無い子供に言い聞かせるようにして、問いかけた。

「話を聞いていなかったのか？」

「はあ!？」

黄泉川は、本気で訳が解らなかった。何を言ってるのだ、こいつと相手を見ていると、仕方ないとばかりに懇切丁寧に説明を開始する。

「原石ってだけで、調べる価値も実験の価値もある」

その言葉に血が上った黄泉川を見て駆動鎧の男は、なだすか宥め賺す。

「まあ、待て。話は最後まで聞かないか？ 貴様、教師なのだろう？」

「ふざける——」

駆動鎧の掌が口の周りを覆う。そのままの体勢で、ゆっくりと話しかける。

「うん、これで話やすくなった」

頷いて、2人に講義しているかのように再開する。

「教諭、原石というものを、噂程度には聞いたことがあるのでは？」

原石とは、自然界で何らかの要因が重なった結果、超能力を発現

させた天然の異能者のことを指す。

通常学園都市での開発によって作られる異能者を人工ダイヤモンドとするならば、天然のダイヤモンドにあたる存在。

総数は世界で50人ほど。

原石である者の能力は、基本的に学園都市のカリキュラム過程で行使可能になるものと比べて、方向性からして大きく異なっていることが多いらしい。

特性を挙げるならば、“力が強いとは限らないが、とにかく稀少”とのこと。

「それがあれば、Level 5を超える、Level 6を作り出すことができる！私ならば、それが可能だ。原石さえあればできるのだ。素晴らしいと思わないか？」

———どう思う？ 意見を聞きたいのだが？」

そう言つて、黄泉川が喋れるように力を緩める。

「イカレてやがる。……結局、自分の都合じゃんかよー！」

「結局、凡人には理解出来ないという事だな」

「理解出来ないし、したくもない！ それよりも、……保護……するんじゃないのか」

今思い出した。と言わんばかりに驚嘆の声を出した。両手が使えれば、ぽんつと手を打ってたに違いない。

「そういう名目だったな。失礼した。…だが、結果は変わらなかったと思うのだが？」

「ふざけるなっ！ どこまで！……」

黄泉川は感情が高ぶって叫んだが、言葉が続かなかった。

（「全然守れてない！ 何の為に『警備員』に入ったのか解らないじゃんよ」）

と、力の無い自分を悔やんだ。

ズズン 黄泉川の近くで音がした。銃を構えていた1体の駆動鎧が倒れていた。その駆動鎧の肘とアキレス腱の部分に鉄の杭のような物が刺さっている。ご丁寧に銃の方にも作動しないように貫通させている。

「どこまで、おふざけになるのかしら？ いい加減、堪忍袋の緒が切れそうですわ……」

ぱっ！ と腕章を翳^{かざ}して、勇ましく登場する。

「ジャッジメントですの。動かないくださいませ。そして、そのままお引き取り願います？」

その言葉に、駆動鎧の1体が動く。

「ガキがつ！」

倒れた駆動鎧の隣にいた駆動鎧が銃を構えた。
が、

「ですから――」

黒子は、空間移動能力を応用して駆動鎧のいる座標を計算し、ス

カートの中に仕込んだ鉄の杭に流れる動作で素早く触れ、駆動鎧の肘とアキレス腱の座標へ瞬間移動させた。

「――動くな、と申し上げております。

日本語、正しく伝わっていませんか？」

ズン 重い音を立てて、さらに1体の駆動鎧が倒れた。それによつて、少なからず駆動鎧達の間には動揺が奔る。

そこへ畳みかけるように、黒子が追い討ちをかけた。

「わたくし、暴力は好みませんの」

声のトーンを落として、駆動鎧達に告げる。

「もう一度“だけ”申し上げます。

動かないでくださいませ。そして、そのままお引き取り願えますか？」

第2話 原石…？ | i s t h i s o r e o r o r b ？（後書き）

遅くなりました。待っていた方すみません。メインは、もう一つの方なので、遅くなります。

でも、色々考えております。あーしたい、こーしたいって。色々感想、ダメ出し、待ってます。

これから良かったら、お付き合いくださいませ。

黒子によつて巧は助けられたが、次は黒子達がピンチになる。
さらに、駆動鎧は街中でも手段を選ばず……

黒子は、そう言っただけでなく、虚勢も含まれていた。言葉の中には、脅しだけでなく、虚勢も含まれていた。

焦りの原因は、黒子の使用している武器となる杭の残り数が少なく、あと1体を倒すのが限度だったからだ。

「さ、その方達を返していただきますわ」

「返す？ …キミもか。キミも話を聞いてなかったのか。先も言っていたはずだが？ これを保護に来たと」

「力尽くでも構いませんのよ？」

それは名案だと頷き、鷹揚に提案を受け入れる。

「そうだな、それがいい。私は全力で逃げさせて貰うよ。キミも全力で来ると良い」

「言われなくとも、そうさせていただきますわ」

黒子が動こうとしたところで、駆動鎧の男から声がかかった。

黒子は油断無く、相手の出方を伺う。

「そうそう」

「何ですか？ いったい」

「私が全力で動いた際に、手に力が入ってしまうかもしれないが、気にしないでくれ。どうせキミらは出会ったばかりなのだろう？」

「なら気にすることは無い。思いつき来なさい」

「動くな。と言っているのと変わりありませんわね」

「んー…。そんなつもりでは、なかった。キミの気が散らないように、心配事を払拭してあげようと思ったのだが？」

「はい？ 本気で言っているんですか？ 自分自身で仰っていること理解していらつしやいますか？」

「勿論。余計な事だったかな？」

本気で言っている様子の男に、黒子は頭を抱えそうになる。

それを堪えて、はつきりと男に告げる。バカにしたような顔も、おまけにつけて。

「矛盾している事を言うだけでなく、頭もおかしいんですね」

「私はそこまで言われる覚えは無いのだが？」

「なら、その方達をこちらに返していただければ、万事解決ですわ」「そうか。これは渡す訳にはいかないから、こちらの『警備員』は返「なっ!？」——そう」

駆動鎧の腕が動いた。と思った時には「かはっ!……」と口から音が漏れ、肺の空気が全て吐き出させられ、瞬間的に呼吸がとまる。黒子の腹部に黄泉川がぶつかり、そのまま後ろに大きく吹き飛ばされた。

「すまない。少し強く投げ過ぎたようだが……大丈夫だったかな?」
今し方、自分が吹き飛ばした黒子に対して男は詫びを入れるように、軽く会釈する。

「では。私は失礼するよ」

(「思った以上にダメージが大きい……集中するんですよ、黒子!」)

集中集中集中……と、意識を集中させて計算していく。しっかりと意識を定着して——駆動鎧が踵かかひを返したところを見計らって、杭を放つ。巧を掴んでいた腕の肘と手首を貫いた。貫かれた腕は機能を失い、巧が解放される。

「っは、っはあっ……」息苦しさから解放されて、荒く呼吸を繰り返す。その巧に影がかかる。

巧は、「はっ!」となり、顔を上げて前を見ると……

「なっ!?!」

眼前に駆動鎧の腕が迫っていた。それをギリギリのところでなんとか躲したが、それどころではなかった。意識を失っている黄泉川と、立ち上がろうとしている黒子に、1体の駆動鎧が銃口を向けようとしていた。

「くそっ! テメエ!! つ山戯んなよ!」

近くに使えなくなつて棄てられた銃を拾つて、巧は駆け出した。駆け出してから、銃を構えた駆動鎧の頭に向かって力いっぱい銃を投げつける。

駆動鎧用の大きめの銃がぶつかり、駆動鎧がよろけた。その透きを逃さず、巧が走つてゐる勢いそのままに、駆動鎧の持っている銃に飛びつく。銃口が上方を向いたところで、カチッ——シュッ……と音がしたのだが、……何もなかったようだ。

（「不発？……」）

「あつ！」

もう1体いることを思い出してそちらを見ると、その駆動鎧の銃には、巧を助けた時に射ち込まれていたであろう杭が、幾つも刺さつており動かないようだった。その駆動鎧は諦めたのか、少し離れていた。

それを見てホッとしている巧のところへ、駆動鎧の男から声がかかった。

「逃げた方が良いと思うのだが？」

「え？ ……逃がしてくれるん？」

駆動鎧の男が上を指差す。

「上？」

巧は訳が解らず、上を仰ぎ見た。何か黒い点があることは解つた。（「何や、あれ。シュッて何か発射された気がしてたけど、ロケット？ いやいや、どっちかっていうと、ミサイル、っつーか、ランチャー……」）

巧はそこで、漸く気がついた。

「グレネードかよっ！」

「そろそろ来る頃だな」

「逃げた方が良いつてこういう事かい！」

巧は急ぎ黒子達のところへ走り出す。

「くそつたれ！ 街中でグレネード使うなんてイカレてやがる！」
ドンツツッ！ 巧の後方で爆発が起こり、爆風によって前に飛ば

されて、黒子が丁度黄泉川を抱き起こしているところに合流する。

「た、ただいま」

「巫山戯ている場合ですよ!？」

「いいから、『警備員』の車の中へ!」

「言い出したのは貴男のように!」

ぶつくさ言いつつも、黒子はてきぱきと動く。

「黒子、跳べねーのか？」

「自分一人なら、なんとかありますわ。二人となると、ダメージもありますし、集中しづらいんですの」

「解った。なら、走んぞ!」

「ええ!」

『警備員』の車は、通常のものに比べて丈夫だ。それに、ここにあったのは救急車くらいの大きさの車。さらに耐久性のあるものだった。

車まで、距離にして15mほど。いつもならば、なんて事の無い距離だが、焦ってしまったている今の状況だと、すごく遠くに感じられる。

そこへ、2発目のグレネードが爆発する。

「きゃっ!」

「くっ!」すぐそこや! 煙が晴れる前に、早く!」

車まで辿り着いたところで、シュッ! という音が、巧の耳に届いた。

「早よ入れ!」

「ちよっ!」押さない バタン! ——!」

車の後ろにある観音開きの扉を開けて、黒子と黄泉川が乗り込んだすぐあとに扉が閉まった。そして扉の閉まる音とほぼ同時に爆発音が響く。

「!」

バツと後ろを振り向き、パソコンのキーボードを人ならぬような速さで打ち込んでいる初春に声をかける。

「初春っ！ まだですよ！？ あの方が」

「解ってます！！！」

黒子の声を遮る形で叫び返す。その初春の目には、涙が浮かんでいた。初春も爆発で気が気ではなかった。

帰って来た黒子には、傷ができて、血も出てる。黄泉川は意識を失っていて、巧は帰って来ていない。初春は、強く気を張っていないと泣き崩れてしまいそうだった。……だけど、何倍にもして相手に返せばいい。そう思い、初春はキーボードを打ち込み続ける。

（「私のできる事で、相手を、敵を撃ち負かすんだから！」）

ピッ！ 一際高い音が車内に響き渡る。初春が顔を上げて、黒子を真っ直ぐ見て伝える。

「駆動鎧のデータリンクを乗っ取ることに成功しました！ これで駆動鎧は、ともに動作ができないはずです！ ……隊長機を除いて、ですが」

言葉の最後の方は、自分の力が及ばなかったことに悔しさを滲ませていたが、黒子は感謝の気持ちを述べてから先を促す。

「ありがと。十分ですわ、初春。……それで、隊長機は？」

「恐らく、巧さんを捕えていた機体だと思います」

「あのイカれた殿方ですか……」

黒子は、渋い顔をして呟いた。そのまま少し考え込んでから初春に告げる。

「初春は、この方を連れて逃げてくださいます」

「巧さんは、どうするつもりなんですか！」

「あの方は、わたくしが守ってみせます」

「でも……」

「それに、巧さんを欲しているんです。無闇やたらと殺したりしないでしょ。それを連れて逃げる方が危険ですわ」

「ならば！ 黄泉川さんを起こして——」

「もう少し冷静になれませんか？ 頭を打ってるかも知れませんかよ？ こうやって動かす事さえ危険なのに、無理に起こしてしまえば危ないですわ。銃弾が飛び交う中寝かせておく方が危険な為に、一時的に動かしているのに過ぎませんわ」

「……」

黙り込んでしまった初春に、黒子は優しく諭すようにお願いする。
「初春。わたくし一人では、助けられませんわ。あなたの力が必要なんですの。力を貸してくださいまし、初春」

黒子の言葉に、先程まで強張ってた初春の表情が少し和らぐ。

「すみません、白井さん。ちょっと緊張してました。えへっ」

初春の表情を見て安心した黒子は、動き出す。

「この状況で笑えているなら上等ですわ。さあ、行きますわよ！」

「はい！」

その時、扉の外から声が聞こえてきた。

「キヤアツ！？」

「——！？」

「だ、大丈夫ですか！？ しっかりしてくださいっ！」

「誰か来たんですの！？」

黒子は慌てて扉を開けて先ず目にした光景に一瞬声を失い、初春は驚いて「ひっ！」と息を吸い込んだ。

二人が見たのは、爆発、爆風による火傷と、べとついた血に塗れて、意識の無い巧。その巧へ必死に声をかける女学生の姿だった。

「巧さん！」

初春が悲痛な声で呼び掛けた。その初春の声で巧の傍らで声をかけていた女学生が振り向いた。女学生の目と、黒子と初春の目が合う。

「「佐天さん！」」

「初春！ それに白井さんまで」

そこにいたのは、初春の級友かつ親友の佐天^{さてん} 涙子^{なみこ}。長い黒髪に、白梅の花を模した髪飾りを着けている少女。

（「運が良いのか、悪いのか…複雑ですわね」）

「話している時間がありませんの。佐天さん、その方を運んで逃げてくださいます」

「えっ？ ええっ！？」

「佐天さん、行きましよう！」

「あーん、もう！ 解った、解りました！ 行くよ、初春」

初春は驚いている佐天を促した。

考えても仕方ないと、頭を切り替えて、佐天は、初春と共に移動を開始する。

が、

初春達が移動しようとしていた方向から、爆風が吹き荒れた。

「ッ！！」

「初春！ 佐天さんっ！」

「それを持って行かれては困るのだが？」

火煙りに紛れて、男が現れる。

「つくっ！ もう来ましたの！？」

（「手加減できませんわよ！」）

近くで横倒しになっていた大木と信号機に手を触れ、相手の座標に瞬間移動させる。

「むっ！？」

転移した大木が出現したのは、駆動鎧の顔の前。10cmと離れていない距離。駆動鎧の男は驚き、距離を開ける為に後ろへ飛ぶ。だが、いつの間にか男の背後にも信号機があり、少し跳んでから男の背中に衝撃が伝わる。着地する間も無く、男の頭上に影がさしか

かっていた。

「くっ！……」

影に気づいた男が顔を上げると、高い所から落とされたのか、見上げた時には豆粒のような大きさだったものが、着地する頃には、車が目と鼻の先にあつた。

駆動鎧の男は、回避する時間も与えられず……軽い地響きの後、一瞬静かになる。……ドガン！！！！ 静寂を破るかのように爆発音が耳を叩いた。

オレンジ色の灯りに照らされて、黒子は、鋭く目を細め呟く。

「わたくしの友人達を、死なせる訳にはいきませんの。多少の無理は、押し通しますわ」

熱風によつて汗ばんでいた為、黒子は後ろ髪を両手で掻き上げ、髪に風を通して息をつく。

「ふう。……さて、蒸し焼きになる前に回収して差し上げませんと」

まだ、小さな爆発が時折起こつていた。

チリツと脳内が焼けるような痛み^たに足元がふらつき、顔をしかめるが、「まずは、火を消さないと……」と、辺りに視線を巡らせた途端、黒子は横殴りに吹き飛ばされる。

「うぐうつつ！？！？」

壁に衝突して、チカチカとする視界の中、幽鬼のように佇む駆動鎧がいた。駆動鎧の男は、銃を構えて黒子に告げる。

「貴様を殺して、あの男を回収しようと思うのだが？」

「結……構、です。遠慮、致しますわ。ですから、もう帰つ、て……くださいな」

先ほど、無理な力の使い方をした黒子は、身体に負荷がかかり、能力を使うどころか体を動かすのさえ厳しい状態だ。空間移動能力は、演算が複雑ゆえに時間がかかつてしまい、精神状態が影響するという欠点があり、大きなダメージを負っている今の黒子ではどちらにしても能力が使えない。

「では、貴様も爆発に巻き込まれてみるといい」

男は呆れたようにため息を吐いて、言葉と共に引き金を引く。弾頭は、黒子目がけて突き進む。

黒子は、強く目を瞑る。叫びそうになるのを堪えて想った。願った。諦めにも似た気持ちで…。

（「最後に一目、あなたを——」）

こんな感じになりましたΣ(´・`;) ;)
なんか、はじめっから、えらい事になってんなあ。

第4話 ヒーロー… | s h e i s h e r o … (前書き)

お久しぶりですw

今回は、巧くん活躍無し…。代わりにとある方が、、、乞うご期待？

あー、もつとがんばります！

感想、アドバイス等何でもくださいまし、それが力になります。ぜひともお待ちしております。

m (—) m

第4話 ヒーロー…… — s h e i s h e r o ……

黒子へと放たれた弾は、黒子に届くことなく、青白い光が弾頭を貫き爆砕した。

爆風は、2発目の青白い光が音速で通ることにより起こった風によつて相殺される。それに加え磁力で集められた鉄、金属の壁に阻まれて届かなくなっていた。

爆煙の中から、少女の声が響いて来る。

「何してんのよアンタ……」

「ん？ 何者だ？」

黒と灰色の煙の中から電光が奔る。それはまるで、雷を落とす前の積乱雲だった。バチバチっと放電が激しくなっていく。最早、電光なんて生易しいものなんかじゃない。雷光の塊だ。

積乱雲に包まれて感電死してしまうんじゃないかと対峙した相手を萎縮させるだろうそれを見て、黒子は頬を緩めた。

煙が晴れていく中徐々に姿が見えてくる。

駆けつけたのは、黒子と同じ常磐台中学の制服を着た少女。

「私の友達に……」

黒子の愛しい——

「お、姉様っ……」

弱々しい黒子の台詞を聞いて一気に怒りを解放する。

「…何してくれてんのよアンタあつ!!!!!!」

雷光は、男の銃を焦げ付かせて使い物にならなくした。

男は手を横に軽く広げて、自分は悪くないんだよとアピールしているかのようだ。

「これはこれは……常盤台のエース、学園都市第3位の電撃使い（みさか）エレクトロマスター）である『超電磁砲』こと御坂（みさか）美琴嬢とお見受けするのだが？」

「だったらなんだっていうのよ！」

「君には関係ない……と言いたところだが、友人達を連れていくといい。」

私が用のあるのは、それだけだ。邪魔さえしなければそれでいい」

「友人、…達？」

御坂が振り返ったその先に、初春と佐天が。さらには、何度か顔の合わせたことのある『警備員』の黄泉川…それと、……血塗れの男性。

御坂は、静かな…けれどもよく通る声で男に問う。

「ねえ、“それ”って何？ 何に対して用があつたわけ？」

「ん？ そうか。先ほどはいなかったのだな、失礼した。」

用があるのは、そこに転がっている真っ赤に染まった原石だ」

バチツ と火花が散る。

「何で…こんなにボロボロなの？」

「あ、あの方…は、みんなを守るつ、としてくだ…さいました。それ、に、そいつがい…きなり発砲して…それ…なのに、」

御坂は、黒子に近づいて頭を撫でやる。それに安心したのか、黒子は静かに目を閉じた。

「黒子…、大丈夫だからゆっくり休んで」

「邪魔者を片付けようとしたら、それが勝手に盾になったってだけなのだが？　気にすることもあるまい」

ギリッ　噛みしめている歯に力が入って音が鳴る。

御坂は、背中越しに男に話しかけた。

「あの人をどうする気？」

「話しを蒸し返さないで欲しいのだが……まあいい。進化させるのだ」

「進化？」

「Level 5を超越する存在…『一方通行』（最強）を超える最強最悪の能力者へと！！」

「あの人がそう言ったの？」

「アレの意思は関係無い。偉大なる実験の被験体選ばれたんだ、文句などあるわけが無いと思うのだが？」

「アンタ、何勝手なこと言ってるのよ！」

御坂が振り向いて、男を睨み付けた。

男は気にも止めずに、もうお終いだと、話しを切り上げようとした。

「そろそろ御違おいとまさせていただくよ」

「行かせると思ってるの！？」

シュッ　男が腕を構えてワイヤーを射出する。…が、御坂は簡

単に躲す。

「そんなの当たらないわよ！」

「いいや、大当たりだ」

「え？」

キューーン という金属音と共にワイヤーが巻き取られる。それと同時に男は退却を始めた。御坂も電磁力を利用して加速する。

「ちよっ！ ……逃がさない！」

ふっ と御坂の横を影が横切った。

「っ！」

「気をつける、原石が壊れてしまう」

「なっ！？」

巻き取られたワイヤーの先には、巧が捕まっていた。駆動鎧は、どんどん速度を上げていく。

（「このままじゃ、あの人は実験に使われる。何としても止めないと！」）

ワイヤーの金属に磁力を発生させて、御坂自身を吸い寄せ跳躍して近づく。

「捕えたっ！」

男が何かを取り出して、御坂に見せつけながら話す。

「引き返した方がいいと思うのだが？」

「はい、そうですね？　言うとも？」

「これ何だか解っているか？――」

男は無造作に手の中にあつた黒い塊を先ほどいた場所へと放る。

「――ハンドグレネードだ」

「こ、のっ！？」

「早く戻らないと手遅れになるぞ？」

「くっ……！」

御坂は、飛び出す前に一度巧の顔を見た。忘れないようにと頭の中に刻みつける。

「絶対に助けるから」

御坂は、巧に届くように強く、救えなかった自分に言つて聞かせるように強く強く告げる。

告げてから、磁力を反発させて元来た道を一気に戻った。

着地しながら2枚のコインをトスして、空中にあるグレネードを狙い――撃つ。

指で弾いたコインは、御坂の能力によって青白い光を帯びて音速で射出された。まさしく超電磁砲。

さらに、爆風や熱が来ないように最大出力である10億ボルトの雷撃を放つ。

御坂の悔し紛れの叫びと共に……

「ちつくしょおー……！！！！」

御坂から逃げ切って、男が連絡を入れる。

「目標の物は手に入れた。すぐさま実験の準備に取り掛かれ」
「はっ！」

「それと、医療班を呼んでおけ」
「了解しました！」

——プツツと通信を切って、男は一人言ちた。

「どんな力を持っているのだ？ 死んでくれるなよ…。まだ始まってもいないのだからな」

「ん…」

「白井さん！」

「黒子？」

薄らと目を開けた黒子に、初春と御坂が声をかけた。

「お姉、さま？…ここは…」

「病院です。白井さん、大丈夫ですか？」

「わたくしは大丈夫ですわ。…佐天さんこそ、大丈夫何ですか?」
「わたしは全然っ平気です! 掠り傷くらいしかありません!」

黒子の目が覚めたのは、あれから2時間ほど経ってからだった。
日はもうとつくに沈んでしまっている。

黒子は、ふと思い出した。巧のことを。

「! 巧さんは!?」

その言葉を聞いて、御坂は少し顔を俯かせる。
そして、ぼつりと言う。

「ごめん、黒子……助けらんなかった。あの人」
「そう……ですの……」

みんなが暗い顔しているのを何とかしようと、佐天が何か切り出
そうとしたところへ、ドアが開いて誰か入って来た。

「何々じゃんよ、みんな暗い顔して。ここは、葬式会場じゃん?」

現れたのは、黄泉川だった。

その黄泉川に、御坂と佐天が指差した。

「あ。『警備員』の」

「倒れてた人?」

「お。そっちの2人は、自己紹介まだだったじゃん。

『警備員』の黄泉川 愛穂だ。よろしくじゃん?」

「よろしく願います! 佐天 涙子って言います。良かったで
す、何にもなくて。」

「幸いにな」

「御坂 美琴です。よろしく願いします」

「ああ」と握手をして、黄泉川は礼を告げる。

「みんなありがとじゃん、助けてくれて。…ホントなら、先生が、
大人が助けてやんなきゃなんないのにな」
「気にし過ぎですって」

初春の言葉に黄泉川は、頬を掻きながら答えた。

「…かもな」

「それにしても、黄泉川さん」

「ん？ どうしたじゃん」

「さすがにさっきのは、ないんじゃないかと思えますわ」

黄泉川は理解できずに首を傾げていると病室の扉が開かれ、

「そうだね。よりによって、生命を救う戦場である病院をそのよう
に言わないで欲しいね？」

と声をかけて来たのは、カエル顔の医者。

「やっぱり…ゲコ太よね？」

「それはコメントしづらいね」

御坂の台詞に周りは苦笑する。

「お姉様、失礼ですわ」

「構わないよ。それより、白井君。君は無茶な力の使い方をしたね

「？」
「！いえ、あの時は――」
「したね？」

カエル顔の医者に気圧されて素直に返事をする黒子。

「……はい」
「脳に負担がかかってたよ。次からは気をつけるんだね？」
「解りましたわ……」
「そうよ、黒子。アンタ無茶し過ぎよ？」
「はあく。お姉様には、言われたくありませんわね」
「なっ！　どういふことよそれは！」
「いつもいつも無茶なさるのは、どこのどなたでしたかしら？」
「うっ……」

二人の言い合いが激化する前に、佐天が止めに入った。

「まあまあ、お二人さん。落ち着いて」
「そーですよ、すっごく心配したんですから！」

「じゃあ、アタシは行くから。ガキ共、早く帰れよ」

カエル顔の医者に向き直って黄泉川は挨拶をする。

「世話になったじゃん」
「気にしなくていい。それが仕事だからね？」
「あの……」

御坂が何か言おうとしたのを察して黄泉川は、御坂の頭にぼんつと手を置いて答えた。

「お前らガキ共が背負うことじゃない。アタシが助けて見せるじゃん」

そう言つて手を離して、黄泉川は去って行く。その背中越しに力エル顔の医者達は声をかけた。

「ケガしていたら連れておいで。生きている限りは、必ず救つて見せるよ」

「ああ。その時は頼むじゃん」

御坂が手を握り締める。

（「助ける！ 絶対に！」）

そう考えていた御坂に、普段ならば使わない低い声がかかった。

「お姉様」

「え？ 何？ 黒子」

「一人で突っ走ったりしないでくださいまし」

「何言つてんのよ、わけ解んないわ。…んじゃ、私先帰ってるわね」

黒子の指摘に御坂は恍けて病室から出ようとしたところで、黒子はがしつと御坂の腕を掴んで止める。

「お姉様、いったいどこへ行くつもりですか？ わたくし達も巧さを助けて差し上げたいんです」

「……」

御坂は、齒を食い縛って黒子の話を聞く。

「一時の感情で突っ走ったところで結果が得られるとは思えませんわ」

「解ってる。けど、約束したの！絶対に助けるからって」

御坂は見ていた。見ている事しかできなかった。すぐ目の前にいたというのに助ける事ができなかった。

(「……」)

御坂の悲痛の思いはここにいるみんなが感じていた。あの時私が…と、みんなifの過程で考えた。けれども、諦めてなんかいない。

「御坂さん、焦っちゃダメです。私は搜索とか得意ですから、すぐに見つけてみせます！任せてくださいっ！」

初春は、自分の胸をドン！と叩いて……噎^むせた。

「けほけほっ……」

「はいはい、初春！頼りないよ〜？」

「締めませんわね……」

けど……と、佐天がみんなの気持ちを代弁する。

「絶対に助けましょう！その巧さんって人を……！」

「ええ」

「早速明日から行動開始ですわ」

「私は、『風紀委員』の支部に一度戻りますんで、少し調べてから帰りますね」

「じゃ、私は初春の為に美味しい晩ご飯作ってるね」

「わたくしは、お姉様と寮に戻りますわ」

「ごめんね？ 初春さん」

「私が勝手にするだけですよ。それに、私ができるのはそんなことくらいですから」

「みんな、できることをやればいいんだよ。というわけで、——解散！」

この日は、そのまま解散してみんな別れた。

——だけと思いは一つ。

巧を救い出す。

べちゃっ　と何かが落ちた。

「あー！？」

ポタポタ　と雫が流れていく。……堕ち、た？
ごろっ　と何かが転がる。

「あゝあゝー！！！」

プチッ　頭の中…何かが……

「ああーアっああアアアアーあうああーっ！！！！！！」

夜の静寂に絶望的な叫びが響き渡る。

だけどその声は、目の前にいる人間達以外、誰に届くでもない……
 その人間は悦に入つた表情をしていた。最早人で無し……化け物だ。
 薄れゆく意識の中、救いを求める。……そして目覚め始めるその
 力。最強最悪。“最狂”“最恐”になる得る。

それでも彼女達は、全力で救うのだらう。

第5話 異常死

— a b n o r m a l i t y d e a t h ・ (前書き)

お待たせ致しました。

今回は、いつもより、ちょい長いくらいです。

微かにダークな感じ？ かも…

それではどうぞ。

第5話 異常死

— a b n o r m a l i t y d e a t h .

巧を探し始めてから、一週間が経過していた。

「はあ~~~~……」

深ああく、ため息を吐いたのは、黄泉川愛穂。今現在は、黄泉川先生として、授業中……

気になった生徒の一人が、手を上げた。いつも世話になっている先生に何かしら出来ないかと、思い切って尋ねた。

「黄泉川先生」

「どうしたじゃん？ 何かあったのか？」

「いえ、黄泉川先生こそ、何かありましたか？」

「ん、そんなわけではないじゃんか」

キンコーン♪ カンコーン チャイムが鳴って、授業の終わりを告げる。

「じゃ、終わり。次は、小萌先生じゃんよ」

黄泉川は、手を振って教室を出て行った。

職員室に着いてからも黄泉川のため息は、治まらなかった。
それを気にした同僚の月詠^{つくよみ} 小萌^{こもえ}が声をかけた。

小萌は、135cmの身長と童顔であるのだが、年齢は黄泉川より上の壮年の女性で、立派な成人である。

「黄泉川先生、どうしました？」

「ありがと小萌先生、何でもないじゃんよ」

「一人で抱え込まないでくださいね？ わたしは、いつでも黄泉川先生の味方ですから」

「ああ——ピリリリッ！」

黄泉川に『警備員』出勤要請がきた。

「悪い、小萌先生」

「あ、はい」

黄泉川が急いで職員室を後にした。

「気をつけてくださいね」

黄泉川がやって来たのは、第19学区。第19学区は、再開発に失敗し急速に寂れてしまった学区。全体的に街並みは古臭く、現代では既に廃れてしまった蒸気機関や真空管等を調べる研究機関が存在する。その研究機関施設の内の一つで事件があった。

黄泉川は、初めは巧のことが解ったのかと内容を聞くと、この施設にて、能力者の力によって、大量殺人が行われたというものだった。

未だ処理仕切れていない死体を見て愕然とする。

「うっ……何々じゃんコレ……」

黄泉川の見たのは、何か相当鋭利な刃物で切り刻まれた人だった物。全身が凍って砕かれている人だった物。身が爛ただれて骨が剥き出しになっている人だった物。下半身が凍って、上半身が酷い火傷の人だった物。何をどうしたらこうなるのか、誰も理解出来ずにいた。生きていた人間もいたようだが、これを行った能力者の仕掛け（一種の罠）によって何かしらの死に方をしたみたいだった。『警備員』隊員の目の前で死んでしまった者もいたらしい。奥に進むに連れて、細かい芸が出来るようになっていったのか、拷問のようなことも行われたようだ。

（「酷い…」）

この施設の研究員総勢250人。

警備の兵が300人。

その内、死者497名。

行方不明者53名。の大惨事。この施設でどのような研究が行なわれてたかは解らなかったが、行方不明者の一人、名前と顔は解った。

化科かが学まなぶこの研究所所長。

もう一つ解ったこと……壊れた駆動鎧が、幾つもあるという事。

そして、…捨てられてあった、衣服。

「……………どういことじゃんよ」

黄泉川のその言葉に答える者はいなかった。

「固法先輩、この辺りは寂れてしまった為に似たようなところが多いので探すのは難しく、第19学区に設置されている防犯カメラでも、それらしい影は見つけられませんでした」

「その為に私がいるんでしょう？」

「はい。でもすみません、先輩にまで迷惑を…」

「こらっ、後輩の面倒を見るのは先輩の役目だし、それ以前に…そんな話を聞いて、放って置けるわけじゃないじゃない。ね？」

「ありがとうございます！ お願いします！」

「さて、と…。捜し出すわよ」

固法 美偉。

黒髪のセミロングヘアに眼鏡をかけ、着痩せするプロポーションの良い容姿を持つ、巨乳のクールビューティー。

第177支部に所属する『風紀委員』。高校生で黒子や初春の先輩にあたる。面倒見の良い人間で、かつて黒子の新人研修を担当した時から彼女の性格や問題点を見抜いた上で対処しており、黒子も頭が上がらない。

能力はレベル3の『透視系能力』。相手を透視することで隠し持っている武器などを発見する。喧嘩もそこそ強く能力との併用で不良程度は簡単に撃退できる。

この透視系能力を使って壁などを透かして、ある物を捜し出そうとしていた。

「……………」

「どうですか？」

「待って……………」

！ あった

固法が静かに声を上げる。

「ホントですか!？」

「この寂れているはずの研究所に、何体もの駆動鎧が」

「急ぎましょう!」

「そうね」

(「不可解なのは、そのどれもが壊れているってこと…」)

「固法先輩!」

「解ったわ」

着いた研究所の入り口には、『警備員』が十数名おり、黄色いテープが幾重にも張られているところだった。

物々しい雰囲気の中、初春は見知った顔を見つけた。

「黄泉川さん!」

「おい、こんなところで何やってんじゃないよ?」

黄泉川の鋭い眼光に、初春がしどろもどろになって言葉を探しかねていると、固法が代わりに説明をした。

「黄泉川さん! ですね? 初めまして、私は、こちらの初春さんと白井黒子さんの先輩をさせていただいてます、『風紀委員』の固法美偉です」

「ああ、見て解ると思うが、『警備員』の黄泉川愛穂だ。こんなところで何々だが、よろしくじゃん」

「こちらこそ、よろしく願います。」

それで黄泉川さん。貴女も、巧さんという男性を探していると聞きました」

「ん、まあな…。それが、どうしたじゃん？」

お互いに挨拶を終え、黄泉川の返事を確認してから、固法は説明を再開した。

「巧さんを連れていたかどうかは定かでないのですが、ここ最近…、だいたい一週間くらいでしょうか、駆動鎧が第19学区へと入ったようなんです」

黄泉川は、多少の動揺は見られたが、予想はしていたようだ。それでも、苛立ちは抑え切れなかった。

「もしかしたら、と思っていたが…。気が滅入るな……。くそっ！」
「ど、どうしたんですか？」

「確かに駆動鎧は、あった。全て壊れていたけどな」

「え？」

「…」

「巧さんは？ 巧さんはどうなったんですか！？ 巧さんはいましたか！？」

「いなかったよ。だけど、いなくて良かったと思ってる」

「何かあったんですね？」

固法の問いかけに黄泉川は言い淀んでしまったが、告げなければ危険に曝してしまうと、起こった出来事を話すことにした。

「ああ。この研究所で能力者による、大量殺人があった」

「「！！？！」」

「研究所にいた研究員と警備の人間が、死亡もしくは、行方不明と

なっている。被験者——つまり、人体実験を行っていたとして、そう簡単にその証拠が見つかるとは思えないじゃん」

「それじゃあ、もう……」

「初春さん！ その人がここにいたってわけじゃないんだから、悲観的になってちゃダメよ？」

「そうじゃんよ。いたかどうかもわからないからな」

「はい！ そうですよ」

「だがしかし、だ。『風紀委員』だからって、これ以上は関わるなよ？」

「でも！」

「殺され方が異常なんだ！ ……危険過ぎる」

黄泉川は、釘を刺しておく……その為に話したのだから。

「黄泉川さんの言う通りだね。どう考えても、私達の手を終える相手じゃないわ」

それに合わせて固法も初春を抑える。感情的になってしまわないように。

「だけど初春は、納得がいかないと顔に出しながらもきっちり返事は、返した。」

「解りました。私、白井さんに連絡しておきます」

（「解ったって顔じゃないじゃんよ……はあ……」）

初春は、少し離れてから携帯を取り出し、黒子の携帯番号を押していく。

初春と固法が出た後の『風紀委員』第177支部。
黒子の前に初春が残っていたメッセージがあった。

「あの駆動鎧の移動先が解ったかもしれないそうですの」

「ホントに!？」

「落ち着いてくださいませ、お姉さま。その確認に行ったようです」
「まさか、一人で？」

「お姉さまじゃありませんのよ？」

「うるさいわね。…それで？」

「固法先輩も付いてますわ。確認次第連絡があるようですが、わたし達もそちらへ向かいましょう」

「もちろんよ!!」

能力を使って駆ける二人は、ぐんぐん第19学区へと近づいていた。
った。

突如、ひんやりとした風が2人の間を抜けていく。何処からその風が来たのだろうか、御坂が視線を動かした先に――

「――いた」

「お姉さま？」

「あの人、いた!」

「! 本当なんですの!」

「ええ、間違いないわ」

（「しっかりと刻み込んだもの……。
だけど、あの格好は…」）

「急ぎましょう！ お姉さま」
「そうね」

何だか不安に苛まれつつも、巧らしき影を見かけた路地へと入った。

「……」

「いませんわね……」

日の光に反射して、キラッ と何かが光った。

「ん？ 何かしら？」

御坂は、それを手に取ってみた。

「氷……よね？」

「ですわね」

「なんでこんなところに……」

御坂は、何だか腑に落ちず考え込んでいると、横合いから黒子の切迫した声が聞こえてきた。

「お姉さま、血痕があります。それも、まだ新しいものです」

御坂が黒子の視線の先へと目わやると、壁にこべり付いた血が、ゆっくりとしたペースで どろり と流れていた。

「新しいって、コレ……！」

「ええ、まだ固まり始めてもいません。つまり……」

「「!!」」

いきなり携帯の着信音がなり、御坂と黒子を驚かせた。

携帯の液晶には、初春飾利の名前が浮かんでいた。ピツ とすぐさま通話ボタンを押して、黒子は初春に恨みがましい声を投げ掛けた。

「うーいいーはあーるー…」

「何々ですか!? びっくりするじゃないですか!」

「こっちのセリフですわよ。」

それより、そっちに向かっている途中で、少し問題が発生した為、『警備員』に要請をしようと思っていたところでの「

黒子の言った事に心配そうな声が初春から返ってくる。

「大丈夫なんですか?」

「何ともありませんわ」

「よかったです」と安堵の息を吐いて、予測した目的地での起こっていた大惨事の事を話す。

「問題と言えば、こちらもかなり大変な事になってます。その事を伝えようと思って連絡したんです」

初春は少し声のトーンを落として、続きを話す。

「その…、目的地には辿り着きました。そこには、探していた物と同じ型の駆動鎧はありましたが、」

「巧さんはいなかったと」
「そうなんだ…」

黒子も御坂も残念そうに、言葉を漏らす。

「それもそうなんですが、固法先輩に聞いたところ駆動鎧のどれかが壊されていたみたいですし、中にいた研究員、警備員は全て死亡もしくは行方不明だそうです。その死に方は、異常だったみたいなんです」

「なんですの…それ。」

だから、先ほど初春はあれほど安堵していたんですね」

「はい——あ」

「もしもし、突然失礼するじゃん」

話しの途中で、黄泉川が電話を代わって話した。

「黄泉川さん？ ですか？」

「ああ。一応、念のため釘を刺しておこうと思ってな…」

「どうしてなんですの？」

「この子、お花ちゃんにも釘を刺したんだけどな…納得いかないって顔してたからな」

「お花ちゃんじゃありません！」

「あー。で、だな…」

黄泉川は声を低くして伝える。

「お前達が探しているだろう駆動鎧は、全て壊れていた…いや、壊されていた。」

この施設の研究員総勢250人。

警備の兵の総勢が300人。

死者497名。

行方不明者53名。

死亡者の何れもが、異常な死に方で、バラバラなモノもあれば火傷のあるモノ、凍っているモノ…その全てが何らかの能力によって殺害されたと思われる…」

「全滅!？」

黒子は驚きに目を開く。黄泉川にまでその様子が伝わる。

「そうだ。けど、全滅——は、結果そうなたって感じだけど、今回ののは、意図的に殲滅した。と見た方が正しいだろうな…」
「酷い…。人のする所業ではありませんわね………」
「……」

黒子の横に立っていた御坂も辛そうな表情になっていた。

「その死亡者7、8割方の共通点は、凍っていたこと」

「凍って…」

「何らかの能力ってというのは、恐らく“氷”」

「“氷”……」

御坂と黒子は、二人して御坂の手元に持っていた氷を見て……急に怖気が奔り、氷を手放した。

「どうしたじゃなか？ 何かあったのか？」

「！ い、いえ、なんでもありませんわ」

黄泉川の心配そうな声に、黒子は青白い顔をしながらも答えた。

「そうか。ならいいが、お前らガキ共が首を突っ込んでいい話じゃないってことは理解したか？」

「それは……」

「レベル4だ5だって言ったところで、ただのガキじゃんよ」

「……」

固法は、理解していた。自分で負えないことなんて、沢山あること。

御坂、黒子、初春だって理解はしているし、何より怖い。特に御坂、黒子の2人はそうだ。高レベル能力者なら、誰もがぶち当たるであろう壁。

大能力者 Level 4は、軍隊において戦術的価値を得られる程の力。

超能力者 Level 5は、学園都市でも七人しかいない、一人で軍隊と対等に戦える程の力。

そんな力を持ってしまえば、一度は思う——人を殺してしまうかもしれない……と。

Level 4以下の能力者であろうと、使い方によっては、人を殺すことなんて“容易い”。

Level 2だろうと、スタンガン以上に強力で、スタンガンによる死亡例だってあるのだ。

考えてみてほしい。スタンガンを心臓の場所に使用し続けても、何ら害はない。と、どれだけの人間が答えられるのだろうか。

だから、いろんな意味でその犯人と向き合うのが恐ろしいのだ。黄泉川は、先生であり『警備員』。そんな子供達を何人も見てきた。それを承知で、態々告げたというわけだ。

「解ったら、後は任せるじゃん——」

「解り……」——と言っても、また今回みたいに勝手な事されるくら

いなら、あたしの目の前で何かしてもらった方が、少しは気が楽じゃない?」…はい?」

「どうせ、巧の事諦めてないんだろ?」

「「勿論」(ですわ、です)!!」「」

初春、黒子と御坂も電話の向こうでの即答に、黄泉川は呆れ果ててため息を吐き――

「はあ〜。ホントに馬鹿じゃんよ…。まるでΔ(デルタ)フォース、いや、あの佐天って子を合わせて□(スクウェア)フォースか?」

「スクウェア?」

「4バカってことじゃん」

「不名誉極まりないあだ名ですわね…」

(「小萌先生の大変さが、少しは解った気がするじゃんよ…」)

――小萌の凄さを理解した。でも楽しそうだ。自分も、絶対その大変さを経験してやろうと、巧を見つけ助け出してやろうと、改めて決意した。

だけど、嫌な予感が晴れない。氷の能力なんて誰も聞いたことがなかった。そんな能力があれば有名になっているはずだ。

Level 0、一部で原石と言われる人間、かみじょう上条、とつま当麻――

あらゆる異能を打ち消してしまう能力、『幻想殺し(イマジンプレイカー)』。性質上、システムスキャン検査結果には反応せず無能力者(レベル0)認定を受けたが、その能力故に学園都市で知らない者は無く、都市伝説と化しているくらいだ。

“氷”の、それも武装した多数の人間を相手にできるほどの力を

持っていて、それが知られていないのは、可笑しいだろう。異質だと言える。

だけど、学園都市が隠蔽していたと考えれば？ 最近、能力開発された人間だとしたら？

どちらにしても異常だ。学園都市がそんな事をするのか？

…この間の事を考えると否定できない。では、入学などを終えたこの時期に能力開発？

…この時期に能力開発可能だろう人間に、みんな心当たりがあった。

“氷”？ の能力。

(「「「「原石……。——巧(さん、あの人)「「「」」)

考えてしまった可能性に、嫌な気持ちは、晴れない。太陽を隠し始めた暗い雲が、みんなの心を現しているかのようにだった…。

第5話 異常死

— a b n o r m a l i t y d e a t h ・ (後書き)

あとがき？ (笑)

亀更新します。(宣言!?)

1000文字程度でもアップすべきなんですか？ 5000基
本とあるは、アップしてます。(MUV-LUVは、1万〜2万)
時間かかつちやいます。

(。・ω・。)()

一言でも構いません、何か言葉をいただければ、スピードアップ
します(^皿^)

よろしければ、お願いします。

第6話 恐ろしい犠牲を強いる絶対的な力や存在

— J u g g e r n a u t

今回は、いつもの半分くらい。そして重い、暗いかな。少し時間を戻って研究施設内での話。

それでは、どうぞ。

第6話 恐ろしい犠牲を強いる絶対的な力や存在

—Juggernaut

黄泉川『警備員』達が、第19学区の研究施設に辿り着く数時間前……

第19学区研究施設にて。男が声を上げた。

「これの実験結果は、まだ出ないのか？」

「はい。昨夜、強いショックを与え過ぎたせいか、あの後深い眠りについて目が覚めず、漸く先ほど目覚めたところです」

「で？」

「能力の覚醒事態はしているのですが、未だにどのような能力なのか掴めていません。が、あれは、感情で動くタイプであり、それを利用して誘発させれば、何とかなるかも知れません」

僅かに考えて唸ったが、すぐ結論に至ったようだ。

「置き去り（チャイルドエラー）を使えばいい。何人かいるのだろう？ 死んでもまた拾ってくれば済む話だし」

部下はあっさり承諾した。必要な犠牲だと。ニヤリと口角を上げた。

「解りました。子供チャイルドエラー、使いましょう」

研究施設の一室に巧はいた。ガラス張りの部屋で鎖に繋がれていた。

ゆっくりと目を開ける。「目を開けられた」…生きていることに安堵する。だけど、ただ息を吐く^はだけでも億劫になった。

「……」

巧への能力開発は、巧の精神を摩耗していった。もう既に笑うことはほとんど無くなり、瞳の輝きは失われて濁った光りを灯していた。

ガチャツ 部屋に研究員数名と、10歳に満たないであろう子供が2人入って来た。

「何が始まるんだ？」と訝しんだ目で見てみると、研究員の一人が、いつの間にか手に持っていたナイフで、いきなり少女を斬り付けた。

「あああつ!!?!?!」

「! なっ!?!」

「やめろおっ!」

「お兄ちゃん、助けてっ!」

他の研究員が少年を羽交い締めにして、動けないようにする。

「待ってる、兄ちゃんが今助けて——」「いいああ、いいいっ!」
「!?!?!」やめろっ放せえっ!」

「さ、刺しやがった…!」

目眩を覚えた。巧は、目の前の現実が信じられなかった。その時、部屋の外で見ていた男が巧に声をかける。

「助けなくていいのか？ 早くしないと…死ぬと思うのだが？」

「その声……お前……！——オレの…せい、か」

「そう思うならば、さっさと能力を解放すればいい」

「できるならやってる！ その子達を助けてる！」

「ほら、早くしないと…」

男が目線で合図を送った瞬間、パン！ と濁いた音が響いた。

「あ」

それは、少女が発したのか巧が発したのか、声を漏らしていた。2人共に目を見開く。

少年を羽交い締めにしていた研究員が手を放すと、少年はゆつくりと倒れた。少年が倒れたところから、赤い色に染まっていった。

「お兄…お兄ちゃん！？ お兄ーちゃん！！ お」

泣き叫んでいた少女の言葉が途切れた。ナイフを持った研究員が、兄に近づこうとしていた少女を背中から刺したのだ。

「兄、ちゃん…」

「ああ…」

少女の伸ばした手は、兄に届くことはなかった。ガラスの向こうで、男が一言呟いた。

「…ああ、死んでしまった」

その瞬間、巧の中で何かがキレた。自分だけの現実が確立されて

バーソナルリアリティー

なかった。

巧はその男の足を凍らせて思った。「もつともつともつと、ぐちゃぐちゃにしてやりたい」と。その思いが通じたかのように、蒸気が出始めた。

「あつっ！ 蒸気？……ははっ！

——高熱で焼け爛れ死ね！！」

蒸気は巧の前方から拳銃の男に向かっていき、高熱の蒸気が上半身を包み込んだ。

「ぎゃあああつー！！！」

蒸気で肉の焼ける臭いが立ち込めた。蒸気に触れた鉄が変形していた。そんなものを浴びれば、生きてなんかいられないだろう。

「死にたくないっ、やめてくれ！！」

「あ？」

巧はかなりイラついた。ナイフで少女を殺したヤツが、「死にたくないっ、やめてくれ！！」と言った。その言葉が許すことが出来なかった。

（「痛みを与え抜いて殺してやる……」）

そいつの意識を刈り取って、逃げ出そうとした一人を頭から腰の辺りまで縦に割る。花が開く感じで、左右に開いていつて噴水のように血を吹き出した。

他人の為に体を張ることのできる優しさを持った人間による、惨

劇が始まった。

巧は施設内を歩き、老若男女関係なく殺害して回った。100人を数える頃から細かい調整や自身が持つ能力を理解していった。

「氷じゃない……むしろ水か？」

思考が追い付かず、息をつく。

「はあ……ま、なんでもええわ。ただ殺すだけや」

巧を仄暗い感情が支配していった。

途中駆動鎧なんかも出動して巧を始末しようと襲い掛かったが、全て返り討ちにした。

外に逃げ出したのは、僅かに数名。巧は、ガウンのような病院服を着たままそれを追いかけた。

途中兄妹を埋葬した（ただ埋めることしか出来なかったが）。巧の良心がまだ残っているのだろう。それが終わってから追跡を再開する。

第19学区を出て少ししたところで、路地に逃げ込んだ研究員を見かけた。手に入れた研究員リストの中の一人。一番の目標は、化学科学。

「あいつは、どんな手を使っても殺す！」

追い付いた研究員の左腕を凍らせ、ぶち壊した。研究員は、目を向いて叫びを上げる。

「いいゝぎいやあぁっ!？」

「うつせえよ」

頭を凍らせるのではなく、水で包み込んだ。そのまま力をどんどん込めて、圧殺する。頭を潰した瞬間に水を無くした。スイカのように割れて、壁や地面に脳漿のうじゅうをぶちまけた。

「クソが」

今殺した死体を引き摺って近くにあった、人一人入りそうな青いポリバケツに突っ込んで死体を先ほどより低い温度で凍らせて、紅い粉雪作り上げた。

「――」

「!」

後ろから話し声が聞こえて、急ぎこの場から離れていった。

「……」

「いませんわね……」

「……今の……」

「お姉様？」

「なんでもないわ」

「本当何ですか？」

巧に2人の少女の声は聞こえることなく、去っていった。
もし出会っていれば、未来は変わっていたのだろうか……

第7話 科学と魔術の交差

| s c i e n c e & a m p ; m a g i c ;

久しぶりです。いつも以上に長くなりました。書きたいところまで書いたら、いつもの1.5倍くらいまでになりました。

科学と魔術の交差路は…何処に…？

話しの半分は涙子でできています。（バファリンか）

それでは、お楽しみください。

通話を終えてから御坂と黒子は、辺りを詮索し始めた。氷と真新しい血痕。血液というのは、だいたい6分〜15分で凝固し始めるのだ。ということは、まだそんなに遠くへ行っていないはずだった。

「黒子、何としても見つけ出すわよ！」
「ええ！」

ガタツ 駆け出した黒子が転けた拍子に、青いポリバケツを倒した。

「つたいですの…」
「何やってんのよ、黒子」

手を付いたところから シャリ っと音が鳴る。

「冷たっ！ 何々です、のっ！？」

紅い氷の山を見て、飛び退き離れた。さっきまで話していたことを思い出して、手に触れたものが何なのか思い至り、吐き気を催す。

「うっ！…」
「黒、子…、これ…」

黒子は僅かに逆流してきた吐瀉物（たしゃぶつ）を飲み込んで、焦った声を上げた。

「ハア、ハア…。お姉様。行方不明者の中に、まだ生存者がいるんですわ！」

「！それじゃあ！」

「あの惨劇から逃げ延びた人間がいるんですの。きっと…。いえ、そうに違いありませんわ」

「っ！でも、」

「はい。このままでは、何れまた犠牲者が出ます…。その前になんとかしませんと」

「急ぐわよ！」

風が唸るほどのスピードで駆け出した。

路地を抜けたところで、御坂は奇抜な服装の女性と目が合った。

（「どう考えてもおかしい…」）

そう、偶々。偶然だと言うには、目が合い過ぎていた。さらに言うなれば、御坂の走っている場所は、電線の上。この状況で、数秒間目が合い続けているのは、異常だと言えよう。

だが、今はそんなことを考えている余裕などない。思考したのは一瞬。

（「偶然よ、偶然。それより、早く見つけないと！」）

そう考えつけて、御坂は、急ぎ去っていく。

去っていった御坂達の背中を見つめて、女性がぽつりと呟いた。

「魔術とは、根本から違う。…能力者というのは、異常ですね」

「キミにだけは言われたくないだろうな、能力者とやらも」

女性の後ろから、2 m以上はある長身で、肩まで伸ばした長い赤髪。右目の下には、バーコードのような刺青のある、神父の格好をした男が立っていた。

啞え煙草のまま話し続ける。

「それより……。態々、しかも音速で呼び寄せたんだ、学園都市がイギリス清教『必要悪の教会』（ネセサリウス）に貸しを作ってもいいとまで思ったほどの相手だ。早めに済ませた方がいいんじゃないか？」

神父の格好に加え、マントまで羽織っている為、怪しいこと間違いないのだが、その話し相手である女性の格好も、へその出る長さ（片方の裾を根元まで切断している）の白いシャツに、ジーンズの片方の脚が腿のつけ根辺りまでしかなく、ジーンズとホットパンツを足して2で割った感じのズボンと、目の覚めるような抜群のスタイル。そして、何より目を惹くのが、その白い手に持った、袋に詰められた棒状の何か。長さは、2 m以上もある。

「そうだな、まだその力に目醒めたばかりだと言っていたからな……。力をつける前に倒した方がいいのは確かだろう」

「アイツと協力する可能性もあるんだろう？」

「可能性としてあるだけだ」

「僕達だけで十分だろうに……」

「油断は禁物だ」

「解っているよ」

「……………」

2人して空を見上げた。

彼女達は、つい先ほど、この学園都市に着いたところなのだ。音速の飛行機に乗って…

だから、つい愚痴ってしまった。理不尽なこの状況に対して、上司に対して。

「何が、『学園都市に借りを作りけるなのよ』だ。何々だ、その可笑しい日本語は！　というか、英語も怪しくなっているというのは、どうしてなんだ！？」

「さあ？　どうしてでしょうね」

その上司を思い出して、女性は苦笑いして答える。

「それになんだ、あの乗り物は！　ロンドンまでどれだけの距離があると思ってるんだ！　音を超える必要が何処にある！　あの機内で食事？　できるわけないだろ！？」

「ま、まあまあ…」

「……」

不意の沈黙に、先ほどのことを思い出して、遠い目になる。

「…速かったですね」

「……景色なんて解らなかった」

「…ええ」

「もう乗りたくないな…」

男の言葉に、女性から返ってくる言葉はなく、再びの沈黙。

「…」

「…」

「……」
「… 同感です」

女性がただ一言そう答え、2人して、また空を見上げた。

「わざわざネセサリウスに協力を要請するようなことか？ ここのレベル5を使えばいいんじゃないのか？」

金髪とサングラスにアロハシャツの男。チャラチャラした格好とは違い、どこまでも真剣な声で問いかけた。

何らかの装置（水槽とでも言えればいいのか）の中に浮いている男が、返事を返した。

「それでは、計画が狂ってしまう。特に、第1位と予備の第2位は、なくなってしまうと困るんだ。第3位以下も然り。だ」
「なっ!？」

その答えを聞いて驚きの声を上げた。

「そんなに強いのか！」

「ああ。既に500人以上の人間を殺している。第3位とは違って、人を殺すのに躊躇いが無い。他の人間にまで手を出さか解らないが」
「確かににや」。……そいつは危険だぜい？ レベル5をぶつけても、無傷で生還は容易じゃないつと。『一方通行』は、どうか知らんが……。ゼロではないってことか。

で、だ。どうするんだ？ 世界最大の魔術師」

「“元”だ。ふむ、そうだな…。当初の予定通りに、『必要悪の教会』の2人と合流して、事に当たってもらおう」

「解った。」

——なあ、その能力者は最近現れたんだよな？ この時期に、いつ開発されたんだ？ 殺されたヤツらって言うのは、——研究者、か？」

「——全ては、逃走中の者に聞くといい」

「また実験、か…。碌でもないな、学園都市ってのは」

軽く手を振って去っていく。

「でもにやあ、やることはやるぜい？ だがな…」

背中越しに殺気を放ちながら、男は伝える。

「一つ言っておくぞ、アレイスター。全てが貴様のプラン通りにいくと思うなよ」

「ああーあ、みんなと一緒に探したいけど、私じゃあ足手纏いだもんな…」はあ…」

俯きながら歩いていた佐天は、どん と誰かとぶつかった。

「すみません！ って、御坂、さん？」

「はい。ミサカは、ミサカです。と素直に答えます」

佐天が顔を上げた目の前にいたのは、ゴーグルを付け、銃を持った御坂だった。

それが気になった佐天は、すぐに尋ねた。

「えつとお…その銃って本物ですか？」

「勿論、本物です」

「ええ！？ それって危ないんじゃないか、銃刀法違反ですよ？」

「今は、ゴム弾なので大丈夫です。と安心感を与える為に強調してみます」

「それって大丈夫なんですか？…それに、“今は”ってというのが不安なんですけど。っていうか、心内が漏れてますって……」

「それは、失礼しました。と、ミサカはほんの少しだけ反省の色を込めて頭を下げます」

「少しなんですか！？」

佐天は、先ほどからの御坂の話し方に違和感を感じ、その違和感を解消しようとする。

「あの」

「はい、何でしょうか？」

「さっきから気になってたんですけど…。喋り方がいつもと違いますよね？」

——御坂、美琴さん…で、いいんですよ？」

「違います。と即答します。

ミサカは、ミサカですが、御坂美琴は、私達のお姉さまです。と補足説明します」

「私、達？　つてか、妹さん！？」

「はい。私は妹達のシスターズ識別番号9982号のミサカです。と今更ながらに伝えます」

「シスター、ズ？ シリアルナンバーって…」
「それでは、私は用がありますので、これで」
「ちよっ！…」

佐天が止める間もなく、ミサカは去って行ってしまった。すぐさまその背中に佐天は、声をかけた。

「…あの！ 私、佐天涙子！ 9982号の御坂さん！ 御坂さん！ また会いましょう！！！」

ミサカを見送った後も、佐天は離れていく背中を見送り続けた。ただ、不安が募る…。

（「…何だろ、ヤな感じ… ぽっ」）

「雨？ ん？…あれ、…気のせいか……………」

ダツ と、いきなり佐天が走りだす。

（「何か、早く御坂さんの顔が見たいっ」）

信号が赤くなっているのに気付かずに、道路に飛び出していた。

「あ」

目前にトラックが迫っている。もう避けようがない。自分はダメかもしれないと思って、佐天が考えたことは、「呆気ない」それだけだった。

力いっぱいに瞼を閉じていたが、一向に衝撃は来ず、恐る恐る瞼

を開けて見ると、そこには女性の顔が間近にあった。

「へ？」

「大丈夫ですか？」

「あ、はい」

「よかった」と息をついた後にその女性は怒声を上げた。

「何を考えているんですか、貴女は！」

「す、すみません！」

「私がもう少し遅れていれば、貴女の命がなかったかもしれないですよ！？」

「あ……」

びくつ　と震え、声を漏らす佐天に、女性が優しく声をかける。

「本当に、間に合ってよかった。次からは、気をつけてください」
「ありがとうございます！！」

佐天は、深々と頭を下げた。

「いえ、どういたしまして」

と、佐天が顔を上げたところで、女性の一部分をまじまじと見る。

「？　どうしました？」

「ちょこんと首を傾げる姿がまた可愛い。」

「スタイルもいいし、綺麗だし、しかも可愛いなんて……って、そう

だ！

あ、あのー、一ついいですか？」

「はい、何でもしょうか」

「どうすれば、胸をそんなに大きくすることができんですか？」

「ちよつ、何をいきなり！？」

「何って、乙女の悩みごとですよ！？ 女性としてのシンボルです！ あるに超したことはありません」

女性は、佐天の勢いに押されつつ生返事を返しながらも、確りと答えた。

「は、はあ…。」

取り敢えず、食事をきちんととって、運動もすること…ですかね。私は、3食のバランスの取れた食事を心掛けていますし、一応、毎日体も動かしています。刀の鍛練を怠れば、技が鈍りますから」

「うわつ、すごいですねえ。そこまでしないと、やっぱりお姉さんみたいに慣れないんですね…」

あれ？ じゃあそれは刀が何かですか？ っていうか、お姉さんも銃刀法違反ですか？？」

「いや、これは…」

「嘘です嘘です」 助けてもらったのに、ずけずけ聞くななんて図々しいですね、すみません。あ、さっきの意見参考にさせていただきまーす！ 失礼しまーす」

と、女性に別れを告げながら移動して手を思いつきり振った時、誰かに学校の鞆をぶつけてしまう。が、押し返してきたのか、佐天は尻餅をついてしまった。

それを見ていた女性は、米噛みに指をあてがって頭を振った。

「いつ、たたた。…あ！ ごめんなさい！ 大丈夫ですか？」

佐天は、一瞬見惚れてしまった。中性的な顔立ちに真っ白な髪の毛。…何より、真っ赤なその眼。深紅の色に染まったその眼は、宝石のようだった。

眼の色と目付きの悪さは、逸品だ。

「ああ？ 見りゃア、解ンだろ」

口の悪さも…付け加える。

「し、失礼しましたあー！！！！」

落とした鞆を拾うことも忘れて、佐天は逃げるようにこの場をあとにする。

「…何々だ、ありゃア？」

…携帯が鳴った。

「——あアン！？ 何で予定が延びんだよ！ 脱走した能力者ア？ はッ、また実験でもやってたってわけか。

俺が第1プランじゃアねエのか？ 何がしてエ、アレイスター！！ クロウリー。どうせ聞いてんだろオが」

ぴくっ その場から離れようとしていた女性の傍にいた赤髪の男の耳に、気になる名前が聞こえてきた。

「ちょっと待ってくれ」

「どうしたというんです？ 先を急ぐのでしょうか？」

ピッ 女性が男の方に振り向いた時には、白髪は携帯を切ったところだった。

「——チッ」と舌打ちして、軽く足音を鳴らしたと思ったら、落ちていた学校の鞆を浮かび上げ、手に取る。

「暇潰しには、なんだろ」

（「鞆が浮いた？ どうやって…」）

白い髪の彼？は佐天の逃げていった方へと歩きだした。

「あれ？ あの人、先ほどの子の鞆を持って何処に…」

「失礼だけど、善人には見えないな」

「そんな、見た目だけで——」

「放っておくかい？」

「えっと、」

「僕は行くけれど、君は」

「うむ、そうだな。私も行こう」

さっきまでの葛藤は何だ？と思うくらい、女性はあっさりと返答する。

男は、呆れて返した。

「君ももっと素直になった方がいいんじゃないのか？」

「いいから、行くぞ」

「はい、はい。解ったよ」

「も、うダメ。ハアっ、ハアっ……」

走る速度が落ちてよたよたとなり、膝に手をついた。地面を見つめながら休憩して……。――ふと、直前の光景を思い出して、顔を一気に上げる。

佐天の視線の先には、病院着を着た人影が見えた。ちょうど路地裏へと入っていくところだった。

「ハア、見間、違いじゃない、よね……？ あの時ケガしてた人……きつと、あの人がたくみさんだ」

「よし！」と気合いを入れて立ち上がる。

「もう一頑張り！ 私」

「あ、あれ？」

入った路地裏には既にその姿はなく、佐天は素っ頓狂すったんきやうな声を上げた。

その声を聞きつけた男達が、佐天に声をかける。

「おう。嬢ちゃん、どうした？」

「あ、その、人を探して……。でもないみたいなんで、私帰ります！」

「おっと」

「きゃっ！」

佐天の後ろからも、下卑^{げひ}た笑いを浮かべた男達が現れていて、その中の一人が、佐天の腕を掴んでいた。

「どこ行くんのだ？」

「ちよつと！ 放してください！」

「そいつはできない相談だ。…これから俺らと楽しいことするんだからよお？」

「へへへ…いいんすか？ 楽しんじゃつても！？」

「好きにしろ。こいつは、俺らのもんだ」

佐天は、話を聞いているうちに顔がどんどん青白くなっていき、次第に震え出した。

「…だ」

「ああ？」

「嫌だ、絶対にヤダ！ 止めてよ、放して。放して！！ 放してっ

！！！！ …… 放してよお…」

嫌悪感から必死に抵抗して叫んでいたが、腕は放れず掴まれたまま、最後の方は、涙声で懇願^{こんがん}していた。

それを見た男の一人が笑う。

「ははは！ こいつ、泣いてぶえっ！?!?」

笑っていた男が吹き飛ぶ。

「ンだ、おめエら？ そんなガキにおつ^た勃^はててンじゃねエよ。不様過ぎるっつーの」

佐天の入ってきたところとは、丁度反対側から、真っ白な髪と深紅の瞳をした最強が現れた。

「な、何だてめえは！」

「俺の暇潰しになんのか？」

「フザケやがって！ 野郎共、ヤツちまえ！！」

『ごわあー！！』

「ごわあー？」

「巫山戯ているのはどっちですか？」

「は！？」

「僕を睨むな、下衆^{げす}が移る」

「ケンカ売ってんのか！ ああ！？」

「あなた方が売ってきたんでしょう？ 私達はそれを買ったままです。」

——取り敢えず、その子は返してもらいます」

悪漢達が倒されるまで、3分とかからなかった。話していた時間の方が、長かったのではないだろうか……

「大丈夫ですか？」

「はは、2回目ですね」

「そうですね」

「暇潰しにもならなかったなア。」

おい」

「え？ わっ！」

佐天が声のした方を振り返ってみると、白い髪の人間？から佐天

の鞆が投げて寄越された。驚いていたが、確りと受け取る。

「私の……」

佐天は、ぎゅつと自分の鞆を抱き締めて、…ぼつりと呟く。

「正義の味方だ…」

「はアゝ？」

白い髪の間からは、上がり調子の奇妙な音を発せられた。

「オメエ、頭でも打ったか？」

「だって、ホントのことじゃないですか。悪党面してるのに、わざわざ私の落とした鞆を届けるだけでなく、ピンチに陥った能力の無い私を救ってくれたじゃないですか。

ですから、本当にありがとうございます！

大きいお胸のお姉さんと不良のお兄さんもあります
！」

「その呼ばれ方はちょっと…」

赤髪の男は気にすることなく、煙草を吹かした。

何かが気になったのか、白い髪が佐天に尋ねた。

「ちからが欲しいのか？」

「え」

突然のことに佐天は驚く。

「ちからが欲しいのかって聞いてンだよ。何を犠牲にしても欲しいものののか？ それは」

「いえ、私は…」

（「私には、何も無い…」

初春達とも比べちゃうし、私だって他の誰かに比べられる。

んーん。見てもらえる事さえ無いのかもしれない。比べようがない、必要ないって…

私は、そこまでして…」

「少なくとも、オレはそうだ」

…」

その言葉に佐天は、考え込む。

「ここでは、色々な実験が行われてる。実験によって、能力を手にしたってヤツもいる。まア、能力開発自体が、脳をいじくる実験だな」

「そんなこと…」

佐天の先を制して言葉を続ける。

「知ってつか？ 力を手に入れる為に人を殺すっていうのもあるンだぜ？ オマエにそれほどの覚悟はあンのかア？」

「そんなの、、」

佐天でなくとも、大抵の人間なら意識が削がれるし嫌になるだろう。それでも、佐天は諦めつかずにいた。だから、次に言われた台詞に食って掛かった。

「つまり、その程度だつてことだ」

「私のこと、何も知らないクセに！」

「そっくりそのまま、返してやるよ。テメエだつて知らねエだろオ
が」

「っ……」

「お前は、光^{そこ}にいりやアいいんだ。わざわざ、闇^{くち}に来る必要なンざ
ねエンだよ」

「こつち……？」

「チツ、なんでもねエ」

乱暴な言葉遣いではあったが、佐天はほんのりと優しさを感じる
ことができたような気がした。

何も言わずに去っていく背中に、佐天は声をかけた。

「また、会えますか？」

振り向くこともせずに、言葉だけが返ってくる。

「どオだかなア？」

「ふふっ」期待しないで待ってますね？

あ、そうだ名前！ 私は、佐天涙子って言います。あなたは？」

「名前なンざ、遠の昔に忘れた」

「えっと、じゃあ……」

そのまま去っていくのかと思っていたのだが、佐天を振り返って
答えた。

「『一方通行』（アクセラレーター）だ。これが、今の名前みたい

なもんだ」

（「どつかで聞いたことあるような気が……」）

「私は、神裂 火織（かんざき かおり）です。好きに呼んでくださって構いません。よろしく願いします」

佐天の後ろから話しかけられ、女性の人にも挨拶された。佐天と神裂の2人の視線が、赤髪の男へと集中。

「僕もか？ ——ステイルだ。ステイル」マグヌス。よろしく頼む」
「うん、よろしく願いします」

アク——」

佐天が振り向いた時には、『一方通行』は、もう既にいなくなっていた。

「ちえつ、連れないヤツ……」

「まあまあ。私達は、あなたを送って行きますから」

「はあ……。さつさと行くぞ、日が暮れる」

「え！？ あ、大丈夫です大丈夫です。一人で帰りますから」

「大丈夫だなんて、よく言えましたね？」

「は、はい？」

神裂は、指折り数えていく。

「車に轢かれそうになりましたよね？ しかもその後すぐに、人に鞆をぶつけ、次に不良に襲われた。今度は何が起きるんでしょうか？ 何が起きると思いますか？」

「うつ…！ 何も返せない」

「でしょう？ さあ、行きますよ。案内してください」

「解りました。お言葉に甘えさせていただきます」

「人の好意には、素直に甘えればいいと思いますよ？」

「人のこと言えないだろ」

「ほっ、放っておいてください！」

「あははっ
っ」

科学と魔術の交差路……

「火織さんって、結構愉快な人なんですネ」

「愉快？ いや、そんなはずは…。ステイルあなたも何か」

それは――

「僕？ あー。でも事実だろう？」

「なっ！？ あなたは」

「あ、そうだ！ 私のこと名前でも呼んでくださって構いません。
っていうか、呼んでほしいです」

「ふふっ ええ、解りました。改めて、よろしく。涙子」

――意外なところかもしれない…

あとがき? (笑)

どオでしたか? これから、どうなっていくんでしょうか?
時系列とかバラバラになるかもしれませんが、お許しを……

今回楽しんで、次回を楽しみに待っていただけましたら、嬉しい
限りです。

それでは、また会いましょう。

暁 巧。

第8話 それぞれの思惑

— o n e · s i t · s o w n a t h o u g h t

時系列とかおかしいかもしれませんが。（今回だけでなく）そこは、寛容な心でご一読くだされば幸いです。皆様の感想、意見等もお待ちしております。

それでは、どうぞ。

第8話 それぞれの思惑

— o n e · s i t · s o w n a t h o u g h t

「すみません、なんか迷惑かけっ放しで」

「構いません。それよりも…」

「？」

「くれぐれも、気をつけてくださいね？」

「あー…ははは……気をつけます」

「そうしてください…それでは」

お辞儀をしてきた佐天に、神裂も軽く会釈して返す。

「神裂、そんなに仲良くなってどうする。関係のない人間を巻き込むな」

「すみません、ステイル。——行きましょう」

神裂とステイルの2人と別れると、佐天はまた、何だか無性に御坂の顔が見たくなった。気持ち着急いて、思いっきりドアを開けた。

第177支部。

あれからしばらく探してみたが見つからず、この場所にて初春、固法の2人と合流した。黄泉川は、「今日は遅くなるだろうから、また別の日に会っじゃん」と言っただけで別れた。

「結局、見つけれなかった…」

「そうですね…」

「でも、学園都市の外に出ようとすればすぐに伝わりますし、まだここにいてことですよ!」

話していると外から声が聞こえてきた。

「――」

「誰かがいらしたみたいですわね」

「あー…ははは……気をつけます」

「ん？ 佐天さん？」

「だと思えますけど…」

「友達じゃないかしら？」

「それにしても、畏まり過ぎてる気がするんですよ……誰と話しているんでしょうか？」

「「「さあ…?」「」」

みんなが声を揃えたところで、
ボタン！ と勢いよくドアが開く。

「御坂さん!」

「どっ、どうしたの、佐天さん!？」

「え…、あ」

「何かあった？」

「あ、あははは。あー、いえ。何でもないんです」

御坂の心配を余所に、佐天は明るく返した。

「本つ当に、何もなかった?...」

「勿論ですよ」

「そ？」

「あ！ そうだ」

ばん と手を打って話題をずらす。

「御坂さんって、妹さんいます？」

「妹？ いないわよ？ 何で？」

「へっ？ いや〜、実は、御坂さん似の美少女がいたんで、もしかしたら...って」

「え?... そうなの？」 「本当なんですの!？」

「はは...。はい」

食い気味の黒子に若干引いた笑いを浮かべつつ、佐天は答えた。

「だとしたら、すごいですよね」

初春が御坂の方を見て続きを話した。

「御坂さんのようなキレイな人が2人って」

「でしょ!？ これは聞かねばっ! と思っ、今に至るわけなんですよ」

「大袈裟よ。でも見たかったなあー、私似の子。

でもさ、ドッペルゲンガーとかだったら怖いわよね。あ、でも、私の代わりに消えてくれるかも知れないからな... それだったら、ありがたいんだけど」

「逸話だとしても、そんなの許せませんわ! 勿体ない。どっちのお姉様も助けます! ま、お姉様が一番ですけど」

「私も見たかったです。佐天さん、いつたい何処で――」

「……」

「佐天さん？」

「……」

「佐天さん！」

「どうしたのよ、初春」

「どうしたじゃありませんよ。佐天さんの方こそ……どうしたんですか？」

「なんでもないってば……」

佐天は、調子の変わらないそのまま、「それっ」と初春のスカートめくを捲る。

「ちよちよちよちよちよちよつとお！ 佐天さん、何でスカート捲るんですかぁー！！」

佐天は キリッ とした顔を作って、答える。

「フツ… そこにスカートがあるからさ」

「何々ですか、それえ！？」

「それってダメな人じゃない…」

「オヤジですわね」

「あ」

佐天は、御坂と黒子の方を向く。

「御坂さんと白井さんも捲っていいですか？」

「イヤに決まってるじゃない！」「嫌ですわ！」

「じゃあ、固法先輩は…」

「ごめんなさい。申し訳ないんだけど…」

「ケチー」

「あはは…」

「そういえば、佐天さん。先程は何方とお話しになってたんですの？」

「ちよつと送ってもらったんですよ、命の恩人の方に」

「命の恩人？」

「えつと――」

簡単にあったことを話した。ぬか喜びさせては悪いと、巧を見かけた事を除いて。

（「見間違いかも知れない…もんね…」）

「――つてことがあったんです」

「呆れてものも言えませんわ」

「そりゃ、心配になるわよ」

「本当にもう… 気をつけてくださいよ？ 佐天さん」

「その人達に感謝しなくちゃね」

「はい、もちろんです」

御坂達は、事件のことを佐天には話さないでおこうと決めていた。佐天も巧のことは話題にも上げず、この日は、そのまま解散となった。

「お姉様、わたくし『風紀委員』のお仕事はまだ残っていますので、先にお帰りになってくださいまし」

「うん、解ったわ。」

初春さんと佐天さん、私先に帰るね？」

「はい、また明日」
「またねー、御坂さん」

佐天の言ったことが気になって、みんなと別れてから御坂は、考え込んでいた。

（「私に似た…？ ……。確かめてみた方がいいわね」）

「絶対能力進化実験を手伝うだあゝ！？」

とあるファミレスの一角から、男の声が響いてきた。

「げしっ 浜面！ あなたはどうして超浜面何ですか！？」
「絹旗、痛いって！ つーか、ロミオとジュリエットか！」
「げしっ、げしっ 何を考えているんですか！？ ぼそっ 暗部組織の任務内容を大声で言うなんて、超バカですよ！ “暗部”って超解ってんですか！？」
「大丈夫。私は、そんなバカなはまづらを応援してる」
「フレンダ」

モデルのような女性が、金の髪した、人形の如く綺麗な少女に声をかけた。

「はいはいゝ。何、麦野？」

「その鯖缶を開ける為に使おうとしてる小型爆弾を、浜面の口にぶち込みなさい」

「えゝ！？ それって結局、私の手が浜面の涎に犯されるってことだよ！？！？」

「フレンダが、超可哀想です」

「そこは我慢なさい。後で、最高級の石鹸買ったげるから」

「俺の扱い酷かねえか！？」

「『そう？』」

「何で同意者が3人もいるんだよ！ 口に爆弾を突っ込まれる俺よりも、涎で手が汚れるフレンダの方を心配するっておかしいだろ！」

「大丈夫、そんなはまづらを私は応援してる」

「そんなって、誰にも相手にされてない俺ってことか？ ていうか、滝壺！ お前も第三者でいるっていう線引きなんじゃないのか！？」

「…あ、南南西の方角から声が聞こえる」

「なあ、それって肯定してんのか？」

麦野と呼ばれていたモデルのような女性が、ふーっと、息をついてから話を戻す。

「断ろうと思ってたんだけど、今回は強制みたいだから。」

お仕事内容は、実験が滞りなく進められるように、第3位『超電磁砲』を排除——但し、殺さないこと。だそうよ」

「麦野には超難しい注文ですね」

「そうだねー、麦野は強いんだけど、結局全部壊しちゃうもんね」

「破壊王だもんなあ」

「はあゝまゝづうらゝ？」

浜面の一言に、麦野は ギギギギ っと浜面の方を向いていく。

「美しく麗しい麦野サマっ！ すんませんした！！！」

気持ちいいまでの潔い土下座をする浜面。「チッ！」と舌打ちしたものの、少し機嫌を直した麦野に、滝壺が質問する。

「むぎの、メールには日付が添付されてなかったけど」

「私のところにもきてなかったんだけど、さっき連絡があつて…。電話の女が言うには、3日後だそうよ」

「3日後か、私“また”あれと勝負するの嫌だよ？ 麦野お、援護くらいしてよ？」

フレンダは、一度御坂と戦って敗れていた。前回と同様に邪魔をすれば、容赦してはくれないだろう。負ければ、麦野が許さない。フレンダは、背水の陣に陥っていた。

「解ったわよ」

「なあ、麦野。この追記に書かれてる、研究施設から脱走した“水系能力者”を場合によっては、排除。相対した場合、第1位や第2位を相手にしてると思えて……新しいレベル5がいるってことだよな？」

「そうね、第3位なんかと比べられないくらい狂暴みたいよ？」

「狂暴？」

「そ。一日…というより、数時間で500人殺したらしいわね」

「はあ！？ 何でそんな…」

「浜面、超解りきってるじゃないですか。実験ですよ、実験。うちら暗部組織に回ってくるような、超ヤバーいやっ」

「同時進行ってことか？」

「多分そうなるんじゃない？ 他の暗部組織も動いてるって話よ」

「今解つてる関係者だけでも、即刻帰りたいんだが…」

「そうだよねえ、第1位、第3位、第1位くらいの狂暴なヤツに、第4位の麦野も入れれば、レベル5の半分がいるんだよ……怖っ。

結局私は、役に立たない気がする」

「はまづら、死なないで」

「え？」

いきなりの滝壺の台詞に、疑問顔の浜面。滝壺の言わんとしてることを理解したフレンドは、少し安堵した。

「あー、大した能力がなくても結局浜面よりもマシだって思う、私」「ぐっ！……いや、大丈夫だって、今までだってなんとかなつたし、俺にはやりたいことが沢山あるんだ、まだ死ねない。死ぬわけにはいかないんだ」

絹旗が ぼりぼり と頬を搔いて宣告した。

「浜面、それ超ー死亡フラグ」

「うげっ！？」

和やかに、そしていつも通りに会議という名のお喋りが続いている。

「遅いぞ、土御門」

「全く…。急いで寄越したのではないのですか？」

「済まないにやー、スタイルに、ねーちん。こっちも色々立て込ん

でたんだぜい？」

「はあ…。それよりも、本当に私達が必要何ですか？」

「僕一人でも、事足りる気がするんだが…」

「レベル5を侮ってるだろ？　どいつも異常だぞ？」

「異常、ね…神裂よりもか？」

ステイルの言葉に、土御門はあっさりと頷いた。

「ああ、聖人でさえ適うのか怪しいやつもいるからな…」

「そんなに強いのか！？」

「レベル5の定義知ってるか？　ステイル」

「…いや」

「一人で軍隊と戦える。だ。——今回捕らえるやつも、レベル5だと思っていい。脱走時に、人を殺してるから、尚更気をつけていけよ？」

「脱走？　何処からです？」

「研究施設だ。恐らく、実験中に何かしらあったんだろう。

学園都市は、非人道的な実験も行っているからな…」

「……」

「ホントに気をつけろよ、2人共」

「僕達の任務には危険が付き物だ。いつも通りやるだけさ」

（「私に何ができるだろうか…」）

青年の隠れ家に、白衣の男が現れた。

「なんだ？ アンタ。俺に何か用か？」

「“絶対能力進化実験”を知っているか？」

「唐突だな。それがどうしたっていうんだ？」

「それに一人参加者を増やしたいんだが、力を貸してもらえるかな？」

「は？ 俺に何の関係がある。テメエで何とかしろ」

青年に呆気なく断られたが、男は焦りの色を見せない。青年の興味を惹けばいいだけだと、話を続ける。

「んー、君は第1位を疎ましく思っているのだろう？」

君がやる可能性もあったこの実験。それに君も参加して、『一方通行』を倒せばいいと思うのだが？」

「ああ、確かに、確かにな——」

男は僅かに思考するような素振りを見せて、回答する。

「3位と4位、さらには、それに匹敵する能力者も関わっている……とすれば？」

それを聞いた青年の顔に、獰猛な笑みが張り付く。

「そりゃ、いい。順位が大きく変動するかもな。

で？ 詳しく話してもらおうか」

「……っ」

涙が一筋流れた。本人も意図していなかったことだ。

…誰もいない場所を歩いて回る。何処へ行くか何て考えていない。そして気付いたら、黄泉川、黒子、初春の3人と出会ったところまで来ていて、鼻の奥がツンとしていたのだ。

少し話ただけであつたが、楽しかった。もう戻れない、顔を合わすこと何てできない。

「何、で…今さっ、ら泣くねん…」

ぽつりと呟く。

「人…殺した…っ、殺し、た……オレ…もう……」

止め処無く流れ落ちる雫を拭う者はいない。彼の心の闇は広がり、殺意が溢れて出る。

ほんの少し戻った瞳の輝きが、すぐさま濁っていく。死んだ魚のような目をしていた。

「…化科学…絶対、に、殺…して、やる…絶対、だ…」

ぎりっ　と歯ぎしりをして、爪が割れるほど強く拳を握り締めた。

夜の帳が降りる。

彼に帰る場所は——無い。

第9話 新しい友達

| d e a r m y n e w f r i e n d ・ (前書き)

今回は佐天と女性陣とのお話。

何か話し方とかおかしかったらすみません。

あれから3日が経った…

表のものも裏のものも含めて、各研究施設を見て回っていた。勿論、巧は見つからないよう潜入をした。その過程で教師であり、研究員の脱ぎ女の木山 春生と、木山の小学校の生徒で天才科学者、木原 那由他（研究者一家の木原一族を、研究者の人間が知らないということは無い。彼女も、その一族）に、絶対能力進化実験の研究員だという布束 砥信とも出会った。布束は、化科が“絶対能力進化実験”に興味を示していたということを聞いた。その実験は今なお継続中で、近々変化があると言っていた。その変化というのは、化科が何らかのアプローチをかけてくるというのを掴んだらしい。布束は、「s o 情報をあげたんだから、邪魔だけはしないで」と巧は忠告を受けていた。

（「危うく、殺そうかと思った…」）

がしがしと頭を掻いて今考えていたことを反芻した。「オレはこんな人間だったのか」と思考するが、答えなんて出るわけもなく…

（「記憶無いもんな……。否定できないか………」）

「ふうー…」

巧は息を吐き、意識を切り替えた。

布束が言うには、丁度今夜の実験は元々大きく動かすつもりでいたから、化科もそれに合わせてくるだろう。ということで、何らかの算段を付けているようだった。

「今夜か…」

巧は、ぼつりと呟いて、自らの能力を研鑽し、研摩していく。ただ一つの目標の為に…

「いらっしやいませ。席へご案内致します」

このウェイトレスは、今来店した客を見知っているのだろう。いつものように、同じ席へと案内する。…ここまでは、いつも通りだったのだが……

到着した席には、すでに先客がおり、友人を待っているのか、一人で座っていた。どうしたものかと悩んでいると、後ろから「チツ！」という舌打ちの音が聞こえた。「これは、不味い」と、ウェイトレスは先に座っていた少女に話しかける。

「お客様、お連れの方がまだいらっしやらないようでしたら、お待ちだけの団体様が色々いらっしやいますので、他の席にて、お待ちいただけませんか？」

「はい、いいですよ。どっちみち、私の友達が来れなくなっちゃったみたいなんで」

少女が腰を浮かせたところで声がかかり、

「少し横に寄ってもらってもいい？」

「あ、はい」と返事をしてそのまま真ん中へずれる。

「奥の席は、超私が座りますんで」

少女が座っている状態で、テーブルと椅子との僅かな隙間を難なく通る、細身でおそらく同年代の少女。

「ん？」と、そこで漸く首を傾げた。

「どうぞ…って違う！ 私の話聞いてました！？ 私は」

「結局、友達来ないのよね？」

「まあ、そうですね」

否定はしないというかできない。友人達が忙しく来れないことなどざらにある。

「ふれんだは、一緒にご飯食べないかな？　って言ってるんだよ。勿論、みんなも」

黒髪の綺麗な女性が少女の向かいに座りながら話かけた。

「あ、でも私は…」

口籠もった少女を説得というより、妥協してくれるように話すばさばさの茶髪の不良っぽい男。

「諦めてくれ、こいつらは楽しけりやそれでいいんだからよ」

「いや、私だつて楽しいの好きですし、気にしませんけど…」

その答えを聞いて、モデルじゃないと言われても信じられないくらい美人な女性が、軽く促す。

「じゃ、決定ね。先ずはご飯にしましょ」

決定らしい。

もともと、そのつもりだったのが伺える。

「佐天涙子って言います——」

食事を終え、お茶をしながら自己紹介を交わしていく。佐天は、一気に親睦を深めていった。

「何か、俺より仲良くなつてねーか？　女つてのは解らん」

ぶつくさ呟く男は、そう言ってお茶を飲み干した。

「“さん”は付けなくていいわ」

「あ、はい。他のみんなはなんとか…でも、麦野さんは失礼かな—
つて」

「私の方が歳いってるって言いたいわけ？」

「私に喧嘩売ってるんですか？」

「あ？」

佐天の台詞に、麦野の頬がぴくつと僅かに吊り上がる。

「「「「！！！！！」」」」

（「「「「ちょちょちょ！ 何言ってるの！？」」」」）

「あ…私を呼んでる…」

焦っているみんなを尻目に、滝壺が現実逃避（？）をして回避しようとしたところを、フレンダと浜面が、両サイドからがっしりと滝壺の腕を掴む。

（「何、超逃げようとしてんですか！ 私なんて超動けないんです。理不尽ですよ！ 現実逃避とか、超許しませんから！！」）

絹旗が、滝壺に非難の眼差しを浴びせていた。

「それだけ綺麗な顔して、スタイルも良くって…、さらには、格闘技も出来て能力まであるんですよね！？ しかも高校生ってことは、まだまだ成長の余地があるってことですよ！？ スゴ過ぎです！」

「え？ あー、ありがと…？」

一気に捲くし立てた佐天に、よく理解できていないながらも麦野は礼を述べる。

「だからそのおっぱい分けてください。いえ、分け与えたまえ」

が、返ってきた返答に麦野は勢い良くツツコミ返す。

「何でよ！ しかも、その言い直し必要ないでしょ。というより、その手をやめなさい！」

佐天は、手をわきわきと動かして近づけていく。

「そのような、伝家の宝刀もとい、宝に桃と書いて“宝桃”を前に何もしいない何て、女が廃ります」

「もう廃れればいいわ、そんなもの」

「いいんですか？ 廃れますよ？」

「はいはい」

「おっぱいの歴史が」

食い気味に佐天が麦野の相槌を飲み込んで力説した。

「滅びてしまえばいいわ」

麦野も心の底から答える。

「じゃあせめて、揉みしだかせてください」

「イヤよ！　というか、何が“じゃあ”なのよ！　揉みしだくって何？　揉むだけじゃ収まりつかないわけ！？」

近づいてくる手に、いつもの冷静さを無くした麦野は、ぎゅっと潰さんばかりに自分の胸を掻き抱いた。

（「お、麦野が押されてる。いろんな意味で…あ、鼻血…」）

（「超ー、珍しい光景。麦野の怖さを知っている私達にはあんなことすんのは、超無理ですね」）

（「結局、私の麦野への愛が増大するわけよ」）

（「むぎの、可愛い」）

「ふう…」

麦野が一つ息を吐いて、気持ちを整えた。

「…あのね。これ全部、努力して手に入れたのよ。あなただって努力すれば…」

「っ…！」

一瞬。佐天の表情が強張った。

「どうしたの？」

急に俯いて黙り込んでしまった佐天が気になって、麦野は顔を覗き声をかけた。

同じ仲間である佐天以外のメンバーは、自分達にでさえそこまで優しい声をかけられることが少ないのに、佐天を気遣っている麦野に驚きを隠せない。

「…努力して、ダメだったら？」

「さらに努力する。私は、それで「それでもダメだったら？」——
は？ ……何が言いたいのか？」

「……！！！！」

明らかに麦野の機嫌が悪化した。そんなことも気にせず佐天は続ける。

「頑張っても結果が出ない人もいます」

「当たり前でしょ？ だから、努力し続けるんじゃない」

佐天は麦野に、食ってかかる。

「解ってます！ 私だって続けてます！ けど……ここに来てからずつと結果は変わらない！ 最近は結果が出る度に、私は駄目な人間なんだって言われてる気がしてならないっ！！」

「はあ……。それは、あんたの」

「違う！ 気のせいなんかじゃない！ 実際学校にもいる。“私ダメだった。けど、佐天ってやつはゼロだ”って！ 何でそんな結果張り出す必要があるの！？ 知らない人にまで言われる筋合いは無いのに！」

「……その程度で諦めんの？」

麦野は、呆れたと息をつきそうになる。

佐天は、ガン！ とテーブルを叩く。

「それだけじゃない！！」

佐天は思い出して、血が出るほど唇を噛み締めた。目尻に雫も溜まり始める。

「能力者に襲われたことだって何度かあります。そして、決まっ
てこう言っんです“レベルは幾つだ？”って。0だって言っと『必ず』
笑います。爆笑する人だっていました。何が可笑しいんですかって
聞いたら、ク、クズだとか、ゴミだとか——」

「……………」

佐天は、遂にぼろぼろと涙を流し始めた。

「——そして……。最後には、私を犯そうとするんです。風で刻むとか顔を焼くって言うて……」

無駄だと解つていても、抵抗どりよくします！ だけど、腕力も技力も能力も……“力”の無い私は、結局“やめて”って言うだけ。

私が何したつて言うんですか！？ 今のところ運良く助けられますけど、そんな都合がいい事が何度も続くわけが無い！ 何時か私は、犯——」

泣き叫ぶ佐天を、麦野が続く言葉を言わせまいと、佐天の頭を優しく抱えた。

「ごめんね？ 悪かったわ…… 辛いこと思い出させたわね」

「ふえっ……つうう……っ！ 私っ、ぜ、口……とかクズっとか」

「大丈夫、大丈夫よ。そんなことないでしょ？ あなたとの付き合いが短くても解るわ。頑張り屋なんだって」

「どっう、して？……」

佐天は埋めてた顔を上げて、尋ねた。それを、麦野はゆっくりと佐天の頭を撫でて、宥め透かす。

「辛いことがあつても、初対面の私達にも笑顔だったし、これだけ我慢出来た……。私が何の力も無く、同じ目にあつていれば、耐えられるか解らない。その精神力も“力”だわ。誇つてもいい力」

「誇つて、も……いい？」

「ええ、そうよ」

麦野は、佐天の頭を抱き寄せて髪を梳かす。

「仕方がないわね。私が守つてあげるから、泣かないの」

「へ？」

「後、一人で抱え込むんじゃなく、頼ることも覚えなさい」

佐天は、こくりと頷いて、呟いた。

「…もう、少しだけ、…このままでも…いいですか？」
「勿論よ」

佐天が泣き止み、落ち着くまで、麦野はそのままだった。

漸く落ち着いたのか、佐天がゆっくりと頭を離して、麦野の目を見る。

「もう、大丈夫です。へへ」

佐天の笑顔を見て、みんな安心する。

「そ。いい子ね」

「むぎの、ティッシュ」

「ありがと。」

ほら、鼻かんで」

「じ、自分でかめますって!」

「今は温和しく、私の言うことを聞いてなさい」

佐天は、恥ずかしいと思いつつも、麦野に素直に従う。少し嬉しくもあった。

(「お姉ちゃんがいたら、こんな感じかな?」)

「むぎのと、さてん、姉妹みたい」

「え!? もしかして、声に出してました!?!」

「超バツチリです」

「麦野がお姉ちゃんな…」

「いや、その」

「麦野お姉ちゃん大好きい」って感じで、結局、麦野から離れられないわけよ」

「フレンド! 何言ってるのよ!」

「私嫌われちゃったあ」

「違います！ 大好きです！！」

「告白されちゃったあ」

「ちよつ！？ 麦野さんも、からかわないでくださいよ、もっ！」

“さん”」

「あ！ ええーつと、む、麦ちゃん」

「それは、嫌」

「むぎむぎ」

「何で悪化するのよ」

「じゃあ、…沈利、さんで」

「それならいいわ。」

後、私も涙子って呼ばせてもらってから、よろしくね？ 涙子」

「よ、よろしくお願いします！」

麦野が会計を済ませて店を後にする。店を出る時に、麦野を案内したウェイトレスに、佐天は頭を下げてお礼を言った。その人が、他の客や店長、店員に謝っていたのを見た為に、言わずにはいれなかったのだ。

「だけど、「やなこと思い出して、さらに怒られるなんて嫌でしょう？」と言って笑った。

そして、「友達にも話せないことを、私は色々知っちゃった。だから、また友達にも話せないことがあれば、色々相談のるよ？」と佐天はアドレスを交換していた。

「結局、佐天はウェイトレスとも仲良くなっちゃったってわけね」

「仲良くなっちゃったっていうか、心配してくれたみたいですよ」

「さてん、良かったね」

「はい」」

と笑顔で返事をした佐天の顔が曇る。

「佐天、超どうしたんです？ 何か怯えて……怯えて？」

「あ！ お前はこの間の！！」

絹旗の疑問は、声のした方を見て解消されたが、代わりに怒りが加算される。それは、絹旗以外も。

「てめえのせいで、何人が病院送りになったと思ってやがる！」

佐天は、びくっ！ と顔を強ばらせる。

「涙子、知り合い？ …… なわけ無いわよね」

「あんたらも参加するか？」

「何に？」

「俺達と気持ちのいい話し合い」

「へへへ……」

数人が気持ちの悪い笑みを浮かべた。

「そいつ一人じゃ、全員相手すんのは、大変だろ？」

「はは！ …… けど、そっちの方は才能あるかもなあ？」

「……あははは！……」

誰かの歯ぎしりが聞こえてくる。

「ホント、ム力つきますね。……超潰しますよ？」

「ダメだよ？ 絹旗。あ、でも麦野が怒ってるみたいだから、生きて帰れないよね？ 私も怒ってるから吹き飛ばすつもりでいるし——結局、壊れちゃう……ねー？」

「はあ？ 何言ってるんだ？ 姉ちゃん達も来るってか？」

「ええ、相手になってあげるわ」

「ちよっ！？ 沈利さん！」

「佐天は、黙って見てろって。麦野は、強えから」

「浜面……でも……」

路地裏に入ってから、麦野の台詞で戦闘……もとい、一方的な虐殺

が開始されることになる…

「取り敢えず、そいつを渡せ。そしたら、姉ちゃん達は痛い目に遇わなくて済むぞ？　なあ？　お前ら」

建物の影から、わらわらと人が出てきた。

「ざつと30人つてところかしら？」

「この前よりも多い」

「っていうことは、以前も一人の女の子を取り囲んだんだ？」

「いやいや、みんなで仲良くしようと思ったただけさ」

「絹旗」

麦野の声に絹旗は、戦闘態勢に入る。

「フレンダ」

麦野に呼ばれてフレンダは、こくりと頷く。

「ブチ殺し確定ね」

『ぎゃあーっ！?!?!?』

麦野は言葉と同時に、細くした原子のビームで何人もの腕や脚を撃ち抜く。それを合図にフレンダが閃光手榴弾スタングレネードを放り投げ、視界が晴れる前に腕、脚、地面に壁面。と、至るところに爆弾を仕掛けた。絹旗も別の敵を薙ぎ倒し、吹き飛ばす。

「今あなた達の腕とか地面とか、至るところに爆弾を仕掛けたから気をつけてって言うっても、結局、私が爆発させるんだけど——じゃあ」

「待って！——！」

「佐天？…」

佐天の声に、フレンダだけじゃなく麦野と絹旗も佐天を振り返った。

「殺すなんてダメ！ そんなことしたら、こいつらとおんなじになっちゃうよ……最低の人間に」

「はあ……」溜め息をついて、麦野は佐天に譲歩する。

「解った、殺さないわ」

「ありが」

「けど、半殺しにはする。こういうヤツらは、本っ当に痛い目に遭わないと理解しない……いえ、できないの」

「でも……」

「涙子の友達も、被害に遇うかも知れないわよ？ それでもいいの？」

「それは……嫌、です……」

「でしよう？ 納得いかないのは、解る。あなたは優しいもの……けれど、『警備員』が動くまで待つてたら必ず被害が出る。それでは遅いのよ？」

「……はい……」

「あなたがそんな顔しない。私が悲しくなるわ。ね？」

「はい、……遣り過ぎちゃダメですよ？」

「OK、約束破ったらクレープ奢ったげる」

「約束しましたよ？」

「はいはい。……ってわけだから、あんたら手加減してあげなさい」「超仕方ないですね。佐天がお願いします絹旗様って言って聞かないですもんね」

「絹旗！ 言ってないから！」

「絹旗違っつて、結局、私のこと愛しちゃったのよ」

「何で！？」

「嫌われた……」

「それ、私がやったわよ？」

「天井って言うんだよね？ 解っていても、結局やっちゃう私」

「あの！ 別に嫌ってないよ？ みんなのこと好きだし、友達…にそんなことして欲しくないなって」

「「「ふふ…」」」

「へ？ あれ？ あの？…」

「頑張りますよ、超友達ですから」

「友達の為に結局頑張るのよね」

「友達ね……。姉妹^{スール}の誓いでも交わす？」

麦野はウィンクを一つ。

「あはは、やっちゃってください」

出会ったばかりの少女達の絆は深まっていく。

……だが、佐天は知らない。今夜、麦野達が御坂と戦うことを…

……

衝突するまであと数時間。

第9話 新しい友達

— d e a r m y n e w f r i e n d . (後書き)

あとがき？（笑）

次回は、いよいよ、あいつもこいつも出てきます。
お楽しみに！

第10話 妹達 | sisters・(前書き)

今回メインは、『妹達』。彼女達の行動は、可笑しく可愛く…
重く、シリアスになる前のほのほのした感じですよ。クスリとでも
していただけたら、誰か一人は『妹達』の中で、お気に入りか
できるかも知れません。

作者は、基本サブキャラ好きです。ナンバー7とか。別作品だと、
新八つつあん、あと、春原サイコオー！

あ、脱線しました。だからシスターズも、登場するNo.は、性
格やら好みetc…。色々考えてます(笑)

だからかね…原作以上にフレンダを自然と使っちゃうのは…

皆様のご意見ご感想。どしどしお待ちしております。と、この辺
で――

とある忘却の水支配者。始まります。

佐天の言ったことが気になって御坂はカメラをハッキングして探していたのだが、目的の人物はあっさりと見つかった。今、急ぎその場所へと向かっていた。

（「いた！……アレだ。」

ん？ 男？ ってか、何で木登りよ…… さっさと帰ってもらうか」）

「えっ！？」

御坂は、近づいてからツンツン頭の男の正体に気がついた。

「よし、もうちょっと…… 温和しくしてるよ……」アンタ何やってんのよ？」どわっ！？ とっ、ちよっ！？」

ドスン！ と、男は地面に落ちる。一緒に落ちてきた猫は、近くにいた少女がキャッチ。

「いつてー！ 誰だよ」

男が顔を上げた先にいたのは、御坂。

「って、双子お？… って、ちよっ、おまっ！？」

「はあ？ 何言って…」

と御坂の振り返った先に見た物は、落ちてきた猫を、スカートを広げてキャッチしていた少女がいた。

立っている御坂から、その少女の下着が見えるのだ、男に見えないわけがない。ぱんチラというよりは、ぱんモロ。

「なな、な、なな、何やってんのよ！ アンタ！？」

「ミサカは、黒猫を救うことに成功しました。とミサカは、何故かここにいるお姉様に訝しげな視線を投げ掛けながら、答えます」

「そんな視線はいいから、スカートを降ろしなさい！——アンタも

いつまで見てんのよ!!」

「ごばあっ!?!」

サッカーボールをシュートするかの如く、御坂は思いっきり男の頭を振り抜く。

御坂も、自分自身が見られたように恥ずかしいやら、悔しいやら、よく解らない感情で蹴っていた。

「と、とにかく! アンタは、この事、誰にも言わないでよ?」

「言つか! 恥ずかしい」

「は?」

何を言っているのか理解して、御坂の顔が見る見るうちに、赤く染まっっていく。

「ちっ、違っわよ! アンタバカあ!?!」

「え?」

「あー、もう! こいつの事よ」

「妹?…」

「いや、別に――」

「いいから!」

「……」

鬼気迫る瞳で見つめられて、男は黙ってしまう。

「行くわよ!」

そのまま、御坂は妹?を連れて行こうとする。

「あっ、おい! カンッ ……何か落ちたぞ?」

男が拾い上げる前に、妹?が御坂の落としたカエルのキャラクター、ゲコ太の缶バッチを拾う。

「これは、誰のか解りませんね。と、ミサカは言いながら可愛い缶バッチを装着します」

「私が落としたのよ!」

「それにしても、制服にこれはないな。とミサカは、密かに毒づきます」

「漏れてる漏れてる」

「何だよ！？ 可愛いでしょ？」

「「ないない」」

「ハモるな！」

「というわけで、これは私の物になりました。とミサカは、主張してみます」

「というわけって、どういうわけよ」

「お姉様から、初めていただいた物です。とミサカは、少し喜びながら答えます」

「あー！ もう！ 勝手にしなさい！」

「お前ら仲良いのな」

「え？」 「？」

御坂自身、そう言われて悪い気がなかった。

「そう？」

「ああ」

「お姉様、私はこれから用がありますので、その猫を頼みました。と、ミサカはお姉様にお願ひします」

「え、ちよつと！」

「またなー」

「さようなら、とミサカはお辞儀をします」

御坂は、妹？に近づいて耳打ちして、質問する。

「ちよつと聞きたいんだけど、アンタって、……私のクローン……なの？」

「はい、そうです。とミサカは肯定の意味を持って頷きます」

「何でアンタがいんのよ？」

「それは、ミサカの存在意義を聞いているのですか？ とミサカは可愛く首を傾げます」

「存在、意義……」

御坂は少し思考した後、ミサカに回答を求める。

「…うん、そうね…」

「アンタは何で生まれたの？」

「rJA4SEphI10pS22jgMh20001vQ8/
-Kb-z666〃? と、ミサカはオリジナルと言えど符丁^{パス}の確認を取ります」

「は？ パス？ パスワード？」

「そうです。P、A、S、S、W、O、R、D。で、“PASSWORD”です。とミサカは懇切丁寧に答えます」
「ちよつと待つて！」

御坂はPDA(Personal Digital Assistant。↓携帯情報端末)を取り出して、decode(デコード：一定の規則に基づいて符号化されたデータを復号し、元のデータを復元すること)しようと再度パスワードを尋ねた。

「も一回お願い」

「rJA4SEphI10pS22jgMh20001vQ8/-
Kb-z666〃? です。理解しましたか？ と、ミサカはもう面倒くさいので言いたくありません。と心に誓って、5重に6重にと、心の防御壁を構築します」

「姉をそこまで拒否るってどうなのよ!？」

「我が儘なお姉様を持つと大変です。と、ミサカは呆れた眼差しを向けつつ、嘆息します」

「はあ…。こっちのが溜め息出るわよ。

「ねえ。アンタ、名前は無いの？」

「はい。ですが、9997号という識別検体番号ならあります。と、ミサカは一応答えます」

「そ。…………じゃあね」

（「解析は、初春さんに手伝ってもらうか…」）

「…さようなら、お姉様」

御坂はぴくつと、今の言葉に反応してしまう。

何気ない遣り取りだったはずのに、…それは言い知れない不安となった。

考え込んでしまった御坂がパツと顔を上げた時には、そこに妹？の姿はなく、曇り始めた空だけが見えた。

麦野達は、佐天と別れた後に予想外の人物と出くわした。

「『超電磁砲』！」

「？」

声をかけられた少女は、キョロキョロと辺りを見回す。

「超あなたですから！」

「ミサ力ですか？」

「自分で御坂って言うてるって」

「はまづら、落ち着いて」

「どっちかっていうと、落ち着くのはあっちの方だろ」

「何か用でしょうか？ とミサ力は、突然声をかけてきたハーレムな人達に尋ねます」

「……ハーレムうー！？」「……」

「あんだ、私がこんなヤツのモノになったってどういうの？」

「ないですないです。超有り得ないですから」

「そんなことない。はまづらは、凄く働いてくれるから、奇跡が起こればきっと…」

「確かに。働き蟻や馬車馬の如く働いているよね。結局浜面は、下僕止まりってことね」

「お前らなあ…」

「甲斐性無しなんですネ。ミサカは、深く理解して頷きます」

「初対面で何言ってくれてんだよ！」

落ち込んだ浜面に、ミサカは、スカートを捲って慰める。

「すみません、言い過ぎました。と、ミサカは縞模様のぱんつを見せて慰めます」

「うっ！ たらーっ」

「鼻血出てる。はまづら、ティッシュ」

「超何してんですか！ スカート降ろして！」

「見られても減りませんよ？ と、ミサカは素直に言うことに従いつつ答えます」

「そっという問題じゃあ……」

「……」

じーっ。と。絹旗のポケットから出ているストラップをミサカは見つめていた。

「…？ もしかして、ゲコ太超好きなんですか？」

「ゲコ太？ と、ミサカは聞き覚えのない名前を口にしながら、可愛いストラップから目が離せません」

ひょいっ。と絹旗がストラップを動かすと、ミサカの視線が移動する。ひょいっ、ひょいっ。と動かすと、その通りにミサカの目が動く。

「超！ 食い付いてますね…… あげましょうか？ コレ」

「本当ですか？ と、ミサカは瞳を潤ませ、上目遣いでこっそりアピールします」

「口に出してたら、結局こっそりじゃないって」

「バカなのかしら？ レールガンって」

「みさか可愛いっ」

「ちょっと待ってください——つと、取れた。はい、超あげます」

「もらったからには、もう返しませんよ？ と、ミサカは必死にストラップを死守します」

「超大丈夫ですから！」

「誰も取らないわよ」

麦野が薄く笑って、言った。

「ミサカは用がありますので、そろそろ失礼します。と、ミサカはぺこりと頭を下げます」

「用？」

辺りは、もう日も落ちて暗くなっていた。

「こんな時間から？」

「はい」

「確か、常磐大の寮の門限は厳しいって聞いたけど？」

「大丈夫です。それでは、さようなら」

「……」

「麦野、超仲良くなってるんですけど」

「以前も戦ったでしょう？」

「前に比べて戦い辛いんだけど、結局戦うのよね？」

「それが“仕事”でしょ。“殺さない”って条件なんだから難易度は上がってる、気を抜かないの。」

それに——

「さてんが怒るよ」

「あー、むしろ超泣きますね」

「どっちもじゃない？ 結局、“裏”のことなんて知らせないから、大丈夫だけど」

「……そうだな」

麦野がみんなを見て、言葉で促す。

「私達“も”時間よ。」

レールガンより先に着いてないと不味いわ」

「だね」

「超同感です」

このわだかまりを振り払うかの様に麦野は号令をかける。

「行くわよ」

「……はい！（おう！）……」

勢いよく返ってきた返事に何ともいえない気持ちになったが、先頭に行くその麦野の表情は誰も見る事が適わなかった。

妹？と別れた後、御坂はどうしても不安が拭えなかった為、初春に頼んだことと並行して、学園都市のデータバンクにハッキングをかけて実験予定日と書かれたところを見つけた。それとほぼ、同タイミングにて、初春から携帯にメールと、解析されたデータがPD Aに転送されてくる。

御坂はデータの中身は絶対見ないで解析したデータの転送をするように初春へお願いしていた。知られたくないし、知らせたくない。それでも、初春に頼まないと難しそうだった。仕方がないとはいえ、何も解らない状態だというのにすぐに、「はい、任せてください」と協力してくれた。

From：初春さん

Re：どういうことでしょうか？…

本文：一応データに基づいて、転送しました。

PS・何があつたかは、聞きません。けど、私でよかつたら、話しくらいは聞きますよ？無茶はしないで頑張ってください。

＊初春＊

（「ありがと、初春さん。…頭が上がらないわね。ホント」）

そこに書かれていたのは、御坂美琴のDNAマップの提供によって生産された、彼女のクローンである量産軍用モデル『妹達』を誕生、生み出す実験の詳細…

「これって…」

実験名：

量産型能力者計画
レディオノイズ

超能力者のDNAマップの提供によって生産された、超能力者のクローンである量産軍用モデル『妹達』を誕生、生み出す実験。

しかし、理論を確立し、量産体制を構築しようとした計画最終段階で、『樹形図の設計者（ツリーダイアグラム）』の予測演算により、『妹達』の能力は『超電磁砲』のスペックの1%にも満たない『欠陥電気』であることが判明。遺伝子操作・後天的教育問わず、クローン体から超能力者（レベル5）を発生させることは不可能と判断され、全ての研究は即時停止、研究所は閉鎖し計画は凍結された。

現在『妹達』は“絶対能力進化計画”に流用されている。

「え？…流用？」

御坂は、今読んだ内容も信じられないのに、それを流用して計画が続いているのだという。

さらに、読み進めていく。

実験名：

絶対能力進化（レベル6シフト）計画

絶対能力者への進化法。

学園都市の七人の超能力者のうち、『樹形図の設計者』の予測演算結果で、絶対能力者にたどり着けるのは一名。通常のカリキュラムだと、250年も必要となる。

それを短縮する為に、代わりに考えられたのが、今回の計画。

特定の戦場でシナリオ通りの戦闘を進めること。これは『超電磁砲』を128回殺害することにより、レベル6へと進化すると判明した。

絶対能力者に到達する為の実験。

「何よ、…これ。…殺害って…」

だが、128人もの『超電磁砲』を用意することはできない。

代わりに、凍結されていた『妹達』を流用する。

2万体の『妹達』との戦闘で、128回の御坂美琴の殺害に相当する結果が得られる。

——とあった。つまり、20000通りの戦闘環境で『量産能力者』を20000回殺害する。というとても正気の沙汰とは思えない内容。

信じられない内容に、御坂は乾いた笑いを漏らした。

「あ、はは… 私を殺すとか、代わりにクローンを使うとか、レベル6とか……。は…あは…何コレ。あの子が9997号ってことは…じゃあ、既に1万人近く殺されてるってこと？」

有り得ない。と口について出そうになるが、ここ数日のこと。そ

して、今日のことを思い出す。

「……でも……。巧さんは、力尽くで連れていかれた……。しかも、街中で爆弾を使うような連中だった。……学園都市の人間、研究者がそんなことしていると言われれば、否定できない……。それに――」

今日会ったばかりだったというのに、御坂とミサカは、本当の姉妹のようであった。

最後、ミサカと別れた時「また」ではなく「さようなら」と彼女は言った。御坂は、そのことがずっと引つ掛かっていた。実験の詳細を知って、御坂の不安は現実となった。

「あの子は、“さようなら”って言うてた……。それって、死ぬって解ってたから？……いつ？……実験予定日は――」

画面に目を落として、ドン！ と強く壁を叩く。

「くそっ！ 何でよ！？」

御坂は、全速力で駆け出す。

「何で今日なのよ！！！」

P r r r r r……。夜遅くに携帯電話が鳴り響く。

液晶を確認するが、知らない番号。

「誰ですかー、こんな時間に。上条さんは、暇じゃありませんよ。っと」ピッ

とか言いつつも、律儀に電話に出る。

「はい、もしもし。どちらさんで「お姉様を！ お姉様を知らませんか！？」……はい？ えっと……今一状況が把握出来ないんですけど……取り敢えず、落ち着いてくれないか？」

「あ、すみません。ですけど、お姉様が」

「いや、そもそもアンタは誰なんだ？ それと、お姉様って……」

「え？ ああ、失礼致しました。まだ何も言ってませんでしたわね。こういう時こそ冷静でないといけませんのに…」

申し遅れました。わたくし、『風紀委員』の白井黒子と申します。わたくしのお姉様、御坂美琴の居場所をご存知ありませんか？」

「ビリビリの？ あー…、日が沈む前には公園で会ったけど…」

「公園ですのね！？ 解りましたわ！ このお礼は、何れ」

「お、おい！」

ツー…ツー…と電子音が虚しく聞こえる。

「切りやがった…」

上条は御坂に何かあったのかと、御坂と別れた公園へと走った。

（「そう言えば、妹さんのことでビリビリしてたような…」）

バチッ！ 電光が奔る。

「おわっ！ 危ねっ！」

上条の近くで放電したと思ったら、黒い影が離れていくところだった。

「ビリビリ？ おい！ 御坂っ！！」

御坂は上条の方に一瞥をくれただけで、そのまま走り去っていく。

「何であんな顔…！」

（「白井にも…友達にも話してないってことか？…」）

夜の学園都市を一人駆ける。

「あー、クソっ！ 何考えてんだよ、あいつは！ 全部一人で抱え込みやがって！！」

金色のブレスレットを指先でなぞりながら、佐天は呟いた。

「新しい友達か―」

ふと、自分を助けてくれた人達を思い出す。

『一方通行』はこれからって感じが―。…火織さんは、どう思ってるのかな?…」

「私ですか? そうですね…」

「あれ?」と佐天が横を見てみると、そこには…

「か、火織さん! 何で…」

「私は、用がありますから。それよりも、涙子。あなたがこんな時間に出歩くことの方が心配です」

「それで態々声をかけてくれたんですか? いやでも、火織さんの方が綺麗だし、狙われやすいですよ?」

「わ、私は、どのような相手でも打ち倒せます。それに涙子は、事故に遭う可能性だって」

それには思い当たる。だからといって…

「そう何度も…」

「それでも、ですよ。夜遅くに出歩く人は、少ない。況してや、こは学園都市。他と比べても、なおさらです。そのような状況で事故などに遭ってしまえば、助かる可能性が低くなります。」

それに――

「…それに?」

「とつ、友がいなくなるなんて嫌です」

「解りました。今まで以上に気をつけます。火織さんも、腕に自信があるからって無茶しないでくださいね? 私も、友達がいないなるなんて嫌ですから」

「ふふ」 はい、勿論です」

「」 神裂の携帯が鳴る。

「はい」

『――き、たく――が見――たぞ。――だ』

「解りました。すぐに向かい」

じいーっ…。佐天が神裂を見つめ続ける。

『どうした？』

「いえ、すぐに向かいます」

（「スタイル…。いえ、私も涙子が居るんだってことを失念していました……」）

「あの、涙…」

「火織さん」

「どうしました？」

「ステイルが“たくみ”って、言っていましたよね？…。たくみさんの居場所、何処ですか？」

（「たくみさん？… 知り合いか…」）

ぎゅっ…と佐天が神裂の腰に手を回して服を握り、抱きつく。

「涙子？」

「死んでも離しません」

「あの、涙子」

「……」

（「服が千切れると少し困りますね… これにも魔術的意味がありますから……」）

「はあ… 私の周りには依怙^{いこ}地な人間が多い気がします…。インデックスですか、あなたは」

佐天は「？」と疑問符を浮かべて首を傾げる。

「解りました。その代わり、私が危険だと判断すれば、私の指示に従うこと。いいですね？」

「はい！」

「そのまま捕まっけていてください。飛ばしますよ」

「え？」

神裂は、佐天を抱えて一気に跳躍する。建物の上まで。

着地と同時に、ぐつと神裂が足を踏み込んだ瞬間、佐天が次の行動を予測した時には空中に躍り出ていた。

「キヤアぁー！？！？」

佐天の叫びが夜空へと響く。

「むぎの、実験開始までもうすぐ……」

「結局、先に行ったんじゃない？」

「その時は、上から超何か言われますって」

「それより、フレンド。ちゃんと仕掛けたんでしょうね？」

「勿論。結局こんな場所じゃ、あんまり意味が無いけどね……」

ドン！ と離れたところから爆発音が耳に届く。

「お出ましのようよ」

タンツと地面に足を着ける音が、妙に響いた。

『アイテム』の前に現れた、常磐大の制服を着た少女。麦野達も待ち侘びた……はずの相手。でも……

「調子狂うわね……」

麦野は呟く。だからといって、相手を通すわけにはいかない。相手も温和しく引き下がることはないだろう。

間もなく戦いは、始まる。

彼女達と出会った『妹達』…。その絆を結ぶのは、一人の少女。

少女が『妹達』と再び出会った時、物語は終結へと向かう（はじまる）。

とうとう始まったんですが、短いかもしれません。

『アイテム』が本気になれなかった？……フレンドは、ヤル気満々（笑）

美琴も結構手加減無しです。

何だかんだで全力むぎのん。援護じゃないの？……

「こっちは、絶好調よ！ アンタ達、また痛い目に遭いたくなかったらそこを退きなさい！」

「さっきの時の可愛さが、欠片もないわね」

「結局、猫被ってたんじゃない？」

「？ 何言ってるのよ」

麦野とフレンドの言葉に御坂は、わけが解らないと疑問符を浮かべる。そんな御坂に、絹旗が声をかけた。

「それにしても、超びつくりですよ。爆風を利用して跳んだんですか？」

絹旗の親しげな話しかけ方にも一切油断せずに、一分の隙も見せようとはしなかった。

「……知らないのもいるわね。今度は本気で潰そうってわけ？」

一層、御坂の声が低くなり、御坂に対して滝壺が不満を述べる。

「みさか、可愛くない。さっきはすごく可愛かったのに」

「アンタ達、さっきから何言っ……て……」

御坂はふと、日が暮れる前のことを思い出した。

（「だとしたら辻褄が合う」）

「もう忘れちゃったんですか？ ゲコ太のストラップ、超あげたじゃないですか」

「！ やっぱり…」

「は？ 御坂、お前大丈夫か？」

「大丈夫よ」

「ならいいんだが」

（「今は、そんなことやってる時間なんて無いのよ！」）

御坂は焦る気持ちを抑えて、尋ねた。

「それよりアンタ達、会ったのね？ あの子に」

「あの子ってことは、結局…」

「あんたじゃなかったってことね。じゃあアレは妹かなんか？」

「そう…ね、そんなところよ」

フレンドと麦野の問いかけに、御坂は歯切れ悪く答えた。

「？ それがどうしたってのよ？」

麦野は、素直に疑問を問う。普通に話してくれる麦野達に、御坂はもしかしたら、解ってくれるかもしれない。と、もう一度頼んでみる。

「この実験で、…あの子が殺されるかもしれないのよ。だから、…退いてよ……」

「そういうわけにもいかないのよ」

麦野の言葉に、御坂は感情が昂^{たか}ぶる。

（「結局…、他の科学者と一緒……」）

「邪魔しないで！！ 邪魔しようってんなら——」

「麦野！ 結局どうするのよ！？」

構えをとった御坂に、フレンドは焦りを覚えて麦野に詰め寄った。

「勿論、戦うわ」

麦野から帰ってきたのは、以前ならば当然だった答え、学園都市からの仕事……ただそれだけ。

「これまで私は、学園都市に従ってきた。今さら変えようがないし、変わりようがない……」

それは、変わりたいと思っているのか……

「……」

答えが出ぬまま、戦闘が近づく。

バチバチッ！

御坂から蒼白い火花が散り始める。

「来るよ！ むぎの！」

「——力尽くでも通る——！」

「散って！」

放電された電光が、落雷となって麦野を中心に落とされる。

「くっ！」

幾つかの光線を放って撃ち落としながら回避して、麦野は一声。

「滝壺！」

「解った」

麦野のその一言だけで、滝壺は理解して能力体結晶（体晶）を口に含む。

滝壺の目が変色した。滝壺の能力が暴走する…。

滝壺 たきつぼ 理后 りこう。肩の辺りで切りそろえられた黒髪に、ピンクのジャージを着用している姿が基本スタイル。脱力系の女子高生。AIM 拡散力場に身を委ねてばーっとしていることが多い。自分ではなく、他人のAIM 拡散力場に身を委ねている模様（特に負担は無い）。

能力はレベル4の『能力追跡（AIM ストーカー）』。一度記憶したAIM 拡散力場の持ち主を補足し、たとえ太陽系の外まで逃れても居場所を探知できる能力。しかし、能力の発動には体晶を服用して、強制的に暴走状態になる必要があったため、自身の崩壊を招く危険性も伴っているが、『アイテム』は滝壺を必要とし、滝壺は『アイテム』を必要としている。滝壺の居場所である『アイテム』の為に、滝壺は身の危険を侵してまで能力を使用し続ける。みんなの為に、何より自分の為に…。

「むぎの、いけるよ」

麦野は滝壺の言葉に頷きながら、他のメンバーにも指示を出していく。

「絹旗！ 援護するわ。死なない程度に全力で潰しなさい」

「超仕方ないですね、前は任せてください」

絹旗 きぬはた 最愛 さいあい。見かけ12歳位（自己申告では中学生）の大人しそうな少女で、ふわふわしたニットのワンピースを着用。ワンピースの丈が短くかなりギリギリだが、角度を計算しているので見えそうで見えない。……らしい。

能力はレベル4の『オフエンスアーマー窒素装甲』。窒素を自在に操ることができる能力で、窒素越しに自動車を持ち上げたり、弾丸を受けとめたりできる。ただし、射程距離は短く、物を動かす際はある程度まで手を近付けて動かす必要があるため、傍目には怪力であるように見える。また、一方通行のような常に能力が展開された自動防御機能があり、例えば狙撃などの不意打ちであっても彼女には効かない。

絹旗は、常時解放している能力を強めてスタンバイ。

「フレンダ！ 絹旗を援護」
「任せて」

フレンダ「セイヴェルン。金髪碧眼の女子高生。脚線美が自慢だが、年下の絹旗よりスタイルが控えめな事を気にしているらしい。

御坂と対等の勝負をできるだけの實力を持つが、詰めが甘い。（詰めの甘さによって、前回、御坂美琴との勝負に敗北した）

戦闘スタイルは、『アイテム』内では唯一能力には頼らず、リモコン式を始め、時限式・着火式の爆弾を武器に用いる方法で、心理戦と場合によっては肉弾戦も併用する。

「浜面！ 何があっても、滝壺を守りなさい！！」

「ああ！ 任せろ！」

浜面 ひまへ 仕上 しあげ。無能力者（レベル0）の不良少年。一応『アイテム』の仮メンバーで、下っ端要員。不良にしては臆病な面や、自らの力

の無さを卑下する一面もあり、スキルアウトのサブリーダーとなつたのも成り行きと考えている（リーダーとしての人望はあった）。資金調達の為、一時的に『アイテム』の雑用として参加している。

ピッキングが得意で簡単に車を盗んだり、ATMの解体の仕方を熟知していたりと、そういう方面の技術・知識も有す。運転免許は持たないが、重機も含めた車両の運転も得意で、スキルアウトや『アイテム』でも、もっぱら運転手役。

浜面は無能力者のため直接的な攻撃能力は無いが、判断力や行動力は優れており、周囲の状況を利用したりするなど機転を利かせた戦いを本領とする。

浜面は拳銃を構えて滝壺の前に出た。それを合図に絹旗、少し遅れてフレンダが駆け出す。

御坂が蒼白く発光した瞬間に、フレンダが烏と蛇のぬいぐるみを放った”。

「いつけー！」

烏のぬいぐるみはそのまま飛んでいき、蛇のぬいぐるみは左に右にと胴体を揺らしながら地を這って、御坂の下へと進んでいく。

「っ！ 邪魔よ！！！」

御坂は絹旗に定めていた狙いを、絹旗も含めた広範囲での迎撃に切り替えて電撃を放つ。絹旗は、近くにあった車を持ち上げて電撃を防いだ。そのまま髪入れずに車を投げつけるが、御坂は車に磁力を発生させて、反発で高く飛び退く。

御坂は空中で絹旗に電撃の槍を見舞うが、絹旗は地面を捲り上げて難なくやり過ごす。

「超危ないですね。前回フレンドが一人で戦ったのは、超称讃に値しますね」

「でしょ?——」

まだ空中にいる御坂へ、フレンドは色とりどりな10cmほどの小玉を空へとバラ撒く。その数は、100を超えているだろう。

バラ撒かれた小玉は、御坂に吸い寄せられるように高速で飛んでいく。

「!? こっ、ん…の!」

御坂は一気に力を上げて自身の周りを放電した電気で包み込む。

ドン! ドドドドドドン! と連鎖的に爆発して半数以上撃破したが、残りの小玉が御坂を襲う。一つ一つの威力は小さいが、数が多く、ダメージは募っていった。

「——アッター——」

御坂は地面に転げ落ちながらも受け身を取り——

「!!!!!!」

——横からの嫌な予感（御坂は、“気配”と言えるほどの自信も実績も無い）。はっ! として、前方へと飛び出す。途端に幾筋もの光線が通過していった。かなりの速さで飛び出したはずだが、ジュッ…。と御坂の髪と制服が焼けていた。

「むぎの! 大丈夫。フレンドみたいに数で攻めれば、いずれ落とせる」

「命中精度落として数を増やすから、方向の指示を頼んだわよ」

（「黒髪の子、厄介な能力みたいね……なら」）

御坂が滝壺の方へ目を向けた瞬間、後ろから銃声。パンパンパン！

電撃じゃなく、磁力で集めた砂鉄で攻撃しようとしたのが功を奏した。砂鉄の盾を作り上げて、銃弾を防いだ。御坂が背中の方に視線をやると、浜面が走り回っていた。

滝壺に向かって駆け出しながら、浜面に10数本の砂鉄の槍で刺突。残った砂鉄でチェーンソーのようなものを作って構えた。

「のわっ！？ 無能力者に向かってえげつない攻撃すんな！ レベル5ってみんなこうか！？！？」

浜面は腕や足に傷を負いながらも致命傷は避け、弾丸が切れるまでさらに発砲を加える。それによって速度の落ちた御坂と滝壺の間に絹旗が割り込んでくる。

「きぬはたっ！」

「滝壺さんに危害を加えようたって、そうはいきません！」

絹旗は、ぶん！と鉄柱を振り回して御坂のチェーンソーと搗かち合う。ガキッ！と甲高い音が鳴り響く。チェーンソーの刃の回転数を上げて鉄柱を切り裂き、砂鉄を棍の形に変形。砂鉄同士に磁力を発生させて反発力を利用して振り抜き――

「吹き飛ばっ！……！」

「ぐうっ！？」「きゃあっ！……！」

――絹旗ごと滝壺を吹き飛ばした。

「……」

「まずは、一人」

滝壺が意識を失ってぐったりとしていた。

「滝壺さん！　っああ！？！？」

絹旗が滝壺の方へと意識を向けた瞬間、絹旗に電撃。御坂は首から頭の辺りを中心とした攻撃を放ち、絹旗を気絶させる。

「悪いわね」

御坂の左腕を先程よりも強力な光線が貫いた。

「あゝあつ！？」

「駄目じゃない、油断しちゃあ」

「くっ！…」

「レールガン、温和しくやられちゃいなさい。あんたに勝ち目は無いわ」

「麦野！」

フレンドの声に飛び退いた麦野の背後から、数十からなる砂鉄の槍が地面へと突き刺さる。

「くそやろおが！」

「まだよ！」

砂鉄の磁力に引き寄せられるように、鉄パイプが飛んできて、麦野の右腕に刺さった。

「!? レエール、ガン！」

その刺さった鉄パイプごと、剣山に変形していた砂鉄へと麦野は引き寄せられる。

一瞬麦野の表情が引き吊るが、すぐさま眉間にシワがより、怒りの形相に変わる。

「なめてんじゃねえぞお!!!」

麦野が放射状に放った特大の光線が、剣山を一気に融解させる。

御坂はその隙にポケットからコインのケースを取り出して口に加えて、コインを右手に取って――必殺の構え。相手との距離は30mほど…

（「充分、射程圏内！」）

麦野は鉄パイプを引き抜く暇もなく、同じく必殺の構えで迎える。

御坂は、コインを上へと弾く。

（「喰らえええっ!!!」）

麦野は、左手を突き出しエネルギーを凝縮する。

「消し飛べっ!!!」

「――!」

「!?!?!」

そこに現れた人物を見て、御坂と麦野の驚きは止まらない。発動した能力も止められない……

（「お願い！止まって!!!」）

二人は願った。“友達”がいなくなるなんて嫌だ。助けて！

彼女達は、友の名前を叫ぶ。

「涙子!!」「佐天さん!!」

第11話 『アイテム』vs 御坂美琴

| 『ITEM』vs mikoto

修正するかもです。

取り敢えず、今はこれで

それではまた。

暁
巧

更新遅くなつてすみません。それでも、待つてくださつた方、本当に感謝です！

やっぱりHEROだねい。

なんか、大事になつて来ました。妹達編。オリジナル展開満載ですみません。（焦）

麦のん達はここまで関わりませんが（それを言つたら神裂も）。それでも楽しんでいただきましたら、嬉しいです♪

では、どぞ。

『アイテム』と御坂の戦いが始まった頃、佐天を抱えた神裂は一直線に『一方通行』がいると思わしき場所へと移動していた。その場所には、巧もいるはずだ。と、佐天が考えていると……。ドンッ！……突如、爆発音が響き渡る。

道行く先で、時たま雷のようなものも見えた。

「っ！ 火織さん、もう少し急げますか！？」

「解りました。私も、早く行った方がいいと考えていたところです。涙子、しっかりと掴まっていってくださいね」

神裂は先ほども増して、スピードを上げていく。

近づくに連れて、何が起きているのか解った。

戦いが起こっているだろうことは解っていた。そしてその内の一人は、御坂であろうとも佐天は予想していた。だがまさか、その相手が麦野達だとは思いもなかった。ショックは大きかったが、何よりも「みんなを止めなきゃ！」との気持ちの方が強かった。

佐天が走って近づける距離になった時の着地前に、神裂が背負っていた刀を直してある袋の紐を解いた。そうすれば、もちろん……空中に放り出される。

佐天が“思わず”声を上げていた。

「あっ！？」

「私待つてますから、取りに行ってください。あの2人を早く止めないと！」

「すみません、すぐに戻ります」

「……」

ふと、佐天は疑問に思う。

（「なんであんな事したんだろう?…」）

神裂が駆け出してから、御坂と『アイテム』が戦っている戦場を振り返る。見ると、麦野の腕に鉄の棒が刺さっていた。

「っ!?!」

驚愕に目を見開いたのも束の間。麦野と御坂のいる方向に向かって、瞬時に走りだした。

（「止めなきゃ、……止めなきゃ、絶対!」）

神裂が刀を拾って振り返ると、戦場に近づく佐天を見て息を呑んだ。

「くっ!」

全速力で引き返す。

が、神裂が佐天に追いつく前に、佐天が必殺の一撃を放とうとしている2人の間に割って入った。

（「間に合わない!……」）

「沈利さん! 御坂さん!」

「!?!?!」

「涙子!!」「佐天さん!!」

止めようと思って動いたのに、佐天は膨大な力を前にして、強く目を瞑ってしまう。

そして2つの力がぶつかり合い、辺りに土煙が舞い上がった。

「……涙子……」

「佐天、さん?…」

麦野も御坂も、膝から崩れ落ちそうになった時――

「あ、はい」

その場に似合わない軽い返事が返ってきた。

「「え?」「」」

麦野や御坂だけじゃなく、神裂までもが声を上げてしまう。
徐々に煙が晴れていき、その姿を見てさらに驚く。

「よう、御坂」

そこに現れたのは、黒髪のツンツン頭の男……

「ア、アンタツ!」

「上条当麻!」

「え? 誰?」

「あー、沈利さん。幻想殺し…イマジンプレイカーってご存知ですか?」

「あの都市伝説の?…」

「この人は、何を隠そう、『幻想殺し』の持ち主で、御坂さんの彼氏なんです!」

「そうなの?」

「違うわよ!! 彼氏なんかじゃないって!」

ガヤガヤ言っている御坂は放って、神裂は佐天に話かけた。

「それよりも…涙子、傷はありませんか?」

「あ、はい。大丈夫です」

「大丈夫です。じゃないわよ!!!」

「はいっ!!」

佐天のセリフを聞いて、麦野と御坂が同時に上げた怒声に、佐天は背筋をピンと伸ばして返事をする。

「2人が何故怒っているか解っていますね？」

「はい……」

「涙子、もう二度とこんなことはしないで頂戴」

「……はい」

「佐天さん、約束して？ 絶対にしないって」

「解りました。約束します」

その代わり……と佐天は2人の顔を見る。

「さっきみたいな危ない戦いは止めてくださいね？」

「ケ、ケンカしてただけよ。ね？ む、麦野」

「え、ええ。御坂とはちよつとケンカしただけよ」

「ちよつと？ ケンカだったとしても、限度があります。だから――」

――

「解ったわ。涙子、約束する」

「私も約束するわ」

そこへ、おずおずと上条が話かけた。

「口を挟んで悪いんだけどさ……なんか急いでたんじゃないのか？

……」

「解ってるわよ」

（「そうよ、安心して居る場合じゃないわ」）

「悪いんだけど、先急ぐから」

「お前なあ……」

まだ一人で何とかしようとする御坂に呆れて溜め息をつく上条。
キキイイツー！！ ブレーキ痕を残しながら、キャンピングカーが止まる。

「おい、いくぞ！ 早く乗れ」

「浜面、気が利くじゃない。――他は？」

「みんな乗ってるワケよ」

「超乗ってください」

「急ご？ むぎの」

フレンダ、絹旗、滝壺が、それぞれ声をかける。

「これ以上此処にいるのは、無駄です。皆さん、急いで車に乗り込んでください。車内にて情報整理しましょう」

神裂の言葉を聞いて、佐天がすぐさま乗り込む。

「私いつちばーん」

「涙子、遊びに行くんじゃないのよ？」

「知ってますよ……」

陽気な調子で乗り込む佐天に、麦野が軽く注意すると、佐天は真剣な表情で答えた。それを見た御坂が、少し心配になって様子を伺う。

「……………」

（「たくみさん……」）

「全員乗り込んだか？」

「おう！ 出してくれ」

「出発だー！」

浜面は、言葉と共にアクセルを踏み込んだ。

少ししてから、会話が再開された。

「じゃ、私達から話すわね」

「沈利さん……？」

「私達の目的は、御坂美琴の足止め。それ以上でも以下でもない。上からは“余計なことはするな”とも言われてるしね」

麦野の言葉の終わりを待って、神裂が話し始めた。

「私の目的は“巧”という名の能力者を捕まえること」

「「え？」」

御坂と佐天は声を上げた。

「超何でなんです？」

「彼に対して行われた実験の隠蔽と、今行われている実験への介入を阻止する為だったのですが、彼の行方が掴めずにいた為に、現在に至っているというわけです」

「そして、今行われている実験っていうのが、『絶対能力進化実験』。識別個体番号No.200000まで存在している、通称“妹達”。それを20000通りの方法で、『一方通行』が殺害することによってレベル6へと到達する……らしいわ」

「めちゃくちゃなこと言ってるわね……」

「もしかして、『妹達』って9982号のミサカさん……ですか？」「え？」

「御坂美琴は、私達のお姉様だって……」

「……………」
「助けたいんです……ミサカさんもたくみさんもアクセラレーターも」

「どうして……？」

「ミサカさんは、また会おうって約束しましたし、たくみさんもアクセラレーターも私を助けてくれたんです。今度は私が助ける番です」

「助けるっ たって……」

「たくみさんもアクセラレーターも人を助けることができる人です。そんな人が、いきなりそういう事……できると思えないし、えっと……なんかされたのかもしれないし、なんかあったのかもしれない。――から、……あー……」

佐天はみんなが見守る中、上手く言葉が出ずに頭を抱えた。

「とにかく、助けたいんです！」

「うわぁ……超極論ですね……」

「あの！……みなさん、力を貸してください！」

絹旗が呆れた声を上げ、それを継ぐ様な形のフрендаと滝壺。

「結局手伝う身にもなってほしいわけよ」

「でも、さてんらしい」

麦野が佐天の目を真っ直ぐに覗き込む。

「…涙子。私達は今回の実験に、何らかの関わりがあるわ。敵味方に別れてはいたけど、投げ出すワケにはいかなかった」

「え？」と返した佐天に確りと気持ち伝える。真剣さと優しさを湛えて。

「私達も御坂の妹のミサカにあった。あの娘に死んでほしくないし、何より、涙子。あなたを放っておけないわ」

「沈利さん」と感動している佐天に麦野は釘を刺す。

「そ・れ・に。あなたはきつと、一人でも何とかしようとするでしょう？」

「あ、まあ…話し合いを……」

「はあ……人を凍らせる化け物と、こっちの攻撃を全て反射する化け物を前に、話し合い？ そんなこと言ってる涙子を放っておける人間はここにはいないと思うわよ？」

麦野の言葉に神裂が深く頷いて同意する。

「そうですね、涙子。さつきあったことを忘れてませんよ？」

「さつき？……さてん、何かあった？」

心配の色を濃く瞳に乗せて滝壺が尋ねた事を御坂が答え、

「佐天さんはね、私のレールガンと麦野の光線の前に飛び込んできたのよ」

「何考えてんですか！？ 超死ぬ気でしたっただんですね？ バカです、超有り得ないバカです！」

「結局、私がついていないとダメってワケね」

「佐天、俺達ダチなんだ。頼ったっていいと思うぜ？」

「いやあ…さすがの上条さんも焦りましたとも」

絹旗が「信じられないっ！」と食ってかかり、「フрендаが仕方がないワケよ」と腕を組んで、浜面も珍しくマジな顔で伝え、上条

も「よかった、よかった」と息を吐く。

そして最後に滝壺が怒っているのか怒っていないのか解らない言い方で、「さてん、めっ!」と、滝壺がぺちぺち佐天のおでこを叩く。

どつと笑いが起きた。

少し笑いあつたあと、表情を引き締めてみんな戦闘に備える。
そこに連絡が入った。

P r r r r……。神裂の携帯が鳴る。

「——はい。ステイル、今そちらへ向かっています。丁度彼らと合流したところです。私達は間もなく到着すると思いますが、あなたはもう着いたのですか?」

「……ああ、今着いたところだ。だが、急いだ方がいい。もう既に始まっている」

「くっ!……解りました。——もっとスピードを上げてください! 戦いは始まっています!」

「僕は、先に始めておく—— プツッ……」

(「たくみさん、アクセラレーター、殺しちゃダメ…… 9982号のミサカさん……死なないで……」)

第13話 実験開始

| s t a r t a n e x p e r i m e n t . (前書き

すみません。長らくお待たせいたしました。
とある何とか更新です。

全く浮かばないこともあるんですね……。上手いことまともらず、
次回更新も怖く思ってます。
それでもどうか、よろしく願います。

操車場にて、白い髪と赤い目、ラフな格好した中性的な少年が一人。その周りには100を超える人数の同じ顔形と服装をした少女達が。

そして、その場所へと急いで向かう、紅髪で長身の神父。紅髪神父と正反対側の方向からゆったりと進む、病院着に身を包んだ男。

少女の中の一人が声を発した。

「実験開始まで、5分を切りました。被験体『一方通行』。準備をしてください。」と、ミサカはあなたに告げます」

「今日は、結構な人数だなア？ オイ。今回は、オマエらが次の“実験”のダミー人形^{ターゲット}ってことでかまわねエンだな？」

『一方通行』は、自分の周囲を見渡して面倒くさそうに呟いた。

「今回は識別番号9900号、10100号が相手をしますので、それを消化していただきます。」と、ミサカは説明します」

『一方通行』は、「はあ…」と呆れたような溜め息をついた。

「オメエらは、生きてえとか思わねエのか？ 痛みを感じるンなら死にたくねエと思うモンだろオが」

「まさか、あなたからそのような言葉を聞けるとは思ってもみませんでした。」と、ミサカは驚愕に目を見開き、驚きを表現します」
「偶々だ」

佐天を助けた日から、『一方通行』は僅かに変化していた。だが、その変化は追いつかず、実験は開始される。

「それでは、これより実験を……………」

「あアン？ どオした？」

「…いえ」

ミサカ自身、自分でも何で言い淀んだのか解らなかった。

「実験を開始します。と、ミサカは合図を出します」

「そおかよ。…結局オマエらも一緒ってわけか。くだらねエ」

悪態について、『一方通行』は戦闘モードに切り替える。

「…………じゃア、せめて。簡単に死ンでくれるな——よ？」

最後の一文字と同時に目の前の一人の至近まで近づく。

「とりあえず…ふっ飛べよ！」

『一方通行』は、力強く踏み込んだ時の力のベクトルを操作して、相手を自分の顔の位置まで浮かせてから、地から天へと拳を振り抜く。その動作と共に巨大な竜巻が生じて、相手を空高く舞い上げた。

「っ！」

爪先を思いつきり地面へとぶつけて決り取り、浮き上がらせた。その塊を粉碎して、四方八方に拡散して放射する。

『妹達』は、散弾した欠片を防ぐことは適わず、手足を撃ち抜かれて、8〜10人ほどが、一気に戦闘不能となった。

だが、“奇跡的に”頭や胸などの急所への直撃は無く、死亡者は出なかった。

「おいおい、まだ諦めねエのか？ 力の差つてのが、十分理解できたハズだがなア？」

「時間は十二分にありますし、実験終了の合図も確認されてませんので」

「そオカよ……？……」

（「息苦しい？……」）

「今夜は、風がないのですね……」

『一方通行』の周りで火花が散っているを見た。そして、口が裂けたかのような、深い笑みを刻む。

「クカカ！ そうか、オゾンか！」

『一方通行』は、他の変化も瞬時に見てとる。

「それだけじゃねエ。銃に電撃に砂鉄……極めつけは、磁場かア？」

全員が殺す気でいる『妹達』に、『一方通行』の理性のネジが緩んでいく。

「電子レンジを体感するハメになるとはなア？ ……ヒヤハツ！」

ギラギラ としての眼差しで『妹達』を見直す。

「イイねイイね最っ高だな、オマエら！ ははっ！ もうムリだわ。」

——イイぜ？ 俺も全力でブツ殺す」

『一方通行』は、

「数で攻めりやア俺の演算も分散されて、勝てるかもなア？」

レールを蹴飛ばし、さつき手足を撃ち抜かれていた内の5人を即座に殺した。

「あアーあ。ヤっちまった……もう収まんねエぞ？」

『一方通行』は、背後にいた一人に抱きついた。

「電子レンジの体験してみる」

「!？」

『妹達』は、声を上げる間も無く、電子レンジに入れられ熱された卵のように パアン！ と弾け、破裂した。

『一方通行』が次なる標的を定める為に動かした視線に、『妹達』の僅かに数名ではあったが、反応が見えた。びくつ と ぶるぶると……その数名は、驚きと恐怖を覚えた。

だけど、彼女達は解らない。驚きも恐怖も。だから、立ち竦んだことも理解できないままに、

「ぼーっと立ってっ」と……

「っ！」

「死んじゃうぞ？」

「こひゅっ！？……」

首を握り潰され、『妹達』は話かけられたことに何か答えようと

したのか、少し首を傾げた状態で絶命した。

「ギャハハハっ！！　簡単に潰され過ぎたるオが！？　蟲かっ
ての」

生命を摘む度に、『一方通行』の瞳が暗く濁り、さらに口汚く罵
る。

「手足をもぎ取ってオナホール、もしくは、脳死させてダッチワイ
フにでもなるかア？　おんなじ人形だもんなア？　カカツ」

『一方通行』が次の獲物決めて腕を振り上げたところで、『一方
通行』を炎が包んだ。

「あアン？」

「その提案は、いただけないな。人を人と見ないなんて、君は神に
でもなつたつもりかい？」

怒りの押し込めた声と視線を送ったのは、紅髪の神父——ステイ
ル・マグヌス。

「神？　あア、イイねエ、それ。神なら無敵だわ」

ステイルの言葉に、それは名案だと手を打つ『一方通行』。

「本気で言っているのか？」

「俺の目指すレベル6つてのはなア……研究者達の間じゃア、『神
ならぬ身にて天上の意思に辿り着く者』って呼ばれているらしいぜ
？」

「神？　科学者がか。……どちらにせよ、狂った人間っていうのは、

どこにでもいるってわけだ」
「で？」

さらなる声が聞こえてきた。

「おまえもその科学者共とおんなじか？」

戦場に足を踏み入れたのは、病院着の男——巧だった。
今し方、殺害されたばかりの『妹達』に目をやり、自己解決した。

「って、聞くまでもなかったか」

「…何々だ、オメエらはよ！」

「僕は、ステイル・マグヌスだ」

「……オレは、何でもない。それより、この実験をしてる科学者はどこか教える」

「はア？　ンなこと話してどうするンですかア？」

『一方通行』が可笑しそうに笑い出しそうになったところで、『妹達』が話始めた。

「符丁の確認は必要ないと、上層部から連絡が入ったので、被験者巧の実験への途中参加を認め、方向性を修正し、改めて実験を開始致します」

「…は？　被験者？……山戯んなよ……。それに、人は神にはなれんし、ここにいるオレらは、人で無し…化け物や……だ…」

巧の言葉を　パン！　と、銃声で終わらせる。『妹達』の1人が、巧の肩を撃ち抜いた。

「…あ…」

巧の頭の中で、自身に行われた実験の数々と、無慈悲に殺された兄妹のことがフラッシュバックする。一種のPTSDとなって、巧の箍^{たが}が外れて、能力暴走を引き起こした。

「ああああ あ あ ツ！！！？！？」

「「「！！！！」」」

突然の変化に、みんなが驚き息を飲んだ瞬間――

「！」

銃を撃った『妹達』眼前まで迫り、躊躇する逡巡もなく、巧は首を切り落とした。

「おおおお あ あア ツ！！！！」

腹を抱えて、『一方通行』が笑う。

「キヒツ、ククカカカ！……あア。確かに、――人で無しの化け物だなア？ ギヒヤハハハツ！！！！！！」

『一方通行』が、さらに歪む。

「もうこれ以上、彼女達は殺させない……」

「あ？」

ステイルは、煙草を根元まで一気に灰にして、ゆっくりと煙を吐き出す。

「…悪いが、魔法名を名乗らせてもらう」

「は？ ナニ言ってるんですかア？」

「Fortis 931」我が名が最強である理由をここに証明する！」

（「何をしている！ この子達を助けたいのなら、早く来い！」）

第14話 助けたくて… | b e a h e l p t o … (前書き)

『一方通行』の残虐さは無いとはいえないけど、原作よりは減少してます。

当麻は『一方通行』の捉え方が原作と違ってます。

第14話 助けたくて…

— b e a h e l p t o —

操車場から腹の底にまで響く轟音が奔る。

移動中の車に乗っているというのに、それとは別の震動が伝わってくる。

「みんな、もう着くぞ！」

キーンツ と甲高い音を立てて急減速。停止と同時に全員車から飛び出した。

「っ！」

そこで見た悲惨な光景に全員が息を飲んだ。

ステイルから連絡があつて、まだ5分ほどしか経っていなかったが、既に十数体の骸が転がっていた。

ギリツ と誰のものだったのか、それとも、誰しもが齒軋りをしていた。

そこへ足を引き摺って這っている『妹達』が目に入ってきた。

その『妹達』は、落としていたゲコ太の缶バッチを拾って、割れ物を扱うかのように、大切なものを守るように、何より、愛おしいものを手にして儚気に微笑んだ。それは、御坂美琴と出会った識別番号『9997号』のミサカだった。

御坂は、はつとしてすぐに駆け寄りながら声をかけた。

「そんな物いいから！ 早くこっちに——」

と。一瞬黒い影が差して御坂は手を伸ばして近づく。筋力を強化

していても間に合わないと思い、レールガンを撃つべく急ぎ構えたが、コインを落としてしまう。

足の動かないミサカへ、解ってはいても叫ばずにはいれなかった。

「お願いッ！ 逃げてえっ！！！」

あと10mとない。ミサカが微かに呟いた。叫んでいる御坂に聞こえるはずのない声が御坂の耳に、はつきりと届いた。

「お姉さまにもらった、初めてのプレゼント……」

（「そんなもの幾らでもあげるからっ！」）

「アンタの命は、一つしかないのよ！？」――」

ぐしゃっ　と音がした。御坂の叫びは虚空へと散り、口から音が零れ出た。

「あ」

落下したコンテナにより、強烈な風圧が御坂を蹴ったがその場に留まり、瞼を閉じることさえしないで『9997号』のミサカがいた場所を見続けた。

影が差してから落ちてくるまでの数秒の刹那。目と鼻の距離まで近づいていたのに、御坂の手は届かず……どろっとした赤黒い液体が御坂の足元を浸す。

（「助けられたはずなのに……！ 私のせいだっ！ 私のせいだっ！ 私のせいだっ……！！！」）

「……あ……ううう、あああ、ああつ！！！！」
「御坂っ！」

上条の声も聞き取れず、御坂は獣の様な雄叫びをあげた。

『一方通行』は怪訝な顔をする。

「あ、ああくせらせ、エエツタアアアアツツ！！！！！！」

『一方通行』の後方から凄まじい勢いで御坂の方に車が引き寄せられ、『一方通行』に衝突。2秒としないうちに、爆発、炎上。だが、『一方通行』は炎の中に平然と佇み、得がいったのか、ニヤリと口角を上げた。

「そうかそうか。オマエ、オリジナルか」

「だったら、なんだって言うのよ！！」

「助けに来たつもりか？　けど遅かったみたいだな」

「黙れっ！！！！」

御坂は落としていたコインを拾って、レールガンを撃つ。

「アンタがやったんでしょうがあっ！！！！！！」

『一方通行』は構えることすらせずに、ただ立っていたただけだが、御坂が気がついた時には数m先で“自分に向かっていた”コインが燃え尽きる場所だった。

「え……？」

「仕舞いか？　第三位も大した事アねエな」

「っ……！！」

（「私じゃ、適わない……あの子達の仇を取ってやれない！」）

「ハッ！ 第三位が、第一位に適うとも思ってたつてのか？」

「適う適わないの問題じゃねえ！ あいつらを救いたいって気持ちのが大切だろうが！」

「なんだ、オマエ？ Levelは幾つだ？」

「上条当麻。泣いてる女の子を助けたい無能力者だ」

「はア？ 『超電磁砲』でコレだつてのに、無能力者が戦うつてかア？ 止めとけ、自殺志願者。この俺の能力。知らないワケじゃアねエだろ」

「……………すまん。解らん」

「おめでたいヤツだな。テメエ、どこまでバカなんだ？」

『一方通行』は両手を広げて話す。

「俺の能力は、運動量・熱量・光・電気量などといったあらゆるベクトル（向き）を観測し、触れただけで変換する能力。つつつたら、どれだけ差があるか理解できんだろ」

「そうだな。Level 5のさらに頂点……さすがに怖えよ……けど、それがどうした。そんなくだらない事でこいつらを見捨てる理由になんねえだろ！」

「だからどうしたッ？ オマエにコイツらが救えんのかよ、無能力者！」

「…おまえ、人助けした事あるんだつてな？ なら……どうして、その時みたくこいつらを救ってやらねえ！？ 『妹達』だつて生きてんだぞっ！！！」

「ああ？ 俺ア既に一人ほぶつ殺してるんだぜ？ そんな悪人に誰を救えつて？ 殺す事アできても救う事なんかできねエよ」

「そんなわけないだろ！ おまえが動けばいいだけじゃねえか！ 他のやつらを救ってやれよ！ それだけの力があんだらうがっ！！

…これだけ言われても救えないだなんて言うんなら、そんな歪んだ幻想ぶち殺してやる!!!」

第14話 助けたくて… | b e a h e l p t o … (後書き)

9997号の子は、書き直してしまおうかめっちゃ悩みました。
そりゃもう……

名前も考えてありますし（苦笑）
自分で書いてて目が潤ってました。

当麻は『一方通行』をただぶちのめすのではなく、『一方通行』も
どうにかならないかと考えます。

次回バトル？

またよろしく願います。

第15話 つながり

— bonds and friends .

『9997号』のミサカの死の瞬間を神裂や麦野達も目にしていた。

「っ！ なんて事を……」

「あつちは、もう始まったみたいね」

「あなたは！」

神裂が麦野に詰め寄る。

「あなたは何も思わないのですか！？」

「はっ！ そんなものとづくに摩耗したっつの。」

あそこにいる氷の能力者も『一方通行』も、もちろん私達『アイテム』も。もう何人も人を殺しているわ。そういう街なのよ、学園都市っていうのは」

神裂は ギリッ と歯を噛みしめた。

（「こんな……こんな事が許されていいのか！？」）

「あなた達は、望んでやっているのですか？」

「あー……超別に望んでいるわけじゃないです」

「なら！」

「結局、逆らえば生きていけないわけよ。それに……闇へ堕ちた人間が今さら表に……光りの当たる場所に出られるわけないしね……」

「私には……ここしか居場所が無いから……」

寂しそくに目を伏せた滝壺の頭に ぽんっ と手を乗せて、麦野

が続けた。

「それだけじゃないわ。表に出て仲良くなった人間を人質に取られる可能性が高いわ……いえ、確実に人質にされるでしょうね。何てったって、『置き去り』を実験に使って何も感じないような奴らだもの」

「チャイルドエラー？」

「親に捨てられた孤児の能力者達よ。ほとんどが小学生くらいで、中学に上がるまでに、実験でほぼ全員が死亡する。“親がいないから誰も困らないだろう？”って考えてるから、誰も何も思わないし、一度関わってしまったら、余計な事すれば殺され兼ねないからね」

「酷い……」

麦野の言った事に、佐天は泣き出しそうな顔で呟く。神裂も怒りを顔に叫んだ。

「腐ってる！ 人間のする事じゃない！！」

「そうね……。…幻滅した？ 涙子……」

佐天は麦野から視線を外すことなく、真っ直ぐに見据える。

「正直……嫌です。私の友達がそんな事するなんて……。けど……沈利さんも絹旗も滝壺もフレンジも浜面も……みんな……友達の為に怒ってくれる、助けてくれる優しい人だって知ってるから……。今から、少しずつでいいんです！ “そういう事” やめていってください……」

「善処するわ」

「……はい……」。

……沈利さん。私、自分だけがいつも……なんでって思っていました……沈利、さん達の方……が辛いのに、私を慰めてくれ、て……わた、

私につは、みんなに何もしてあげることとはできないけど……何があっても、ずっとずっと、みんなと友達だからっ……だからっ！」

佐天の声が途中から揺れていた。それでも、必死に佐天は伝える。
……麦野が佐天を抱きしめた。佐天を離すまいと、ぎゅっと思いを込めて。

「ありがとう、涙子。その言葉だけで、すっごく救われるわ……きつとあの子達も」

「超しょーがないですね♪」

「……さてん、私もずっと友達だよ。ずっとずっと大好きだよ」

「結局、涙子と私は相思相愛なワケよ」

「さ、サンキューな」

『アイテム』の穏やかな笑顔を見て、神裂は自分を奮い立たせる。

（「何処かで、全員を救うのは無理だと諦めてはいなかったか？……そんな事では、あの者達にも会わず顔が無い。——涙子の願いは叶える。そして救ってみせる！ 私の魔法名に懸けて……！」）

どしゃっ　と音を立てて、いきなり人が落ちてきた。

「………！！」「………」

みんな息を飲む。落ちてきた『妹達』の腕は歪に曲がり、足は火傷を負い、身体中の至るところには凍傷も見られた。何より大きいのは、今尚出血し続けている腹の刺し傷。他の傷と相まって、虫の息だった。

だが、『妹達』はゆらりと立ち上がり、先ほどまでいた戦場へと足を向けていた。

「ちよつと！ あなたは何処へ向かうつもりですか！」

「実験はまだ終わっていません。と、ミサカは当然の事を伝えます」
「超震えてますけど？」

少し俯きながら絹旗は尋ねた。

「？ これはきつと、『10007号』のミサカに欠陥があったのだと思います。と、ミサカの考えを告げます」

「どう考えたって、怖いと思ってるからに超決まっているでしょう。あと、これ」

絹旗は右腕を伸ばして、手に持っていた物を見せる。

「さつき立ち上がる時に落としましたよ。……ゲコ太のストラップ」
「……………」

僅かに視線をやったが、ミサカは何も答えない。

「私が超あげたやつですよ？……超要らなくなりましたか？」

自身でも理由は解らないが、ミサカは言い辛そうに言葉を発する。

「…ミサカが持っていていれば、“すぐに”壊れてしまいます。元の持ち主に返せて良かったです…と、ミサカは「あなたの気持ちを超聞いているですよ！」——ミサカはもうすぐいなくなります。代わりの『妹達』にあげてください。きつと喜びます。と、ミサカ、は、ミサカは…あなたに伝えます」

「代わりなんて超いませんよ！ 巫山戯てんですか！？」

「代わりなんて幾らでもありますし、すぐに作れます。ミサカは必要

な器材と薬品があればボタン一つで幾らでも自動生産できるんです、とミサカは説明します。作り物の体に、借り物の心。単価にして十八万円、在庫にして一万七八も余りあるモノの為に『実験』全体を中断するなどできませんし、ミサカの……」

言い淀んだミサカに、絹旗は『10007号』のミサカの気持ちを引き出そうと話続ける。

「ミサカの」、何ですか？」

「……ミサカの、未来は変わりません」

「それって生きたいって事じゃないんですか！？ 借り物の心だったら、そんな事考えるわけじゃないですか！ それはあなたの気持ちです！ 心です！ だったら、超言えばいいじゃないですか！！ 救けてって！ 私達は、友達でしょう！？」

以前までの絹旗ならば、こんな事は言わなかっただろう。今は、心の有様を変えてくれた友がいるから……。それは、絹旗だけじゃなく他の『アイテム』メンバーにも言える事だった。

「友、達……？」

何を言っているのか理解できずに、ミサカは聞き返す。

「そうだよ、ミサカ。きぬはたの言う通り」

「けど、ミサカは模造品で「結局、誰もそんな些細な事気にしてないワケよ」——ですが、ミサカは……」

「私のお気に入りプレゼントしたんです。友達と超認めたって事です。もっと話してみたいって、また会いたいって思ったから……」

言葉が続かなくなった絹旗に代わって、麦野が続ける。

「あんたは、どうしたいの？ 上とか他の奴とかどうでもいいわ。あなたの思ってることをそのまま口にして頂戴。解らなくても、その解らないことを言葉にして……」

「……ミサカは、……プレゼント、喜びました。まだ話とかしたいと、もっと色々知りたいと思いました。……青い空を見て、空の綺麗さと大きさに驚きました。……世界は……こんなに、も、眩しいものだ……」

ミサカの体から力が抜けて、重力に従う。絹旗が受け止めて、横にする。

神裂がルーンを刻みながら、手を翳す。

「多少なら私が癒せます！ ですが、これは応急措置でしかありません。急いで治療をする必要があります」

淡い光りに包まれながら、息も絶え絶えにミサカは言葉を紡ぐ。

「……プレ……ゼント、をもらった時、に初め、て見た夕陽も……スゴく、綺麗だと……ミサ……カは……」

段々と萎んでいくミサカの声を聞いて、麦野が耳に着けていた片方のピアスを外した。

「10007号だっけ？ あんたにコレ貸したげる。——チクツとするわよ」

「っ……?」

麦野が手鏡を取り出して、ミサカの耳を見せる。

ミサカの左耳には、先ほどまでなかったシルバーが ゆらゆらと揺れていた。

「？ ど、うして……？」

「別に深い意味は無いわ。けど、あんたには、見せたいものがあるの。だから、必ずそれを返しなさいよ？ それ、気に入ってんだから」

「……解り、ました。約束します」

「よし」と言って頭を撫でてから、

「もし約束守れたら、ご褒美をあげるわ」

「……難、題を押し付け、るなんて、横暴でワガママな人……です。とミ、サカ、は内心を吐露し……ます」

「ふふつ。それだけの口が聞けるなら、大丈夫そうね……」

佐天が悲鳴に近い声をあげる。

「スタイル……！」

巧と戦っているスタイルが押され始めた。

「彼女達を庇いながら戦っていたのでしょ……時間がありませんすぐに動きましょう！」

「火織さん」

心配そうに見つめる佐天を、神裂は柔らかい声で宥める。

「大丈夫です、涙子。必ずや、みんなを救ってみせます。私の魔法名に誓って」

「魔法名??」

「私の能力の名前だと思ってください」

神裂は刀を取り出し、戦いくさの構えをとる。

「Salvere 000...、救われぬ者に救いの手を」

「火織さん、みんなを救ってください」

「任せてください」

「涙子。私には、頼まないのかにゃーん？」

巫山戯た言葉遣いだったが、麦野は麦野の目は本気だ。

「……沈利さん、絹旗、滝壺、フレンド、浜面。力を貸して！」

麦野が『アイテム』を振り返って尋ねた。

「だそうよ？」

「超やってやりますよ」

「……さてん、がんばろーね？」

「仕方ないわ……結局、私の活躍の見せ場なワケね」

「当たり前だ。友達なんだろう？」

佐天の笑顔を見てから、麦野が素早く指示していく。そして、彼女らを『妹達』とは呼ばない。『御坂』という一つの性で呼ぶ。

「まず滝壺と浜面は、『御坂』達を確保。車が一杯になったら『冥土帰し』のそこへ行きなさい」

「……わかった」

「ああ、任せろ」

滝壺と浜面の頷きを確認してから、視線を移す。

「絹旗はその護衛」

「超安心しててください」

絹旗は どん と胸を叩く。

「フレンダは、ステイルとかつていう紅髪の炎使いと組んで事に当たりなさい。『超電磁砲』と『幻想殺し』だけじゃ不安だから、頼むわね?」

「即興過ぎるタッグなわけよ……。ま、結局、炎使いと私が組めば向かうところ敵無しってやつ?」

「麦野、お前はどうするんだ?」

「私? 私は全力でいくから。邪魔はしないでよ? お待さん?」

「神裂火織です。私は一人で戦場を駆けて来ました。ですから、そつちこそ私の全力の邪魔にならないよう気をつけてください」

「一人軍隊って訳? 私も超能力者よ。ワマンアーミーつまり、……それが組めば最強じゃね?」

「ふつ、当然だな。それより貴様、話し方が変わってるぞ?」

「人の事言えんのかよ?」

口調の違う二人を見たフレンダ達が ひそひそ と話し合う。

「もしかして、超戦闘狂?」
バトルジャンキー

「……私は何も見なかったし、聞かなかった」

「バトルジャンキーズってわけ?」

「うわっ、関わりたくねえ……」

「「あ?」」

「あ、いや、なんでも…」

焦る浜面を余所に、神裂と麦野は　クスリ　と笑う。

「冗談ですよ。行きましようか、麦野」

「そうね。こんなくだらない事さっさと終わらせて、お茶でも飲みに行きましようか、神裂？」

ちよつとそこまで買い物へ行く様な軽いノリで、けれどもその瞳はどこまでも真剣で真っ直ぐ敵を射ぬく。思いを一つに突き進む。

一人は、『聖人』神裂火織。

そしてもう一人は、『原子崩し（メルトダウン）』麦野沈利。

第15話 つながり

— bonds and friends — (後書き)

どうでした？

ちよつと無い組合わせが動きます。

麦野んとねーちゃん。もちろん、忘れて欲しくないのが、フレンドとステイル。『アイテム』&必要悪の教会が組みますよ………考えただけでも自分で楽しみなんですが（笑）、みなさんにも楽しみにしていただきましたらと思います。

では、また。

第16話 合流 — Joint・(前書き)

ラリア「ラスアラさん、感想ありがとうございます。

少しずつ直し入れてってます。まだまだゆっくりとではあります
が…

皆さんもよろしく願いしますね。

第16話 合流 — joint .

「麦野、神裂。先行って紅髪^{あいつ}連れてくからね？」

麦野と神裂へと様になるウィンクをして、フレンドは先行する。

「解った。神裂、行くわよ」

「はい。急ぎましょう」

「くっ……。キリが無いな」

（「準備は整った。後は……」）

「ステイル！」

ステイルは前を見据えたまま返す。

「神裂か」

「すみません。遅くなりました。この子と共に彼方へと向かってください」

僅かに視線をやり、「ちっ…」と舌打ちして、ステイルは下がる。

「解ったよ。——行くぞチビッ子」

「どう見たって、あんたのがデカぶつなワケよ」

言い争って去って行く二人に呆れつつも、能力者、…巧から目を離さずに神裂は何時でも飛び掛かれるよう構えた。

「あなたが、“巧”ですね？」

『ううううううっあゝあゝ ああああッ！！！！！！』

巧は白い靄と共に大きく軋みをあげる。

正常な人間には、見えない……いや、できないであろう慟哭と身体中が焼け爛れ、凍りつき、それでもあらん限りの能力を使い続けている“人”。

「はっ。アイツも化け物ね」

「実験とやらは、人をこうまで壊すのですか……！」

神裂の唇が赤色をさらに鮮やかにしていく。

「救います……！ はああ——っ」

どごっ！！！！ 落雷とみまごう轟音を響かせて、神裂が巧の後頭部へと“鞘”で殴りつけていた。厚い氷の壁に阻まれたはずだったが、それさえ砕き抜けて肩を打ちつけていた。

（「っ！ 軌道が逸れたか！」）

しかし、神裂の攻撃は止まらず、下から掬い上げる様に逆袈裟に斬り結び、反対の手の指を動かして飛び退く。

僅かに巧の腹から胸に亀裂が入り、血飛沫が飛んだと思ったが、すぐさま傷口が凍り、応急措置が行われていた。

（「浅いつ」）

麦野と神裂は刹那の間視線を交わす。

ニタアツ と嗤^{わら}った麦野は、光球を4つ浮かべて放つ。先ほど動かしていた物を使って、神裂がさらに追撃をする。

「七閃!!」

光線が目標に当たり、爆煙が発生。そこに目には見え辛い鋼系による斬撃が切り裂く。

「神裂イ、やり過ぎじゃない？」

「人のこと言えないでしょうに」

「腕と足をもらっただけよ」

「全……くっ!？」

平らに伸ばされた水流が横切った。間一髪。避けたところで、神裂の背後で音がした。

「っ! 鉄をも斬りますか!」

麦野は、巧の動きを見つめ、攻撃の正体を探る。

「神裂、少し頼むわ。軽くしか援護しないから」

「問題ありません。あなたこそ頼みます、よっ」

飛んできた氷の矢を躲し、再び七閃を駆使して巧と対峙する。今度は試したりせず、攻撃の確認は麦野に任せて油断無く捌く。巧にワイヤーを避けられても、縦横無尽の攻撃は止む事無く、

「そこです！」

鋼系によって刻まれた魔方陣が、巧を中心に炎を生み出した。
2秒としない内に鎮火されてしまったが、ダメージはあったよう
だ。

「ああああッッ!!?!」

(「獣ですね……。けど、人に戻しますから…必ず」)

「つつ!……これは」

熱い靄。蒸気に囲まれていた。

(「不味いつ!」)

今度は神裂自身を中心に爆炎を発生させて、蒸気を霧散させる。

「はあっ…はあっ…」

「待たせたわね神裂。解ったわよ」
「本当か」

「ええ。そいつは多分、水を自在に操る能力者」
「温度変化だけじゃ説明がつかないもの」

話ながらも原子の牢獄を造り出し、巧を囲う。腕も通らないよう
な網目の牢獄。

理性の無い巧はただただ様子を伺っていた。

「アイツが動き出す前に手短に言っわ」

「ああ」

「初めに神裂の攻撃を防いだ氷は、温度変化による水の変化と見られるわ。そしてその後の水の剣のようなものは、水流操作によるものの」

「水流…？」

「そう。地球上で最も固いとされている石って知ってる？」

「金剛石ですよ」

「正解。それを切断する為に使われているのって、鉄じゃない。刃が折れちゃうもの。…で、何が使われているか解る？」

「ええ。水……！　そうか」

神裂が理解して声を上げる。麦野はそれを見て頷き、続ける。

「正確には、水流を使って切ってるのよ。その切断機、ダイヤモンドカッターとほぼ同じだと思う」

「リーチは私の方があるとはいえ、恐ろしいですね…。さらには、あの蒸気ですか」

「そ。あれも温度変化ね」

「だけど、攻撃を防いだのはどうやって…」

「それをこれから確認するの、よう！」

言葉と同時に牢獄は縮まり、巧事圧縮する。

「麦野！　何を…」

「見てみなさい」

「なっ！？」

神裂が麦野の言った通りに視線をやると、そこには巧が、何事もなかったかの様に佇んでいた。

「水に自身の姿を映していたんでしょ。今はアレが本体だろうけど」

「厄介な……。ん？ 雨……か……。最悪ですね」

ぽつり と頬を打った雫は、次第に数を増やし、視界を妨げるほどの量になる。

水を使う能力者のフィールドが広がった。

「デカいの。結局、大丈夫なワケ？」

「何がだ、チビッ子」

「あんた、ずっと二人を相手してたワケよね？」

カチカチカチカチつ とセロテープや修正テープを使っている時に聞こえる音が鳴る。

「ふん。まだどうとでもなる。それより、キミは何をして走っている」

「下・準・備」

「下準備？」

低姿勢を保ったまま走り、フレンドは上目遣いで返した。

「そ。あんたは？」

「ステイルだ。僕はもう準備は済ませてある。キミも急げよ」

「キミじゃなく、フレンド。んなこと言われなくなつて解ってるわよ。ステイル先行つて」

「一気に決めるからな」

「もちろん。あんなのといつまでも、戯^{じゃ}れ合^あってらんないっての。結局、命が幾つあっても足りないし」

「ふん。どうやらコンテナの中身は小麦粉だったみてエだが。今日はイイ感じに無風状態だし、こりゃあひよつとすつと危険な状態かもしんねエなア？」

『一方通行』の声が上条に突き刺さる。

「なア、オマエ。粉塵爆発って言葉ぐれエ、聞いた事あるよなア？」
「!？」

背後の声に上条は息を呑む。

直後、あらゆる音が吹き飛ばされた。

衝撃波が上条の背中を叩いたが、爆炎に吞まれることはなかった。

「ばか！ あんた無茶し過ぎよ！」

「み、さか…？」

御坂が砂鉄と鉄屑で作り上げた盾によって爆風を防いだのだ。

『一方通行』は気にすることなく歩む。

「まったく、あアそオだった。さつき身をもって経験したばつかじやねエか、酸素奪われるとこっちも辛いんだっつ。あア死ぬかと思った。喜べ、オマエひよつとして世界初じゃねエのか？」 『一方

通行』を死ぬかもしれないねエトコまで追い詰めるだなんてさア」

紅蓮の中。本当に世間話をしているみたいに、軽い声だった。
その炎の地獄の中、そんなに気楽でいられる事こそが、上条と御坂の恐怖を煽り立てた。

「そいつは良い事を聞いた」
「あアン？」

何処からか響いた声に白い怪物が怪訝な顔を見せる。

「僕の炎は反射し辛いんだったよね？ そっやっていつまでも嗤っていられるといいな」

紅い色を見て、『一方通行』が嫌悪を顕にした。

「オマエか」

「ステイル！」

「全く。キミは相変わらず、地面を這いずり回るのが好きみたいだね」

「んなことあるか！ 俺はいつたい、どんな変態さんなんですか！？」

ステイルのセリフに、上条はさっきまで感じていた気持ちが吹き飛んでいった。

「おい」

「え？ あたし？」

自分を指さす。

「そつだよ。キミはこのバ力を守るだけでいい。後は僕達で何とかする」

「あのね！」

「御坂、俺からも頼む」

「ああ、もう！」と言いながら がしがし と頭を掻いて御坂は請け負う。

ステイルはタバコを燻らし、上条に促す。

「チャンスを作ってやるから、その右腕の異常さを見せてやるという」

「はっ。ありがたい話だな——じゃ、見せつけてやるか……いくぜ、最強——！」

白い魔王は嗤う。…俺の運命さえも変えて見せろと。

「——友達や恩人の人たちが傷つけ合うのをただ見ていることしかできないなんて……こんな思いをしたくて学園都市に來た訳じゃないのに……夢を持って……來たのに……」

佐天の呟きは、戦場の音によって掻き消された。

虚ろな瞳は、何を映すのか……

「…力が…欲しい……」

歪みは歪みを生み出し、齒車は狂い始める……

第17話 心 — personal reality・(前書き)

みなさま、お待たせ致しました。

鷺つちよさん感想ありがとうございます。

悩みに悩んでの投稿です。ダメ出しとありましたらすぐさま直させていただきますのでよろしく願います。

うちの『一方通行』さんは、少し違いますが、それでもって方、どうぞ。

第17話 心 — personal reality .

どん！！ 『一方通行』を起点に火炎が爆^はぜる。

「なんだ!？」

「落ち着け。みっともない」

「仲間、か？」

上条とは違い、御坂は心当たりがあつたのか、ぱんつと手を打つ。

「あの金髪の子ね」

「そうか、だから僕と組ませたつて訳か。火の中に焼^くれば反射な
ど関係なく燃えるからな……酸素を奪い続けるか」

「怖いこと言うわね、あんた……」

「なあ、俺いらねえんじゃねえか？」

「バカか。これは一つの案というだけで、最善はやはり貴様の右腕
だろう」

「弱らせた方がチャンスも生まれるだろうからな」とスタイルは
攻撃を始めた。

「灰は灰に、塵は塵に——吸血殺しの紅十字!!」

煌々と燃ゆる炎剣と静々と揺らめく青白い炎剣が握られる。摂氏
3000度もの炎は現出しただけで、周囲の温度を上昇させる。

「なっ！ 何よアレ……」

御坂の驚きが洩れ音になる。

完全には反射できない『一方通行』は「ちっ!…」と短く舌を打った。

ダメージ覚悟で反射しなければならない。だが、周囲の温度を上げる様な高温を“二度”も浴びたくはない。

「逃がすかつ!」

投擲された炎剣を『一方通行』は避けるが、刺さったところから火炎が広がり、『一方通行』を飲み込んだ。

さらに、それに合わせるかの様に10cmほどの小玉が数十と炎に追加されていった。

小型爆弾によりもうもうと立ち込める煙に紛れて、火種を投げ入れる。

(「焼夷弾ってワケよ」)

「お待たせ! そら、そら、そらっ!」

石油などの燃焼物に、スモークグレネード 煙手榴弾、スタングレネード 音閃光手榴弾放ち、「おまけっ」と言って数個の焼夷弾を投下するフレンド。

「チビッ!?!」

悪態をつきながらステイルが急いで目を防ぎ、それを見ていた二人も目を閉じた。

光が世界を覆う前に、ステイルはルーンの刻まれたカードを使う。

「燃え盛れっ!」

炎は轟々と勢いを増して大地を焦がす。
が、突如声が響く。悪魔が地の底から這い擦り出でて来るかのよう
に。

「オマエらは頑張ったよ。オマエらは本当に頑張った。——だから
イイ加減に楽になれ」

炎の中で、『一方通行』の体が低く沈む。
そう感じた次の瞬間には砲弾のように飛び出した白い悪魔は、攻
撃を防ごうと盾にした炎剣ごとステイルを蹴り飛ばした。

「っがつー!!」

着地の瞬間。今度は着地の衝撃で砂利の弾丸を全てフレンダにぶ
つける。それでも砂利の勢いは止まらず、フレンダはコンテナに叩
きつけられた。

「……やだ……止めてよっ!!」
「御坂待て!」

ふらつとしたが、そのまま御坂に声をかける。

「お姉……さま……」
「! アンタ何やってんのよ! ……そんなぼろぼろの体で」

飛び掛かるつもりだった御坂は妹の体ミサカを支えた。その妹から、淡
々と告げられる。

「何をやっているんですか……? お姉さまもご存知かと思いますが、
あなた方の行動は理解し兼ねましたので、ミサカは問いかけます」

「…何よ」

御坂は、静かに言葉を待つ。

「ミサカ達は必要な器材と薬品があれば簡単に作れます。単価にして十八万円、作り物の体に、借り物の心を持った人形ひとがたです。在庫にして一万七八——訂正します。一万七七も余りあるモノの為に……いくらでも替えを作る事のできる模造品の為に、替えの利かないあなた達は一体何をしようとして——「黙りなさい！」——お姉、さま？」

御坂は瞳を潤ませながら怒っていた。

「さつきから、黙って聞いていれば……巫山戯んじやないわよ！！作り物の体で借り物の心を持った模造品？ ……替えが利く……ですって？」

「御坂……」

彼女が傷つけば、こんなにも胸が痛い、苦しい。殆ど表情は動かないが、呆れた顔もしてたし缶バッチを貰ったと、微かにではあったけど喜びが見て取れた。

『妹達』だって生きている。知っている。…知ってしまった。

だから救えなくて悲しいし、彼女達が笑って生きていけないのが悔しい。

「今こうやって話ているアンタは一人だけでしょうが！ 一々理解する必要なんて無い！ 『妹達』あんなたちのお姉ちゃんなの！ 妹を助けたと思うのは当然でしょ！！」

妹は言葉にならず、目を見開く。

未だ理解の追いつかない妹に、上条が助け船を出す。

「おまえの姉ちゃんがそう言ってんだ。こういう時は、素直に甘えとけ」

「甘え、る？ ミサカは戸惑いながらも尋ねます」

「そうだ。妹の為に怒ってくれてる姉ちゃんに、ただ一言……」
「たすけて」って言やあい。な？ そうしたら、怒った姉ちゃんとその友達がおまえらを救けるからさ」

この人達は、なんて不思議で…変で…あつたかいのだろう。とミサカは思い、素直に告げる。妹から姉に対しての初めてのお願い。

「…お姉さ、ま…たすけてください……」

「うん、任せなさい！」御坂は嬉しそうに頷く。

姉として頼ってくれた事。本当に嬉しいと感じた。…まだ、自分の事を許せそうになかったが、初めてのお願い事を叶えようと思う。例えそれが勝てない相手に挑むような、無茶で無謀な願いであつても。

パチパチパチパチ…。場違いな拍手が辺りを包む。

「一般人を巻き込むなンぞ、後味悪イと思つたが…」

『一方通行』の考えが崩されていく。あれではまるで“生きていくみたい”ではないか。「生きてる？ アイツらは人形にんぎょうだろ。そう言つてたじゃねエか…」。一瞬。頭を過よぎつた。彼の自分だけの現実が揺らいだ。自分だけの現実が根幹から覆されるかもしれない……。コワイ。コイツらは危険だ。

彼に潜む一種の防衛本能だろうか…？ …それは本人にも解らな

い。

もう………

「仕舞いだ」

後には戻れない。

だから構える。生体電気を、血流を操作し骸にかえるその死の両手を。

「遺言は済んだろ？ 右手の苦手が左手の毒手が……それとも両方か。好きな方に触れる。死なせてやるから、よ！」

「！？」

「逃げて！！」

咄嗟に腕を振るつたが『一方通行』の速さについていけず、できたのは、ただ我武者羅に上条は動かすことだけだった。

だが、

ぐしゃり、と。何か鈍い感触と共に、『一方通行』の顔面を殴り飛ばしていた。

「「え？」」

放った上条はもちろん。見ていた御坂も一緒になって素っ頓狂な声を上げる。

殴られた『一方通行』以上に殴った上条の方が驚いただろう。ぼろぼろの拳に殴られた怪物が面白いようにぶっ飛んでいつて砂利の上へ倒れ込み、もそもそと蠢いていたからだ。

「ア、は。痛い、痛エ……？ は、はは！ 何だよそりゃあ？ 面白エ、ははは、ちくしょう。イイぜ、最っ高にイイねエ……。愉快に素敵にキマっちまったぞ、オマエはアアアッ！！！」

（「……、まさか」）

『一方通行』は上条の懐へと飛び込んでくる。
その、触れただけで人を殺す右手が上条の顔面を狙う。

（「まさか、こいつ」）

上条は首を振っただけでこれを避けた。
特に軍隊みたいな訓練をしている訳でもないのに、簡単に避ける事ができた。

（「もしかして——」）

攻撃を外した『一方通行』へ、カウンターを決めるようにさらに懐へと潜り込んで、

（「もしかして——メチャクチャ弱い？」）

「じぶあ！？」

上条の拳が『一方通行』の顔面へ突き刺さった。複雑な軌道を描くナイフの動きを連想させる左右の手は、けれど上条の肌には擦りもしない。毒蛇のような『一方通行』の二本の手を掻い潜るように、さらに二度、三度と上条の拳が『一方通行』の顔へと襲いかかる。

「ちつくしよ、何だ？ オマエ。なんつだよその変な動きは！ ウ

ナギじゃねエンだからウネウネウネ逃げてンじゃねエ！」

「はっ、負けた事がない、ね」

上条はステップを踏みながら拳を打ち込んでいく。

「だからこそ、テメエは弱いんだよ！ あらゆる敵を一撃で倒し、どんな攻撃も簡単に反射する。そんなヤツが、ケンカの方法なんか知ってるはずがねえってな！！」

そう。『一方通行』の戦いは『勝負』ではなく、一方的な『虐殺』でしかない。それも身についた『能力』があまりにも強力過ぎた為に、『戦い方』を覚える必要すらなかった。

『一方通行』の攻撃……それは、拳を握らず振るわれるのは掌底ですらないという事実。そのようなムチャクチャな構えをしていても、あらゆる敵を一撃で必殺でき、あらゆる攻撃を反射できるのならば上手く敵を倒す技術を磨く必要はないし、相手の攻撃を見切り、避け、防ぐ努力を積む必要もない。技術や努力とは、言ってしまうば弱い人間が力を補う為のものなのだ。

だが仮に、その強力な必殺能力を封じる右手があつたとしたならば？ 相手は、絶対に何をして倒せない『無敵』ではなく、単なる倒し難いだけの『最強』だというのなら――

（「『無敵』と『最強』。その僅かな隙間にこそ、勝機はある！」）

「チツ、―― 吼えてンじゃねエぞ！ 三下がアツ！！！」

『一方通行』の足が、たん、と軽く地を踏む。すると、見えない糸で吊り上げられるかのように大地に根を張る鋼鉄のレールが起き上がった。

後は殴れば、鋼鉄の弾丸の完成だ。

だが、そんな事言われるまでもなく、予想ができた。だから上条はそれを阻止する。

「ぐはっ！ く、は、… だからっ何なんだよその右手は！」

大きく足を上げて振り下ろす。巻き上げた砂利の『向き』を操り、大量の散弾を上半身目がけて勢いよく撃ち放つも、地を這うように屈んで避けて反動をつけて立ち上がりながら『一方通行』の顎を下から穿つ。

「っ！？！？」

ガチン！ 強制的に咀嚼をさせられて、口内が裂傷する。

「おまえだつて解つてんだろ。……『妹達』だつて、精一杯生きてんだつて」

「…れ……」

『一方通行』の記憶にもある。彼女達が生きていると思い始めた些細なやりとり。

一方通行でない、バカみたいな会話を。

——『遅れまし——げぶっ。た』

『登場早々にゲップか。一応オメエは女なんだからオが。しかも、ケチャップ付けた服着て歩くなよ…』

『これは別に食事に夢中だったワケではありません。無我の境地に目覚めてしまったが為に時の経過を忘れ、その事を謝罪すべく急いで馳せ参じたが為起こるべくして起こったのです。とミサ力は弁明します』

『どんなだよ。時間を忘れるほど無我夢中だったってか？ 何食

「たつてんだ？」

「ケチャップライスなるものを食べたミサカは最強です」

「……」

「最後の晚餐に相応しい美味であつたとミサカは『はアッ!?!』
『——何々だ、いきなり大声を出して。気でも違つたのでしょうか?』と実験前の心配事を払拭すべく尋ねます。『一方通行』気でも違つたのでしょうか?」

「ケンカ売つてんのかデメエ!?! 2回も言わなくても聞こえてんだよ」

「大切なことでしたので2回言いました。とミサカは説明します」

「つーか最後の晚餐がケチャップライスとか有り得ねエ。——お

い」

「?」

可愛らしく首を傾げる。その姿は、栗鼠リスのような小動物を彷彿とさせた。

「飯食いに行くぞ。本当に旨い飯つてのを食わせてやんよ」

「……………は?」

たつぷり10秒は経つた後に、声、というよりは音が出た。

「あア。その前に服だな。そらねエわ」

「実験はどうするつもりでしょうか? とミサカは疑問をぶつけます」

「今日は無しだ。ゲップ女」

「もやしからの不快な呼ばれ方はこの際我慢します……ん? 服を買いに言つた後に食事だと……? これは俗に言う逢引きというやつでは!?! 所謂デートですね? とミサカは『一方通行』に尋ね

ます』

すたすたと、『一方通行』は何も言わず『妹達』の前を横切って先へと進んだ。

『聞けよ！　と思わずツツコンでしまいました。知られざる能力の発見にミサカは喜びます。ていうか、ミサカのスペック高くて？　とミサカはほくそ笑みます』

『食わねエンだな？』

『いま食いに行きます』

『黙ってる』――

（「忘れていた？……。違エ！　…もう……」）

「今おまえは必死に戦ってんじゃねえか。超能力チカラのあるおまえだつて必死になるんだ。『妹達』はもつと必死に生きているはずだ」

「…ま…れ……」

「『妹達』もおまえも、俺とおんなじ人間だろうが！　闇に吞まれんな、『一方通行』アッ！！」

……ぼつり……。頬に水の感触。

（「…雨……？」）

さらに、不自然に髪が揺れる。

数秒のうちに音も大きくなってきた気がした。

（「……、風？」）

「黙れエエエエエエエエッ！！！！！！！！」

「！　ぐっ…！？」
「キヤアっ…！」

上条と御坂はもの凄い力で横殴りに飛ばされる。
御坂は磁力を反発させて勢いを殺したが、ぽきっ。という軽い音と共に大量の脂汗が滲み出てきた。

上条の方は為す術なく、風車の鉄柱へと身を委ねた。
ゴン！……。辺りに鳴り響いた音が長く耳を揺らす。
落ちた地面に紅い染みを広げる上条を洗い流さんと雨脚が強まった。

「……………え？　は…？」

御坂は今日の前で起きたことこの理解が追いつかず、意味のない声を漏らす。

「な…んで…？　…や…いやあああああッ！！…？！」

嘆く御坂を放って血溜りへと声を投げかけた。

「はっ！　何だ何だよ何ですかアそのザマはア！　おら、立てよ最弱。オマエにやまだまだ付き合ってもらわなきゃならねェンだよ！」

上条は豪雨にかき消されそうなほどの音で必死に何かを訴える。

「…せられ…た……。…めろ。み、さか」

（「よかった、まだ息がある。急げば………」）

「俺だけの現実を曲げるワケにはいかねェンだ」

（「アイツらの死が無駄になっちまう」）

「巫山戯るな！　どんな御大層な理由かは知らないけどね……一万人近く殺してるのよ。あんたも、あたしも…。

ただどあたしはその事実から目を逸らさない。その罪を背負って生きていく！　何よりあたしはあの子達のお姉ちゃんなの！　だからあたしは、あの子達の現実を守る！　守ってみせる……！」

それぞれの思いが交錯する。

捻^ほれ解れた糸の先にいるのは『妹達』。

捻れや解れを直し、切れかけた糸を繋ぎ止めるのは――

パン！　頬^{はた}を強めに叩き、気を入れ直した。

「よし！　やってやりますか！」

腕捲りの仕草をして少女は駆け出す。

それらを眺めていた二つの眼差し。

「色々面倒なことになってるし……。ただ彼女を見守っていればいいんじゃないかったっけ？」

「自分もそう聞いている。それより、手助け」

問いかけに対して、語尾をぶつと切るようにして返答。

「あなたは無関係でしょ？　表では」

それについて彼女は、付き合いが長いのかきちんと理解して返す。

「その通り。けれどもチーム」

「色々迷惑かけるわ。って、何だか今日は色々謝ってばかりね」

「お客さんに？」

「そ。後は店長とかにも色々。そのお陰でアド交換できたんだけど、『アイテム』に顔を覚えられるんじゃないかとヒヤヒヤだったわ」

「お得意様」

「まあ、常連客なんだけどさ。…外から色々持ち込むのは勘弁してほしいわ」

『アイテム』のメンバーは外から鮭弁当やら缶詰め（ほぼ鯖）を持って来店している常がある。

「けれど、重宝」

「そうなの。裏の人間から表の人間まで色々様々さ。『一方通行』や『アイテム』に、『幻想殺し』『超電磁砲』『守護神』。さらに『レベル5候補の『能力追跡（AIMストーカー）』』、『座標移動』、『腹黒空間移動能力者』に木原の人間も来たんじゃないかな？」

次々と名前を挙げていき、

「魔術師は？」

と短く返す。

「も色々。『インデックス禁書目録』を筆頭に、『必要悪の教会』関係者かな？
土御門元春とか、天草式十字凄教とかも」

常のやりとりなのだろう。気にする風もなく続ける。

「デルタフォース揃い踏み」

「その中に親しい人間がいた？」

「別に。自分のことを知っているとは思えない。土御門でさえ」

「そ」と短く答え、戦場を駆ける少女を見やる。

ただ佇んでいるだけのその影に気づく者はいなかった。

どうも。とある更新つと。

今回新たな参加者が。少し登場していた人物と、突如の参戦者。どうしても書きたくなった。

では、どうぞお楽しみください。

「軽いケガなら超放置で、本当に危険なだけ超連れていきますから」

「急げよ？」

「超解つてます！」

「……………」

浜面と絹旗の会話には加わず、滝壺は瞼を閉じて静寂を保っていた。

「つたく！ とんだ事に巻き込まれたな」

「浜面、この辺はこの子だけです。愚痴ってる超暇があるならさっさと急いでください」

「ああ！」

時々、爆発音が聞こえてくる。実験開始直後から聞こえ続けている、もう既に慣れて驚かなくなっていた。ただ一人を除いては……。再度車を走らせたところで、滝壺に声をかけた。

「滝壺大丈夫か？」

こくり。と頷くだけの滝壺に、浜面と絹旗は顔を見合せる。

「！」

突如、滝壺が立ち上がりばかりの勢いでいきなり目を見開いた。

「どうし——」

浜面が「どうした？」と問うまでもなく、全身の毛がぞわぞわつと逆立った。

「——何だ…コレ…？」

「……来た」

「滝壺さんが記憶しているAIM拡散力場の中で、こんな嫌な感じするのは指折り数えるほどですよ……」

こんこん。運転席がノックされる。

横を見ると、茶色く染められた髪に白いシャツ、黒いスーツを着崩したホストのような男が“並走していた”。

「なっ!？」

「わりいな、遅れたわ。パーティー会場まで案内してもらえるか？
ああ、そうだ。反論は受け付けてねえ」

そう言って、当たり前前にドアを外した。

（「超ヤバいですね……。ここは……」）

結論を出した瞬間には、もう行動に移していた。

誰かが動き出す前に絹旗は車外へと飛び出して、男を殴りつけていた。

「絹旗っ!」

「バカ面っ! 超さっさと行けっ! 足手纏いです!! 消えてく
ださい!」

「つく……。早く来いよ」

浜面の声を聞きつつ、土煙を上げる建物を注意深く見やる。
すると、案の定声が聞こえてきた。

「ム力ついた。俺は穩便に済ましてやろうとしてるってのに……。
いきなり埃被せやがつて」

絹旗が予想するまでもない。コンテナを幾つも突き破り、巨大な
倉庫になっていた建物を倒壊させた“程度”だったからだ。
その程度絹旗にも耐えられるダメージだ。

「完全ム力ついた。てめえを8割潰してから聞くことにするわ」
「超有り得ないですから。8割も潰れていたら超死にます」

男はポケットに手をつ突っ込んで他愛なく話す。

「なに、気にすんな。俺に常識は当て嵌まらねー。俺にとっての常
識ってヤツを見せてやるよ」

「常識を当たり前にする……あたりまえ日常にできるなんて……ですね」

ソレが目の前にいるのが認めたくなかったのか、「化け物ですね」
と言ったつもりの絹旗の声が知らず、細くなっていた。

（「関係ありません。超潰すだけです」）

即断即決即攻。地面を捲り上げて目潰しをして、貨物列車を投げ
つける。澱み無く行われた動作。

ズオオオンッ！！ 音が大地を揺らす。

鮮やかなオレンジ色が辺りを呑み込み、巨大な窪みに灰と黒の煙をも生み出したが、「ごほっ」と一度咳き込むだけに終わった。

（「何をしたっていうんです!？」）

絹旗は呼吸すら忘れて茫然としてしまう。

確かにダメージはあったのだろう。スーツがぼろぼろになり、薄汚れていた。それでも二本足で立っていたってだけのこと。……それだけのことが恐ろしくて仕方がない。

「次は、こっちの番だコラ」

男の背から3対6枚の純白の羽が生える。

それはまるで、絵画から飛び出した熾天使セラフィムのようだった。

男は空高く舞い昇がり、宣告する。

「月の光を浴びて死ね」

まさしく天の使い。

大きく翼を広げると、それが月光を通し破壊を撒き散らした。

「っ!？」

『室素装甲』を持ってして、皮膚が焼け爛れ始める。

急ぎ、飛び退いたところで火傷した箇所がひんやり心地よくなつた。

「雨……ですか…」

男は両手を広げて天を仰ぐ。静かな語り口が、

「なあ。天の恵みをやるうか？」

恐怖を煽る。

「！！！」

絹旗に戦慄が奔った。直ぐ様、何をしようとしているのか理解できた。

何かしようとしたが喉が干上がって声も出ない。唾を飲んでみたものの、喉の痛みを確認してきただけだ。

ぶるぶる…。

……腕が震えていた。

…いや。気がついた時には身体中から震え上がっていた。

「はアアアアアツ！！！！」

それを誤魔化すかの様に声を張り上げ、虚勢で埋めていく。

「どうした。——怖いかな？」

（「そんな事あるワケ無いじゃないですか。今さら…」）

死ぬ事が怖い訳が無いと思っていた。暗部をやり続けて数々の死を乗り越えて来た。それが“当たり前”だと思っていた。だが、思い知った。思い出した。

絹旗は、ただ死から目を逸らしていた。事実を認めたく無かった。

（「死にたくないだなんて…」）

絹旗もまだ少女だ。もちろん、相手も同じような人間など巨万といた。

潰した暗部は数知れず。お互い生きる為に殺し、純粹にただ普通でありたかったと思った人間がどれほどいただろうか？

日常を求めて血に染まっていった彼女らは、あたりまえどんどんと日常から遠ざかり——風化し、手を伸ばさずとも在った“日常”は、いつしか過去へとなった。ありがたいこと

「とりあえず逝つとけ」

冷たく言葉が響く。

「——ゲームオーバーだ、くそアマ糞女」

絹旗は能力が無ければただの女の子だ。非力な少女だろうと容赦なく潰すのが、暗部の人間達。ひどくなしそれは彼女自身も理解している。自身の犯してきた罪を。だから冷めた目で客観的に己の事を省みて思う。

救いなんて無い。誰も救ってなんてくれない…と。

それでも、ただの非力な少女は願う。死にたくない——助けて。

……けれども彼女は気持ちとは裏腹にそれを受け入れようと、静かに目を瞑りその時を待っていた。

降り注ぐ雨が凶器へと変わり絹旗を討たんとする。

鼓膜を破らんばかりの音が爆はぜるが、絹旗は耳も塞がずに立つ。

……シン——

音が鳴り止んだ事を不思議に思い、恐る恐る瞼を開けていくと……

「虹…?」

何を見たのか理解する前に絹旗の体がふわっと浮かび上がった。

「へ?? あれ?!」

「女を虐めるなんて根性のない男だ。その腐りきった性根、叩き直してやる!」

ビシィッ! と指を突きつける勢いで言ったのは、白い学ランを着た熱い青年。

その青年に絹旗は抱き上げられていた。いわゆる、お姫様抱っこというやつで。

「なっ!? 超降ろしてください!」

「解った」

ズドオンッ!!!

「っ!? バカなんですかつ!?!?」

絹旗を“超降ろした”地面が陥没した。

「何を言っているんだ。超降ろせと言っただろうが」

「普通に超考えて、あんな速度で降ろしてくれるように頼む人間が何処にいるって言うんです!」

青年はじいゝつと絹旗を見つめていた。

「超違いますから! 頼みませんからっ!」

「おお、そうか。それは済まなかった。頑丈そうだったからな」
「その表現もどうかと思います。それだと、私が超ごつい体してるみたいじゃないですか」

雨が威力を伴って会話に割って入るが、青年は「うおっ」と言っ
て軽々とよけた。

「いつまで無視してくれるんだ？ ムカつくぞ teme 兄」

「お前、本当に根性ないな。お、そうだ。カルシウムを多く含んだ
ムサシノ牛乳を飲むといい。イライラしなくなるぞ？」

「ああん？ 舐めてんのか？」

「何で態々神経逆撫でしてんですかつ！ あなたが誰か知りません
が……」

「あれ？」と疑問符を浮かべる。相手は名乗っていないが、ほぼ
間違いなくレベル5。噂を聞いただけの初対面だが、噂通りの存在。
そしてその攻撃を防いだ不可解な青年。レベル4以下の能力者が
レベル5の攻撃を防ぐのは不可能に近い。よっぽど特殊な能力でな
い限り。

件の青年はレベル5の攻撃を凌いだ。

つまりは――

（「特殊な能力者か……同レベルの……」）

「だとすれば」と絹旗は青年へと視線をやり、ほくそ笑む。勝て
るかも知れない。そう思って……

「さつきからちょこまかと……。 teme 兄何もんだ？」

「名前を聞きたいのならば、まずは礼儀として自分から名乗るもん
なんだ。一つ賢くなったな。とりあえず、見本を見せてやるからよ

おく覚えろよ？」

天使のような男の眉間に深い皺がさらに刻まれる。
それを見た絹旗は頭を抱え込む。頭痛と心労で死んでしまうのではないかと場違いなことを考えてしまったが、次の一言に顔を上げる。

「俺は『ナンバーセブン』こと削板そぎいた軍霸ぐんはだ。よろしくな」

「そうか、テメエが『ナンバーセブン』か。第七位。

初めましてだよな？ 資料以外で会うのは。俺様が序列第二位『ダイクマター未元物質』の垣根帝督だ」

天使は翼を一度羽ばたかせて優雅にお辞儀して魅せた。

削板は右手を伸ばしてどちらもこれ以上先へ進ませぬ意思表示をする。

「お嬢ちゃん、危ないから下がってな」

「あのですね！ 私だって——」

「『アイテム』だ。か？ そのくらい知っている。逆に聞くが、お嬢ちゃんに何ができる？ 『原子崩し』ならまだしも、お嬢ちゃんは違うだろ？」

「っ！……」

「だが、その根性は認めてやる」等と言っていたが、絹旗には届かなかったようだ。

「はっ。『ナンバーセブン』の言う通りだな。せめて同じ舞台に上がって来い」

絹旗は齒が欠けるほど食い縛った。心が空虚になっていく。自分

だけの現実が揺らぐ。

（「私は、…私、は………」）

星空を仰ぎ、呟いた。

「…ちよう、情けないですね………」

理解するまでもない。彼女の戦場は此処では無かったというだけのこと。

（「…ホント………」）

さっき見せた威勢が嘘の様に引いていた。

第19話 電波 — network・(前書き)

人が増えて読み難いかもしれないです……

一部カット致しました。少しはマシかな？……

にしても、えらいことなってきた。『妹達』編。此処まで広がる予定は無かった。芳——なんて、よの字も無かった。

成田良悟さんバリの文章力が欲しい今日この頃。

やりたいこといっぱいや。

土砂降りの雨の中ひた走って、黙々と『御坂達』を助けていく。
『御坂達』を数人助けたところで滝壺 理后が沈黙を破った。

「はまづら」

「……………」

「戻って」

バックミラー越しに浜面と目を合わせ、揺るがない。

「何度も言っただろ。絹旗の気持ちをムダにするなって」

浜面もここに来るまでに説得して納得させたはずだったが、『御坂達』は助けて仲間である絹旗を助けられないことがやっぱり納得いかず、先ほど告げなかった事を伝えた。

「…きぬはたは勝てない」

「……………」

「あいつは第二位の『未元物質』」
「なっ！」

キーンッ！ とハンドル操作を誤り危うく横転するところだった。

「つぶねえ…。滝壺、さっきのって」

「事実。…………だから戻って、はまづら」

先にも増して真剣に懇願する。

浜面は一つ溜め息をついてから「…ちょっと待ってる」と言って携帯に文字を打ち込み始めた。

メール相手はスキルアウト時代の元仲間。伊賀だか何だかの末裔らしい。

「送信つと。後は……」

t r r r r r …… t r r r r r …… t r r r r r …… ガチャツ。
3回目のコールで電話が繋がった。

『珍しいな。こんな時間に何々じゃん？ また悪さでもしてるのか？』

悪戯坊主を嗜めるように軽い口取りで相手からの反応がくる。

「悪い！ 黄泉川、説明してる暇ないんだ！ とにかく力を貸してくれっ！」

『せめて簡単にくらい話すじゃんよ。でないと——「友達を助けたいんだ！ 頼む。お願いだから助けてくれ。…お願いします！」——最初っから言うじゃん、そういうこと』

断る理由なんてない。言外にそう言われた気がした。

「…恩に着る」

『ガキを大人が助けるのは当然じゃん。だから、恩を感じる必要ないんじゃない？』

顔は見えていないのに、イタズラっぽい笑みを浮かべているのがありありと目に浮かぶ。

「それでも、ありがとう」

『ははっ。まだお礼は早いじゃんよ。――で。何をすればいい？』

重ねて礼を言う浜面に返答していた華やかさから急転。要件を尋ねる。

「ああ。俺達は今、第七学区にある病院に向かつてる。カエル顔の医者がある病院だからすぐ解ると思うんだが……」
『解った。そこなら知ってる』

黄泉川の即答に、「話が早くて助かる」とすらすら先へ進めていく。

「じゃあ、そこで落ち合おう。それと『警備員』の力を使って、一人、研究者を連れて来てほしい」
『研究者？』

黄泉川の疑問符を浜面が払った。

「そうだ。芳川よしかわ 桔梗きぎょうっていう研究者だ」
『っ！ 芳川、桔梗……？』

浜面は電話越しに息を呑むのが聞こえた。

「どうしたんだ？ 黄泉川」
『確かか？』
「何がだ？」

浜面は、黄泉川に落ち着きがないように思えた。

（「動揺してる？」）

『あ、いや……。解った、連れて行こう』

「『御坂達』^{シスターズ}のことで話があると言えば呼び出せるはずだ」

『シスターズ……。 “それも” 友達を助けたいことに繋がるんだな？』

「そうだ」

『任せておくじゃん。浜面、後でな』

電話を切る前の黄泉川の声が、少し気が沈んでいるように聞こえた。

「よしっ！」

「いい人だね。…『警備員』ってことは、せんせえでしょ？」

「ああ。ホント、頭が上がりねーよ」

「……そう」

滝壺はさっき担ぎ込んだ『御坂』の手当てを終え、ゴトゴトとした揺れに身を任せて瞳を閉じ、雨音に意識をやった。

ザアーーッ……………。

（「私は何ができるかな……………」）

薄く目を開けて雨天を見上げた。

久しぶりにその番号を見ていた。

そう言えばここ数年会っていないな……なんて感慨に耽りつつ、無造作に相手呼び出す。

かなりのコール数の後、電話相手と繋がる。

『珍しいわね。こんな時間にどうしたのかしら？』

黄泉川は自身も同じ様なことを言ってたのを思い出して苦笑する。

「桔梗か？　ちょっと話したい事があるんだけど、出て来れるじゃん？」

『愛穂、悪いんだけど忙しいのよ。ごめんなさい。じゃ、——』

芳川は本当に疲れた声を出していた。黄泉川は悪いと思いながらも早速口に出す。

「シスターズの事で、“今”話がある」

黄泉川は変に緊張する。

たかが数秒間だったが、黄泉川にとって長い無言が続き、切られたのかと錯覚しそうだ。

『……………解ったわ。何処に向かえばいい？』

ようやっと言葉が返ってきたのは、良かったのか……。黄泉川自身でも判断がつかない。何とでもないように普通に返す。

「第七学区の病院だ」

『『冥土歸し』のどこ…そうね…』

だと言うのに、黄泉川にはこのやりとりが理解できず、声が揺れそうになる。

「できるだけ早く来れるか？」

自身の声を自分で聞いているのにどんな声を出しているのか理解できなかった。頭の中で激しいハレーションを起こしている気がする。現実との境界線が解らない……。

『15分…いえ、10分で行くわ』

自分は夢でも見ているのか？ 聞き慣れ親しんだ友人の声が遙か遠くに聞こえた。

今、学園都市で何が起きているのか……。ついこの間の事を思い出して顔を歪める。

その為に返事が遅れて、何とか絞り出すように――

「…ああ……」

とだけ言つて、電話を切った後も、ツ―…ツ―……と途切れず鳴る電子音を暫く聞き続けた。

ぺんぺん草さん、感想ありがとうございます。

やっぱり読みづらいとの指摘がございましたので、2つに分けてみました。

よろしくお願いします。

こうした方が色々な意見や感想等待ってます。

『つてワケ。お願いできる?』

「もちろん! ちょうど沈利さんのところ向かってたところだったし。とにかく、準備が整うってことと、20分後には作動させるってことを火織さんに伝えればいいんだよね」

『そうだよ佐天。頼むね。結局私もこっちでやることあるワケよ。』

あ、それと——』

「任せなさい!」

佐天は携帯片手にガッツポーズ。

『色々渡してあるでしょ? 結局危ない時は迷い無くそれ使って逃げなよ?』

「うん……。ホントに危なくなったらね」

『じゃ、後で』

「うん、後でね」

通話を終えた後、「私も負けてらんないワケよ」と言ってフレンドは気合いを入れ直していた。

佐天も「…急がなきゃ」と、神裂のところへ、さらに速度を上げて駆け出した。

キイイン!……

振り下ろした刀が甲高い音を奏でる。すぐさま、大きく飛び退いた。

相手が凄まじい速さで戦闘術を吸収しており、神裂も知らず悪態

をつく。

「くっ……厄介ですね……。先ほどより氷の強度が上がっています」

神裂が汎面じゅうめんを作って、動向を伺う。

その神裂と敵を視界に収めながら麦野が解を出す。

「さっきまでは余計な分子の混じったものだったんでしょけど、戦っているうちに精度が上昇して混じり気の無いものになったってところかしら」

不純物の混じらない氷の強度は鋼鉄を遙かに凌ぐ硬度に変化する。

「ならば麦野が氷の壁を崩してください。それがベストでしょうか」

「っはあっ…ハアッ…、そこをつ神裂、アンタが叩くのね」

息も切れ切れに返答する。

麦野は動き回った為に血行が良くなり、応急処置をしていた右腕から血が滴っていた。

だが、新たに流れる血は気にするまでもなく“超低温の世界”に即座に固まり始める。

神裂も吐く息を白くさせながら麦野を気遣う。

「私でさえキツいというのに、血を流しているあなたには酷でしょう」

視界を遮る雨のせいで体力を奪われる。ただの雨とは違って、命を根こそぎ持って行ってしまう凶器の雨。一定範囲内に入った雨は凍りつき、鉛の雨となって肉体を穿とうとする。

神裂も麦野も力を使って防いでいた。神裂にはまだ余裕を見てとれたが、麦野は時たま使っていた右腕が完全に持ち上がらなくなり、息も絶え絶えに戦闘中だ。

さらに体力を奪っていくのが――、瞬きをして瞳の水分が睫毛まつげに附着して凍り、発汗した汗すらもその瞬間に霜となる極寒世界の空間。ある種の結界のようなもの。

「はっ！ こんなのだうとも無いわ」

麦野から虚勢を見てとれるが、獰猛どうもうな笑みは揺るがない。

（「そうは言うものの、やはり限界は近いか……」）

神裂が目を閉じ、飛び出そうとしたところで……燕の形をしたぬいぐるみが3体、弧を描いて巧へと殺到する。2体は凌いでいたが、残りの1体に弾き飛ばされていた。

何があつたのか確認しようと振り返ったところで、場違いにも笑顔で手を振る佐天と目が合った。

「「涙子!?!」」

「大丈夫でした?」

「涙子! あなたはまた!——」

声を上げようとしていた神裂を喰うように告げる。

「フレンドからの報告です。20分後には作動させるみたいですので火織さん、後はお願いします」

「20分……ですか……」

t r r r r r……。 「厳しそうですね」 と呟く前にコール音に入り込まれた。

「ん? もしもし、浜面?」

第七学区の病院にいち早く着いたのは以外にも芳川 桔梗。

カエル顔の医者こと『冥土帰し』と挨拶を交わしていたところに、浜面達が合流した。

「先生、アイツらは助かるか?……」

浜面の問いに『冥土帰し』は逡巡すらせずに答える。

「もちろんだ。僕が診るんだよ？ 助けてみせるさ」

その回答に思わず笑みを浮かべ、浜面と滝壺は視線を交わして笑い合う。

「相変わらずですね」

「君もだよ。子供達の為に奔走するのかい？」

「悪い、遅れたじゃん！」

芳川は友の姿を見て笑みを零し、浜面に滝壺、そして搬送されて行く『妹達』を見やる。

瞼を閉じて、一つ深呼吸。

「……そうね。今さらだけど、頑張ってみようかしら」

「ん？ 何だかよく解んないけど、遅過ぎることは無いじゃんよ。要は、それに対する気持ち。思いが大切なんじゃない？」

「そう……、そうね。ありがとう、愛穂」

「お礼言われることでも無いじゃん。ダチつてのはそういうもんだ。だろ？ 桔梗」

「ホント、いい先生ね」

「俺もそう思う」

「…私も」

僅かに赤く染まった頬を掻きながら、話を進める。

「ま、まあ、悪い気はしないじゃんけど…とりあえず、浜面——」

黄泉川から促されて、浜面は簡単な事情説明をした。

「で、だ。アタシらに何をさせたいんじゃない？」

「まずは『御坂達』のことに関わっている芳川桔梗で間違いないよな？」

「ええ、そうよ」

首を縦に振るのを確認してから続ける。

「シスターズの力を借りたいんだが、どうすればいい？」

芳川は「そうね」と言つて顎に手を当てて答えた。

「力を貸すとなれば、『ラストオーダー最終信号』を動かさないとね……」

「ラスト……？」

「何でも無いわ」とひらひらと手を振りながら、軌道修正。

「あなたの話だと『一方通行』に『末元物質』、『水支配者』^{ヒュドラー}までいるんでしょう？ 『妹達』が役に立つとは思えないんだけど」

「ヒュドラー？」

「たくみって名前の水流系統能力者」

「その話、本当じゃん!？」

黄泉川が思わず身を乗り出す。

「何を——」たくみって名前の能力者っていうの——ええ、本当よ」

それを聞いて齒を軋らせる。

(「それが本当なら……、あの事件が今もまだ続いているってことじゃん……」)

突如、声が響いた。

「あああ！ 黄泉川っ」

通りすがりの看護師に睨まれて男は声を萎めたが、乗り出した身体は戻さなかった。

黄泉川はそれに乗っかり、暗くなった自身の雰囲気を払拭するかのように明るく声を上げる。

「おつ。悪ガキが増えたじゃん」

叫んだ男を抑えて、浜面は要件を確認する。

「半蔵。持って来たか？」

「ああ。軍用の発条包帯と演算銃器だ」
ハードテーピング スマートウェポン

発条包帯とは、超音波伸縮性の軍用特殊テーピング。駆動鎧の運動性能部分を抜きとって独立化させたようなもの。

驚異的な身体能力を引き出す。だがしかし、使用者の身体を無視した欠陥品であるため、身体に多大な負担をかける。

演算銃器は……赤外線を使って、標的の材質・厚さ・強度・距離を正確に計測、破壊に最も適した火薬を調合し、合成樹脂を瞬間的

に固めて弾頭を造る。鋼鉄の板を打ち抜けたり、豆腐の中に弾丸を残したりと色々な芸当ができる。

「駒場の旦那も来てんのか？」

「いや、旦那は別でやることあるってさ。おまえなら大丈夫だろうって言ってたぞ？」

駒場こまばというのは、浜面の所属する第七学区を縄張りとする無能力者で構成された武装集団『スキルアウト』のリーダーの少年だ。

「何を根拠にそんなこと言うんだ……」

「さあな。けど解らんでもないと言ったところか」

半蔵が片方の目だけを開けて不満を漏らす。

「っていうかおまえさ、何時から『アイテム』の下っ端になったんだ？」

「いやいやいや。小遣い稼ぎに雇ってもらったんだよ。スキルアウトの方にも顔出してんだろ？」

「付き合い悪くなったけどな」

浜面は半眼で告げられる。

「そー言うなって。……半蔵、後は戻って構わねえぞ」

「悪いな。今回はそうさせてもらう」

「ああ」と浜面は手を上げて別れの挨拶。

「郭くわくにも手伝ってもらって、情報だけでも集めておく」

郭とは半蔵に仕えているくノ一（本人談）。情報収集能力は、半蔵と共に学園都市内でも群を抜いている存在だ。

それを理解して尚且つ信頼しているからこそ、真剣な眼差しで、

「頼む、現代の忍者」

頼んだ？

「一言余計なんだよ、バカ」

そう言って浜面の頭を小突いた後、半蔵は足音も発てずに走り去って行った。

浜面はそれを見送って、登録されたばかりの人物に電話をかける。
「もしもし、佐天」

「ん？　もしもし、浜面？」

「ああ。今の状況はどうなってる？」

「今？　フレンダの準備が整って20分後に仕掛けを作動させるってことを沈利さん達に伝えたところ。で、遠目なだけだね、フレンダ達の状況は苦戦中。たぶんヤバそうな感じ。けどフレンダの仕掛け次第なんだって。火織さんが。」

「んで、沈利さん達は苦戦中でし——きゃっ！？」

「どうした！」

叫んだ佐天に浜面は肝を冷やした。

「氷柱の雨が降ってきた。大量に」

返ってきた答えに先程にも増して冷え込んだ。

「まだ苦戦中じゃねーか」

戯けて言っただものの、焦燥は募る。

（「麦野は腕をやられてたから、長期戦は厳しいか……」）

「——助っ人をそっちにやるから10分耐えろ」

「うん、解った。よろしくね」

「任せろ」と言っただけで通話を終えた。

「芳川、『御坂達』何だが——」

改めて向き直り、浜面が話始めたところで——

「お話中失礼します。とミサカは頭を下げます」

「おまえ、休んどけって！」

手術の順番待ちしている『妹達』の一人が首だけを横に向けて話しかけてきた。

「ミサカは骨折程度なので、手術は後回しになります」

浜面は少し渋りそうになったが、視線だけでミサカに話を続けるよう促す。

こくり。と頷きミサカは再度唇を開く。

「では。先ず、上位個体に頼まなくともミサカ達はネットワークを

通じて意志疎通ができます。したがって、上位個体の場所まで行くのは時間のロス以外の何物でもありません。とミサ力は教えて差し上げます」

されど、浜面は首を捻る。

「えつとつまりは……何だ？」

「ここまで言っても解らないんですね。と理解力の低さに頭痛がしますが、誰にでも解り易く言いますと、ミサ力が他のミサ力にこの事を伝えれば済む事ですよ。とミサ力は自身が心労で倒れないか心配ながらも伝えます」

「そこまで言われなきゃダメかつ！？　つーか、両腕と片足を骨折して寝転がってるその状態のが心配だわ！」

「はまづら、怪我人に向かって叫ぶのは酷い。非道……？」

「虐め力ツコ悪い。ってヤツね」

「浜面。そりゃ、無いんじゃない？」

滝壺に引き続き、芳川、黄泉川と。言葉が重ねられていく。

「アウェイ過ぎんだろ……」ばそりと呟く浜面を余所に女性陣の結束は高まり動いていく。

「貴女、……えつと……」

芳川が呼び掛けようとして、考えているところに本人から伝えられる。

「識別検体番号10050号です。と芳川博士に告げます」

「博士は止めて。他のにして頂戴」

苦笑いを浮かべて言う芳川に仕方ないです……。というような表情を垣間見せてすぐにまた無表情に戻るミサ力。

「では、先生とお呼び致しますとミサ力は修正しました」

僅かな沈黙の後、芳川は微笑を携える。

気持ちを切り替えた芳川が端を発する。

「じゃ、反撃開始と行きましょうか。愛穂」

「そつだな、桔梗。高々Level5の悪ガキ共だ。先生舐めんなってことじゃんよ」

「ミサカネットワークを通じて、情報伝達完了致しました。既に負傷者の救助と戦場への援軍と化しています。とミサカは誇らし気に胸を反らし――あゝうっ……」

「重傷患者が何やってんだよ……」

「仕方ないよ、はまづら。私もきつとやっちゃっし」

「…………やるなよ……」

「ははっ。変に堅くなるよりかマシじゃんよ」

黄泉川が表情を引き締める。

「…桔梗。これが終わってから話したい」

「解ったわ」

芳川の返事を聞いてから、黄泉川はみんなを見回し「さて」と冠を置いて、反撃の戦詞^{のりと}を詞^{うた}う。

「――ガキ共、出陣じゃん」

黄泉川を筆頭に各自行動を開始した。

第21話 暴走 | d a r k m a t t e r . . . a n g e l ? (前書き)

削板、絹旗、そして垣根。

ピンチを逆転して……さらにピンチに？

「オーロラガードオっ!!!」

虹の輝きが豪雨を弾く。その背中に隠されるのは、一回りは小さな少女。

呆れるように垣根は言う。

「いい加減、そのガキを捨てりゃいいだろうが」

絹旗は足を垣根の翼で射ぬかれて動けなくなっていた。絹旗自身、すぐにでもその身に破滅が訪れるものだと思っていた。

しかし、その場にはそのような事を許さない燃えたぎる存在がいた。

「そんな根性の腐ったような真似ができるか!!」

『ナンバーセブン』 削板軍覇。

第七位という位置にありながらも、第二位と渡りあえる男。――

だが、その身体中からは生命の雫が大量に滴っていた。

削板は力強く叫んでいたが、足下が振らつき始めている。

それを見た絹旗が下唇を血の出るほど噛み、俯き加減で言葉を発しようとしたところで頭にぽんっと手を置かれる。

「そんな顔すんな、嬢ちゃん。嬢ちゃんが気にすることじゃない」

話しかけた後、削板は絹旗を抱き抱え、素早く垣根と距離を取って土煙に紛れて身を隠す。

「なあ嬢ちゃん。一度でいい、力を貸してくれないか？」

絹旗は勢いよく面を^{おもて}上げる。

その反応に削板は、「ふっ」と優しく微笑んでから、何処までも真っ直ぐに絹旗の目を見続けた。

「嬢ちゃんの協力が必要なんだ」

「私は……」

絹旗の言葉を遮ってブロロロ…とエンジン音が割り込む。

車から降りて来たのは、特殊武装した4人の『妹達』。その先頭を走るのは、

「浜面？」

「なーに辛気臭い顔してんだ？　一時雇用の俺の方がよっぽど働いてるぞ？」

「超うつさいですから。それにアンタが来たところでどうにもなりませんよ。相手は」

「第二位、か？　そんなの知ってるよ」

「なぜか絹旗はキツと浜面を睨み付けた。だけど浜面は気にすることなく続ける。」

「俺だつておまえを逃がすくらいはできる。…けど、まずは一矢報いてから……だろ？」

「ある程度やったら、とつとと逃げるからな」なんて弱気なぼやきを吐きながらミサカと共に削板と絹旗の傷の手当てを行う。手当てが終わると、すぐさま削板が雄叫びをあげた。

「ふっかあああつ……！」

「するか！　どー見ても重傷だからアンタ」

「こんなもの唾でもつけてりゃ治る」

「治らねえから！」

削板は「治れ！」と力いっぱい拳を作ったが、浜面が「治るか！　落ち着けアンタ」と嗜めたものの、「後は、やはり根性しかないか……」という呟きを耳にして浜面はそういうヤツなんだと諦めた。

「超楽しそうですね」

「楽しかねえよ、疲れるから。なんだったら代わってやるよ」

浜面が親指で削板を指して促したが、半眼になって「超結構です」と絹旗は、げんなりとした声で返した。

「ん？」

座り込んでいた絹旗に影が差す。

絹旗が顔を上げると、「嬢ちゃん」と削板が手を伸ばして絹旗を待っていた。

パシッ！

絹旗は力強く握手を交わしていた。先ほどまでの事が何だったのかと思えるほど、それは露と消えてしまった。

削板も絹旗もどちら共なく、「ふっ」と笑みが零れた。

「ヤラレっぱなしっていうのは性に超合わないみたいですから」

「絹旗の嬢ちゃん、なかなか根性あるな」

ザツと砂利を踏み締める音が絹旗達の元へ届く。

「いきましよう、皆さん。と、ミサカが指揮つてみます」

「ええ、超生きましよう」

「絹旗の言う通りだ。こんなところでくたばれっか」

「うげっ、よく解りましたね。超気持ち悪いです」

「そこまで言われなきゃなんのか？ まあいい。ミサカ一人が絹

旗につけ、残りのミサカは俺について来い」

「浜面合わせても4人なんですけど、ちょく大丈夫なんですか？」

「大丈夫さ、5人いるしな」

「は？」と音を漏らしたが、絹旗の声を気に止めることもなく浜面は視線を合わせて合図を送る。「行くぞ」と。

浜面の指示に皆が頷き、同時に動き出した。

まず動いたのは“垣根帝督”。

「かくれんぼは終いか？」

声と轟音が届いたのは僅かの誤差もなかった。

その刹那で起こったのは垣根が翼でコンテナを叩き潰して2、30センチまで圧縮し、さらに猛烈な風をぶつけて潜んでいた建物ごと吹き飛ばさんとした。

絹旗は隣に立つミサカが微弱な電磁波を使って足を固定してくれたこともあつて難を逃れる。

浜面は3人のミサカによる電磁力と発条包帯によって早々に移動していた為追い風となった。

その場に残ったのは削板、絹旗、絹旗を援護するミサカ（演算銃器2丁のうちの1丁装備）と浜面共に近くへと身を隠したミサカ達の4名。

「そうですね、かくれんぼはお終いです」

さつきまで力の失せていた絹旗の瞳に眩しいまでの輝きが見えた。そして、開戦宣告。

「鬼が交代して今度は私達が鬼で、アナタを狩る超鬼ごっこ——始まりです！」

絹旗が話している間に隣のミサカが電磁力の道筋を作り上げ、浜面の近くのミサカが絹旗の側にあるコンテナに電磁力を纏わせており、話終えた時には道筋に沿ってコンテナを放った。

「っ！？」

垣根が息を吞んでしまったのも無理もない。

持つて放ったところまでは視認できたが、手から離れた瞬間に消えて無くなり、コンマとはいえ透きを見せた。垣根がすぐに表情を歪めたのは、痛み故か？ その刹那に衝撃が土砂降りの雨音を上書きする音の波がこちらにまで凄まじい破壊力と傷みを伝えた。

攻撃した絹旗本人ですら呆然としてしまったほどだ。

絹旗とミサカ達による攻撃は疑似超電磁砲と言って差し支えないだろう。ミサカ達が射ったのは直線運動（linear motion）を利用したもので御坂美琴の妹が使ったのならニアレールガンと言えるかもしれないが、彼女達が使用したのは軌道上に並べられた界磁（電磁力）によって吸引力と反発力で推進させて放つ電磁投射砲。所謂、ガウス砲キャノンと呼ばれる物だ。威力のほどは本家『超電磁砲』に勝とも劣らない。何よりも弾丸を発射するために大量の電流を演算入力する必要のある『超電磁砲』とは違い、必要最小限の動作においてはそれほど多くの電流は必要としない為に能力的にはLevel 2、3の『欠陥電気』と呼ばれる『妹達』でも使用可能な技。

しかし、『超電磁砲』は光速が上限で実質的には入力する電力を

賄える演算能力の持ち主であるLevel 5の御坂美琴は弾速に制限は無いが、ガウスキャノンは比較にならないほど電氣的な抵抗の大きい電気回路に電流を流す必要性から、所定以上の電流を演算しにくい。弾丸の最大初速に決定的な制限が付くという問題を持つ。その恐ろしいまでの威力を目の当たりにしても油断することなく、さらなる追い討ちをかけるのは『ナンバーセブン』削板軍覇。コンテナの中身の小麦粉が辺りに撒かれ、その粉塵に向かって攻撃をした。気の抜けるようなセリフで。

「すごいパーンチっ！」

「ごうつと着火、爆発。」「さらに！」と言って繰り出されたのは理屈を根性という名の屁理屈で現実を捻曲げる超常現象。

「超すごいガードオオツ……！」

吹きすさぶ爆風も燃え盛る炎も、土煙や目に見えない塵や埃さえも通さない完全無欠の防御。

「もはや、バリアーと超言ってもいいと思うんですが……」

「言ってくれるな絹旗。今猛烈に現実を直視しないようにしてんだから」

「……………理解できません。超能力者とはみんなこのように異常なのでしょうか？ お姉様との接し方も考え直さなければなりません。と、ミサカは真剣に悩みます」

そうやって言い合いながらも影から目を離さずに、皆じつと見つめていた。

立ち込めていた煙が晴れて姿を現した垣根は、頭部から血を流し、左腕の肘からは細い骨が突き出したらんと垂れている。

ダメージを与えたことに口角を上げた絹旗だったが、それに気がつき固まった。

致命傷と言っていていいほどの怪我をしているのだから呼吸が荒くなっているもおかしくないのだが、すうーっと、静かに垣根は呼吸をしていた。髪が乱れ目を隠し、汗と血で髪の毛が顔に張り付き瞳はほとんど見えなかったが、不思議とはつきり見えたのは、頭部か

ら流れ落ちた血液が見開かれた右目の下瞼に溜まり、目尻から零れる様は紅い涙を流しているようにも見える。さらに何処を見ているのか、何処も見えていないのか……焦点の定まらない瞳孔が開いた様な視線は、より不気味さを際立たせていた。

感情の乏しいミサ力でさえも、ぞわぞわっと肌が粟立つ。

「ぐっ!？」

唐突に声が上がった。

そちらへ目をやると、先ほどより距離の開いたところに脇腹へと手をやり呼吸を整えている浜面が目に入る。

「浜面!？」

「なるべく足を止めるな！ キレてんぞ、そいつ!」

「なっ!…」

その意味することを理解した絹旗は齒軋りをして、強めに呟いていた。

「……滝壺さんとは訳が違うんですよ!？」

滝壺のように能力を暴走させて生きている例の方が珍しい。本来ならば、能力を暴走させた能力者の末路は死。元々使用可能な力以上の力を暴走という行為によって無理矢理引き出している為、必要以上の演算により脳の血管は破裂して出血。最悪は死に至る。生きていたとしても何らかの障害が起こる可能性は高い。だが、高確率での死亡の原因は、何よりも暴走して発現した能力に吞まれてのが主な要因のようだ。

だから絹旗は恐れる。自身でさえ制御のできない超大な能力。それはLevelが高ければ高いほど威力や範囲も広まり、発現者以外も呑み込む。何より恐ろしいのは、暴走した能力者がLevel 5で学園都市の第二位という化け物が暴走したということ。

「はつきり言って自分達は超死にますよ、この状況は」

誰ともなく言った絹旗の言葉に間髪入れず削板は返した。

「大丈夫だ、嬢ちゃん。俺がなんとかするから、嬢ちゃん達は俺のことは気にせず全力を出せ。解ったか？」

「この人は……」と思ったが口には出さずに絹旗は両の目頭を指の腹で揉み解して息を吐いてから、気負いなく返事する。

「さっきのを撃ったあとの防御は厳しそうなので使えませんが、こちだつて超なんとかしてみせますからお気遣いなく」

頷いた削板を見て浜面は、

「ミサカ達に作戦は伝えてあるから、時間を稼げば必ず勝てる」

震える拳を抑えながらも、ほぼ確信を持って告げる。

「本当なんでしょうね？ 超浜面」

「ああ、Level 5 以外もこっちにはいんだ。何より、俺はただ死にたくないしな」

「同感です」「同意します」

絹旗とミサカが顔見合せてから頷き、お互いの拳を打ち合わせた。

「超勝ちますよ？」

「妹舐めんな！ とミサカは一応口にしま——来ます！」

「……っ！……」

翼が各々の近くを掠めたが攻撃が止むことなく、垣根の言葉になつていない咆哮が轟いた。

「おおああああ」つぐん2ナvfbア/gツ！??！」

広げられた翼が透き通る様な白い煌めきを放ち薄く発光していた。そして頭上には、先ほどまでは無かった半分にした輪っかのようなものが浮いて同じく輝いている。

「天使……？ そのようなものが、この世界にはいたのですね。と、

ミサカは……」

思わず見惚れていたミサカに狂気が迫っていた。

「おい！」

咄嗟にミサカに向かって飛び、突飛ばしたけれども、浜面の左の太股を拳大の太さを持った雨が貫き霧散していた。

「こんなヤツを相手に…しなきゃなんないのか？ 不幸だな、ホントに」

そうぼやきながら、垣根の周りでパチパチと小さく弾ける青白い光の華を見続けていた。

垣根の呼吸も僅かしか変わらず、静かに小さいまま。けれど付け加えるならば、深呼吸をし続けているようにも見える。

そう……、既に垣根帝督の攻略は始まっていた。

第22話 根性!!! — no·7th·+α·(前書き)

ちよい短いかな？ 今回は
では、どうぞ。

理性の箍^{たが}が外れた垣根は気づくはずはなく、全力を出し続けた。

吹き荒れる。

風、炎、雨、月光……嵐と言うには異常過ぎる。

そしてそれを拳や脚で払い落としていく削板。

（「アイツが来てから嬢ちゃんの目に力が戻って来た。虚勢でも構わねえ、何度も立ち上がるとは大した根性だ」）

笑みが深くなる。

能力はあるが目に力のないヤツか、それとも能力はないが目に力のあるヤツか……。と、どっちが勝つか考えるまでもなく、削板は迷い無く目に力のある根性の持ち主が勝つんだと思った。

例え、絹旗も浜面も削板自身もぼろぼろになってしまっているこの状況であつたとしても揺るがなかった。

「超死んでくださいっ!!!」

コンテナを放つ絹旗の向かい側からは演算銃器を打ち込むミサカ。

コンテナは雨水に穿たれて落とされ、無防備な背中に演算銃器の弾丸が当たったはずだったが、翼によつて妨げられる。

先ほどから翼に様々な反応が見られた。

適切な演算が施されて垣根に向かった弾丸は、難なく弾かれたものの、翼の一部と共に消滅したもの、翼を貫いたはずの弾丸が瞬間移動したかの様に空から大地へと向かったもの、翼に吞まれたもの、翼と同化したもの、翼に当たるはずだった弾丸が触れるに留まったものなど色々。

「何々だアイツは？ 変なヤツだな」

「あんたが言う…なっ!？」

垣根の後ろに気流でも発生しているのか、あらゆるものを吹き飛ばし浜面の方へと翔んで来る。

至近まで迫ろうといったところで垣根は横に飛ばされた。理解できたのは削板くらいだろうか？

そして、蠢いているところへもう一発。

垣根の倒れていたところを起点に、小さいながらもクレーターができる。

今度は他のみんなにも聞こえたズドン！ という丹田に響く重い砲声。

浜面は「ふう…」と息をついて種明かし。

「言つたろ、5人いるって」

「そういうことですか。超浜面のクセに中々にやりますね」

すくつと立ち上がる垣根を見据えながら、“効果はある”と望みが生まれる。

「倒せはしないが衝撃を完全に消せる訳でもないみたいだしな」

「いったい何を超すれば、『未元物質^{アレ}』を吹き飛ばせるっていうんですか？」

「対物ライフル。いや、対戦車ライフルって言った方が解るか？」

「だからと言って威力が——あ」

絹旗は口を開けて間抜けな姿を曝す。…そう、今自分達がいる場所を思い出したのだ。

「学園都市製。しかも最新型のすげーヤツ。元にしたのは九七式自動砲で、重量や装弾数どころか発射速度や銃口初速、有効射程距離までもが上がってる」

言いながら演算銃器を相手とその近くの地面へとぶつ放す。当然の如く翼に阻まれてしまうが、透きは生み出せる。

そして、色とりどりの拳撃（拳圧？）が打ち込まれて垣根を転がす。

「つとぉ！ やるな」

転がりながらも翼が、雨が、月光が垣根から返される。

削板に放たれた余波をなんとか躲しつつも、視線は外さずに携帯していたボンベの様な物を取り出して絹旗は必要以上の窒素を補充した。

未だ弾けている火花を見て思考する。

（「恐らく……。それでも十中八九間違いないでしょうね。その確認の為に超ぶちます」）

右足を踏み出しながら体勢を低くし、踏み込んで蹴り出した瞬間に足裏から窒素を勢い良く噴出して加速する。絹旗的な言い方をするならば、超ダツシユ。

それこそ、一足飛びという言葉が相応しいほどに一瞬で彼我の距離を詰め、拳の間合いよりも開いた距離で絹旗は腕を引いた。

「ハアアアッ！！！！！」

小柄な少女の雄叫びに全員が反応する。

「落ちてください」

「こんつ、のおっ！」

ミサカと浜面の演算銃器×2とショットガン＋ハンドガンが交互に火を噴き、音が途切れない。垣根を守る盾である翼は、対物ライフルによる狙撃で削られ守りが崩されていく。

ふわつと風が吹いたかと思った時には、雨は止みそうになっていた。

視界も晴れた絹旗は垣根の顔周りを確認し、己が作り上げた見えない塊に集中する。

（「この距離でさえ超呼吸がし辛いんです。だとすれば、狙うは肺超——」）

「——ぶつつ飛べええつ！！！」

見えない何かが風を切ることもなく軽々と威圧感を持って振り抜かれた。

重い衝撃音と割りばしを折った時の様な軽い音が、飛ばされる垣根を追いかけた。

そして“その”音を超えて、空中にいる垣根の鳩尾をやや角度をつけた削板の拳が捕え、さらに……

「超——」

音の壁を超えて放たれた拳に加えて、AIM拡散力場に異常を来して大気を振動させるほどの力を集約して解放する。

「すごいパアアアンチ——！」

直角を描くように真下へと垣根が叩き落とされた直後に爆発。息する暇も与えない。

「イ／w6るkヴ… gIっ!?!?」

事実、酸欠によって意識を失った垣根の翼と半輪つかも消え失せた。

『未元物質』が幾ら化け物じみていると言ったところで、垣根帝督は他と何ら変わる事のない人類なのである。

隠れて酸素を奪い続けていた二人のミサカに加えて能力の異常使用と疲労、それに止めをさしたのが、ど根性コンビ(?)の肺周辺への狙い打ち。

即席とはいえ抜群のコンビネーションを見せた。二人がセリフ回しさえ似ていたのは息の合う証拠なのだろうか？

削板と絹旗は互いに顔を見て握り拳を突き合わせ、ニヤリと口角を上げた。

第23話 姉妹 | my family .

学生である彼女が夜分に書類整理をしているところへ、t r r r
r……。

コールが薄暗い部屋に鳴り響く。

この時間この場所にいることは誰も知らず、学生などは寮にいる
はずであり、要請することもほぼ有り得ない。

…が、もしもという事もある為、普段通りの対応をとる。
ずれた眼鏡を直して受話器を手についた。

「はい、こちら——…何の用かしら？」

返ってきたのは当初の予想していた相手。少し嫌^{けん}が乗る。

「後輩達に危害を加えているってだけでも気分が悪いのに」

相手からの相も変わらずな反応に眼鏡をずらして、目頭を揉んだ。
「…ええ。けど私が何も言わなければ、あの子に人員を態々裂かな
かったんじゃない？ それともあの子にも興味が湧いたの？」

声を低く尋ねる。

「何より、あそこまで無謀な子じゃなかったわ。」

——えっ！？ 十徳ナイフを使ったの！？ あの子の人間性が出
ているってというのがよく解る、精神感应系最狂の能力者じゃない！
信用なんて」

相手は宥めるかの様に話した。

「そう……、あなたが直々に……。役職なんて関係ないわ。ここには
そういう人間は巨万といえるでしょ？」

相手からきた質問に今度は「いいえ」と彼女は首を振る。

「白井さんは帰したわ、寮監さんに頼んで。ええ、常盤台の“アノ
”寮監さんよ」

相手は軽い相槌を打ち、目的が話される。

「私も出るの？ 助っ人を呼んだって聞いてたんだけど……ふう…

…っ！」

息をついたところで目を見開いた。相手もそれに合わせて話を進めていく。

「ええ、嫌なのが見えたから。で、佐天さんにつけたのは、あの二人なんでしょう？　——そう、解ったわ」

「最後に一つ」と、表情の見えない声で彼女は尋ねた。

「もうあの時から、佐天さんもこの実験に参加させるつもりだったの？」

欠陥電気計画の時の様に、並行させて行なわれているもう一つの実験もそうなるように仕向けた。そういうこと？

化科……だったわよね？　確か。好奇心を刺激するような情報を与えて、自分でやりたいことをやっているかの如く踊らせている…。それらも含めてプラン通りなんでしょうね」

相手からは、やはり大した回答は来なかった。

そのまま、迎えを寄越すように声を上げようとしたところで扉がノックされた。

おそらく既に迎えはやっていただろうと当たりをつけ、用は済んだと、扉の外に向かって声をかけつつ受話器を下ろした。

「開いてるわよ、どうぞ」

入り口を開けて入って来たのは、髪型はお下げ髪のように耳より低い位置で左右に結った髪を自分の背中の方へと流していて、冬服のミニスカートの金属製のベルトを付け、桃色のサラシで胸を隠しただけの上半身にブレザーを引っかけている少女だった。

「はあ……。実験場所まで運ぶわ」

再度ため息をついて、「全く。私はタクシーじゃないんだけどね」とぶつくさ文句を言いながらもきちんと仕事を熟す。

会話を続けつつも準備を整えて、迎えに来た案内人に視線を送って完了を示す。

「あんたも大変ね。アレイスターにいいように使われて」

「ま、他人のことは言えないんだけど」と自分自身に呆れたと案

内人は吐き出した。

「私は逆にプランを妨害し兼ねないって警戒されているけどね」

「それはちよつと……同情するわね」

案内人は渴いた笑いを漏らした。

「自分を跳ばすのは苦手だから捕まってもらえる？ その方が強く意識を保てるから」

くすつ。と笑ってから彼女は案内人の手を握る。

「大丈夫よ。きっとあなたは自分を跳ばすのも容易にできるようになるわ」

「それも、あんたの能力？」

「女の勘よ」

冗談とも本気ともつかない言い種に案内人は眉をハの字に描く。

「……………」

そんな案内人に対して彼女はウィンクしたのだが、薄暗い部屋でライダースーツにフルフェイスヘルメットを被った人物が影を濃く立っているのだ、言葉を無くしても仕方がない。

気を取り直して案内人が気になった事を尋ねた。

「重装備過ぎない？ そこまでして隠して。見え辛いでしょ」

彼女は、何の気負いもなくあつさりと答えた。

「見えるわよ。戦闘になれば尚更に、ね」

彼女の揺れる瞳に案内人が気づく訳もなく、「行くわ」と言っただけで彼女の返答を待つ事もせず、すぐに二人のその姿はかき消えた。

部屋は静寂を取り戻し、パソコンモニターの淡い光とモーター音だけがあった。

いくら御坂が電撃を流し、砂鉄の剣で斬ろうとも全く効果が見られない。

「ンだよ。『妹達』の方がよっぽど苦勞させられたぜ？」

焦っているのか、上手く思考がまとまらない御坂。

「くくつ——」

「何がおかしいのよ!—」

(「俺も後戻りなんてしねえよ。…俺は、ことわりルール理も真も全てを支配する……」)

「——くかきけこかきくけききこかきくこくけけけきくこくけけこかきくかきくかきくかきくかきくこくけきくくきくきかきこかきくけくきくきかきくこきかか——ッ!—!」

『一方通行』の発する理解できない言葉の羅列に疑問符を浮かべる間もなく、戦慄に彩られていく。

暴風が吹き荒れる中、御坂が目にしたのは直径20mを裕に超える巨大な眩い白光^{ましろ}。

高電離^{プラズマ}気体。

空気は圧縮されることで熱を持つ。あまりの圧縮率で凝縮された街中の空気は、摂氏10000度を超越した高熱の塊と化し、100m以上の上空にあるというのに御坂の肌をじりじりと焼く。

「何よ…コレ——」

「ハッハアアッ! 圧縮、圧縮圧縮圧縮圧縮ウウツ!—」

(「風を一点に凝縮して高電離気体を生み出したっていうの!?!」)
超電磁砲の届く距離ではないし、届いたところで消し飛ばせない。そう…。何もできないのだ。

(「何が超能力者よ! 常盤台のエース? 230万頂点にいる7人の内の一人?」)

白い光を見てから、上条、ステイル、フレンド、ミサカ。と順に視線を移していき、最後に自分の掌へ目を落とす。

(「…力が…欲しい……。みんなを救えるだけの力が」)

——『ねえ黒子……』

『何でしょう、お姉様？』

『もし……』

『もし私が学園都市に災難をもたらすような事をしたら……どうする？』

白井がぼかんとした顔を見せて、暫しの間を空けてから聞き返した。

『故障自販機からジュースを失敬している事ですの？ アレはやめられた方が……』

『アレは新生の時に私の万札を呑んだ自販機だからいいの！
って、そうじゃなくて！……もつと……』

また白井に背を向けて話出した。

『もつと……学園都市の根幹に関わるものよ』

『どういふおつもりでそのような事を仰るのか解りかねますが……』

……』

白井はキュツと唇を引き結んで胸を張り、決意を強く表明する。

『それがこの街の治安を脅かすなら、例えお姉様が相手であつても黒子のやる事は変わりありませんの』

ふっ……と、息を漏らす程度の笑みが零れた。——

（「あの時、改めて誓ったはずだ。学園都市全てを敵にまわそうとも構わないと」）

けれども御坂は、無力な自分を見せつけられた。そんな自身に齒噛みする。

何もできない。

妹の為に戦ってくれたみんなの怪我を治す事も、『一方通行』を止める事も。

何をしていいか解らない。御坂は頭がいつぱいになって、

（「あの子達、外見は一緒だけどひとりひとりに命があつて。そして何より……私の妹だ。」）

妹は、姉アイツに向かつて毒を吐くし、くだらない事を言い合って、私と同じで動物が好きなのに能力のせいで触れなくて落ち込んで、怒って、解り辛いけど笑って、私の言葉にきつと傷ついて…。

……生きてるの。生きてるのよ…あの子達は。だから、…だから…もう……」

気がつけば叫んでいた。

「もう殺さないでよ！ あの子達は妹なの！ 家族なのっ！ 家族なんだからあぁっ！！」

膝をつき、顔をくしゃくしゃにして「——っうっ」と呻くように御坂は泣き崩れた。

そんな御坂を放っておくことができなかったのか、御坂の後ろからミサカがそつと抱きしめた。

「お姉様にとってミサカ達は否定したい存在なのだとばかり…思っていました」

「けど…」とミサカは顔を閉じて抱きしめる手に想いを込めた。
「ミサカ達の為にこんなにも泣いてくれるなどと思っていませんでした。でも……、だからミサカ達は誓いました。これ以上は一人だって死んだりしません。と、ミサカはお姉様に優しく宣誓します」
「…ありがとう。」

アンタにお願いがあるの。私じゃ、アレには届かない。私にはきつと、みんなを守れない。どれだけがいてどれだけあがいても、絶対に守れない！」

ミサカの腕の中で小さくなり、震えている。今こうやって優しく抱きしめてくれるぬくもりを失いたくない。妹達も友達も仲間も。

「アンタにやって欲しい事が……ううん、アンタにしかできない事があるの！ お願いだから！」

みんなで笑って、みんなで帰る為には。

「お願いだから、アンタの力でアイツの夢を守ってあげて！ みんなを助けて！！」

ミサカは、自分の命に何の価値も見出ださない。

ボタン一つで作り出せる肉の体に、プログラム通りに注入される無の心。単価一八万円の命など壊れたところでいくらでも替えが利くと本気で信じている。

けれど、「嫌だな」とミサカは思ってしまった。

確かに自分の命には何の価値もないけど、そんなちっぽけなものが失われたぐらいで哀しむ人が出てくるなんて事を知ってしまったら、もう死ぬ事などできなかった。

そして、例えこのちっぽけな存在でも、今泣いているこの少女を助ける事ができるのならば、それはとても素晴らしい事だと、そう思う事ができたから。

やるべき事があった。

守るべきものを見つけた。

「その言葉の意味は解りかねますが――」

ミサカは、ゆっくりとぼろぼろになった四肢に力を込める。

「――何故だか、その言葉はとても響きました。と、ミサカは率直な感想を述べます」

きつと、そう言ってくれる誰かがいるから。

ミサカは、まだ立ち上がる事ができた。

ミサカは、御坂の手を取って立つ。手を繋いだそのまま、ミサカネットワークへと繋ぎ、各ミサカへ風力発電の風車のプロペラを回すよう指示。

間もなくすると、轟！ という風の唸りと共に、いきなり頭上に浮かぶ球状の高電離気体の形が崩れた。

「な……？」

『一方通行』は思わず頭上を見上げた。あの高電離気体は街中を流れる風を一点に凝縮させる事で作り出されたものだ。その風の流れが、一瞬だが確実に揺らいだ。そのせいで空気の圧縮率に誤差が生じて高電離気体が揺らいだのだ。

風の計算を誤ったか、と『一方通行』は新たに計算式を組み直し

た。複雑な計算をいとも容易く成す。『一方通行』は僅か一〇秒足らずで膨大な計算式を完全に修正し終える。

だが、

妙な違和感を感じた。組み上げられた計算式から逃れるように、街中の風の流れがいきなり動きを変えた。

頭上で圧縮されていた空気の塊が拡散し、高電離気体が空気に溶けるように消えていく。

（「何だア？ 何が起こつてんだ！ 俺の計算式に狂いはねエ。大体、今のウナギみてエな不規則な動きはどう考えても自然風じゃねエぞ！」）

まさか間が悪く、本物の風使いが街の何処かで力でも使っているのか。いや、不規則な風の流れは街の隅々にまで及んでいる。『一方通行』の能力と計算式の上を行く処理能力を持つ風使いがいるとすれば、そいつは間違いなく超能力者（レベル5）に認定できる。

だが、『一方通行』の知る七人の中に、そんな能力者は存在しない。「一体何が……」と焦る『一方通行』は、そこでカラカラという乾いた音を聞いた。

風力発電のプロペラが回る音を。

（「待、て。聞いた事があんど。確か発電機のモーターってなア、マイクロ波を浴びせつと回転するって話が……ッ！」）

『一方通行』は自分が打ちのめしたはずの『妹達』の方を振り替える。

だが、そこには死にかけの少女などいなかった。

そこにいるのは『一方通行』の敵だった。

今にも折れそうな足で懸命に立ち上がり、全身に走る激痛に泣き言の一つも言わないで、無言で『一方通行』を睨み付けているような、そんな敵がそこにいた。

（「ヤロウ……っ！」）

『一方通行』の赤い瞳が殺意に紅く濃く変わった。

顔を引き裂くような笑みを浮かべて一歩踏み出した『一方通行』

に、御坂は涙の跡が残った相好を崩し、寧猛な色が表れた。

そして雨が上がり、月明かりが双子^{ふたり}を照らす。

「……、させると思う?」

吹き荒れる風の中、御坂の声はかき消されてしまふほどに小さかった。けれど、その静かな声は、何故か『一方通行』の鼓膜を突き抜けた。

第24話 祈り、願い | litai・(前書き)

タイトルのlitai・とは、祈りの少女。神話、伝説の中に出てくる少女です。

今回で決着。

そして誰もいなくなったか…？

第24話 祈り、願い — l i t a i .

『一方通行』は、嘲笑う。

「ハッ、図に乗ってンじゃねエぞ格下が。オマエじゃ俺に届きやしねエよ、足止めすらできやしねエ。視力検査つてなア、二・〇。までしか測れねエだろ？ それと一緒にさ、学園都市にや最高位のレベルが5までしかねエから、仕方なく俺はここに甘ンじてるだけなんだつつの」

『一方通行』は、齒牙にもかけない。

二人揃っていたとしても——いや、それ以上いたが圧倒しているというのに、ちつとも揺るがないその視線に姿勢に苛立ちを覚えた。自分には……。と、一瞬何かが頭を過つたが理解“せず”より一層苛立ちを募らせた。

「……だよ……。なん、なんだよ……！ オマエらはよオオオっ……！」

『一方通行』が、腕を振り上げるのが見えて御坂も、ミサ力でさえも思わず目を瞑っていた。

が、待てども待てども災厄が襲ってくることはなかった。

二人は、気になって恐る恐る臉を開けると、

「ア、アンタ！ いたい」

上条当麻が『一方通行』の腕を掴んでいた。

それを見た御坂は、上条に何かを訴えようとしたのだが、上手く言葉が出て来ずに飲み込まれた。

腕を掴まれて息をするという当たり前のことさえ忘れてしまい、初めて恐怖を知った『一方通行』も、恐る恐る振り返る。

そこに、信じられない光景が広がっていた。風速一二〇メートルもの暴風に吹き飛ばされて、風力発電の支柱に激突したはずの少年が立ち上がって背後に寄り、腕を掴んでいたのだった。

少年の体には無数の傷があり、少しでも筋肉に力を込めるだけで

あちこちから血が噴き出しているようだ。ぱたぱたと零れ落ちて血溜まりができる。

その体にはもうまともな力が入らず、両の脚はがくがくと震え、両の手は柳の枝のようにぶらりと垂れ下がっていた。

それでも、少年は倒れない。

絶対に、倒れない。

「……………ッ！」

『一方通行』の喉が、砂漠のように干上がった。

常識的に考えれば、あの少年はもう戦えない。あそこまで深刻なダメージを負った人間など、『一方通行』なら一撃で粉砕する事ができるはずだ。

直接戦うのが嫌なら、少年を突き放し、御坂とミサ力を殺して暴風と高電離気体の主導権を取り返してからでも良い。

冷静に対処すれば簡単に勝てる。と理性は歌っていた。

けれども、それ以外の何かが、アレに背中を見せ続ける事を危険視していた。

体の隅々が、軋んだような危険信号を発していた。

常人ならば、それは痛みによる“恐怖”だと処理する事ができただろう。

だが、『一方通行』は……。

「面白エよ、オマエ——」
理解できない。

初めて殴られ、地面を転がって鼻血を出した。それでも“痛い”という事しか理解できていなかった。

『一方通行』は拳を握る。

「——最っ高に面白エぞ、オマエエエッ！」

上条は、ボロボロの体を動かして一步前へ進む。

少しでも体を動かすだけで、体の中から全ての血が蒸発してしまうような気がした。

それでも、上条は前へ。

意識が朦朧としている上条は、今の状況を正しく理解できない。どうして暴風が吹いているのか、高電離気体が消えたのは何故なのか、自分はこういう理屈で生き延びたのか。そういった大事な事意識からすっぽりと抜け落ちるほどに、心はもうボロボロだった。

それでも、たった一つ。

「もう殺さないでよ！ あの子達は妹なの！ 家族なのっ！ 家族なんだからあつー！」と御坂の叫びが聞こえた。

視界の先で、泣き崩れる御坂とそれを優しく抱きしめるミサカが見えた。

『一方通行』が御坂達を殺そうとしているのが見えた。

ミサカの盾になるように、繋いだ手はそのままに御坂が一步踏み出して間に割って入るのが、見えたから。

それだけ解れば、十分だった。

立ち上がる理由としては、十二分だった。

「面白エよ、オマエ——」

『一方通行』の声が聞こえた。

「——最っ高に面白エぞ、オマエエツ！」

そうして、夜空に吼えるように絶叫した『一方通行』は、上条を突飛ばし、起き上がった上条を撃破する為に拳を握って駆け出した。例の、地面を蹴る足の力の『向き』を変更した、砲弾じみた速度であつという間に距離を縮めてくる。「ありがたい」と、上条は思った。一度離された距離を向こうから近づいて来てくれるのなら、それに越した事などない。今の上条のボロボロの体では、おそらく『一方通行』の元まで辿り着く前に倒れてしまっていただろうから。

上条当麻には、何の力もない。

もうその体には、自分の足で立って歩くだけの力も、自分の舌で言葉を紡ぐだけの力も、自分の頭で何かを考えるだけの力も、——
「そんな僅かな体力でさえも、残されていない。」

それでも、上条は右手を握る。

握る。

視線を上げた。

『一方通行』は、弾丸のような速度で真っ直ぐに上条当麻の懐へと飛び込んできた。

右の苦手、左の毒手。

共に触れただけで人を殺す『一方通行』の両の手が、上条の顔面へと襲いかかる。

瞬間、時間が止まった。

体に残る、絞りカスのような体力の全てを注ぎ込んで、上条は頭を振り回すように身を低く沈めた。右の苦手が虚しく頭上を通り過ぎ、追い討ちをかける左の毒手を上条は右手で払い除ける。

「歯を食い縛れよ、最強——」

二重の必殺を封殺され、心を凍らせた『一方通行』に上条は言う。
密着するほどの至近距離で、獣のように獰猛に笑い、

「俺の最弱は、ちつとばっか響くぞ」

刹那。

上条当麻の右手の拳が、『一方通行』の顔面へと突き刺さった。
その華奢な白い体が勢い良く砂利の敷かれた地面へ叩きつけられ、
乱暴に手足を投げ出しながらゴロゴロと転がっていった。

『もう殺さないでよ！ あの子達は妹なの！ 家族なのっ！ 家族
なんだからああっ！！』

戦場に御坂の嘆きが響き渡っていた。

御坂の叫びに、神裂は強く誓う。

「これから先は、一歩たりとも退きません！

あの子もあの子達も、そしてあなたも。絶対に救って見せます！
例えこの身が引き裂かれようとも、あなた達がこの絶望から脱するまで、何度だって！」

されど化け物には届かず、人ならざる咆吼で持つて返す。

神裂は、ちらりと下がって行く影を見た。低体温症と出血の為意識を失った麦野の事が気になっていたのだが、『妹達』が下がらせて手当てもしてくれるようだった。

ホッと、僅かな時だけ安堵して鞘を持つ手に力を込めた。

そして深く呼吸を繰り返し、

「ふうーっ……………」

間欠泉のように魔力や気が噴き出した。余力と言えば聞こえは良いが、聖人と言われようとその身体は人の身。聖人の奮う力には余りに脆弱な肉体。それを奮えば己自身も傷つけることとなる諸刃の剣。

だが、『聖人』の力の全てを解放するに至るほどの化け物だという事。それに加えて、相手の能力者にも時間が無いようなのだ。

致命傷を与えていないにも関わらず鼻血を流し続けて、さらには吐血を繰り返し、その異常を伝えている。

（「一刻の猶予も無い！　つい先ほどから彼方で見えている、あの馬鹿デカい塊……………」）

小規模な太陽と言っても差し支えない熱を神裂にも、じりじりと伝えている。

化け物揃いの魔境にでも来たのかと、神裂は我が目を疑う。

（「アレでは、合図の余裕も無いか……………」）

柄を握っていた指を小指から人差し指まで順に、カカカッと軽快な音を立てて叩き鳴らされ、その右手で髪を掻き上げてから神裂が前に飛び出した。

何時の間にか鞘から刃がなくなって相手の肩を浅く切り裂く。

その勢いを殺さずに二度、三度に渡って線が引かれていった。

傷を受けながらも男は、何十トンもの水の槌を振り下ろす。

「くっ!……」

躲しきれずに神裂の鞘を持つ腕を擦ったのだが、それだけで腕に罅が入ったようだ。歯茎から血が出るほど強く噛みしめて耐える。

神裂は、軽く回し蹴りをしてからその体勢のまま鋼糸を繰り、斬りつける。現れた氷の盾を三角跳びの要領で右足で蹴って僅かな距離を稼ぎ、着地しながら靴を履き直すように右足の爪先で地面を三度蹴り、左右に首を傾げてポキポキと骨を鳴らして右太股の辺りを払い、左足でダン! と大地を踏み鳴らす。

「っ!?!?」

本能的に危機を察したのか、男から声にならない叫びが上がる。

咄嗟に生み出された鋼鉄を凌ぐ氷の盾は意味を成さず、背後から既に片足の腱を斬られた後だった。

それを緩める訳もなく、土砂降りだというのにそこだけ雨の無い空間ができるほどの速さで斬り結ぶ。

左腕をやられているはずだというのに、先ほどまでより明らかに神裂のスピードが上がっていた。

「ただ力を奮うだけでは私の本気には到底及ばない。その上、魔術を使って聖人である自身を強化したんです。…解りましたか? つまりは、——」

神裂は、すうつ…。と肺を空気で満たして一気に吐き出す。

「——あなたでは私には勝てない」

静かな声音とは裏腹に激しく男を吹き飛ばし、視界に捉えたのは戦場から離れた場所で打ち上がった光。

「私と同じくして、彼女の方の準備も整ったようです」

信号弾のようだ。

それは、合図だ。彼女の……フレンドからの。

程なくして、雨脚も弱まってきた。

「…どうやら天は、聖人を祝福してくれるようですよ?」

戦場を見て強く願う。

何もできない、力なんて無い。

土砂降りの雨は、等しくみんなの体力を奪う。

（「私でさえこんななのに、ケガしてるみんなはもつと……！」）

少女は、叫ぶ。心から……、心で、叫ぶ。

胸中から溢れそうな思い、願い、祈り。

（「いらないっ！ こんな雨なんていらないっ！ 傷つけないでよ！ やめて！ 消えて……！」）

少女の必死の願いが届いたのか、あれだけ崩れていた天気が急速に収まっていった。

仕舞いには、雲間から月が顔を出して少女のブレスレットを鈍く煌めかせた。

しっ！ と息を吐き、鋼糸を男に絡ませる。

「確か……ヒュドラーと呼ばれているんでしたね。この国で言う八岐大蛇ヤマタノオロチですか……」

言葉を並べつつも七天七刀と鋼糸を用いて本格的に陣を描く。

「ですが、どちらも退治されています。ヒュドラーはヘラクレスに八岐大蛇は須佐之男命スサノオノミコトによって。

そして今ここでは、私が『龍神』ヒュドラーを下します」

刀を大地に突き立て、術式を展開する。

刃を立てられたところを起点に淡い光が迸って、フレンドの使っていた起爆ツールの白いテープの上も走っていく。

それを見て、虚勢を張っていた幼い容姿の少女を思い出して薄く笑う。

「フレンド……。彼女には、大規模な術式を描いてもらいました。

これから私が使う、“水”の術式」

魔法陣の光が神裂と男を照らし、幻想的な雰囲気醸し出す。

「何故。あえてあなたの得意な水の術式を選んだと思いますか？」

「アア、アアッ！！！」

「本能で感づいたんですね？　それとも……私の声は、届いていましたか？」

神裂は、柔らかい笑みを零す。

「ならば、」と、殺しの意味としてではなく、宣誓の意味を込めて改めて名乗る。

「Salvareooo」

『救われぬ者に救いの手を』

宣誓と同時に魔術が発動。

変化は一瞬、効果は絶大。

聖人の力を持つてして行使された魔術は、地面に張っていた水溜まりどころか、大気中の湿気、衣服や髪をずぶ濡れにしていた水気でさえもを使用して行われた。

法王級の魔力を行使して行われたのは、ただ水分を飛ばすということだけ。

だが、

「この辺り一帯は、もうあなたの使える水はなく、強化された聖人の『唯閃』を防ぐ術は――」

ただそれだけで勝敗が見えた。

「――ない」

抜刀して逆刃での唯閃を繰り出された刀は既に納刀し、鏢が小気味よい音を立てるところだった。

「……あなたの負けです、『水支配者』」

戦場は、静けさを取り戻した。

僅かに蠢く影を残して。

誰かが身動きする。

「んっ……」

「お目覚めかい？」

彼女が瞼を開けてまず目にしたのが、バーコードのような模様。

「紅い、の…？」

「ステイルだつて言つてたはずなんだけどね、爆発^{ボマー}小娘」

「るさいっ、フレンドよ。フ・レ・ン・ダ。物覚え悪いワケ？ ていうか、レジに行けつての。ピツて精算してもらえば？」

ステイルの暴言に少しずつ覚醒していき、寝起きのままで言い返すフレンド。

「全く。戦場だろうが何処だろうが口の減らない…」

そして暫くお互いが無言になり、どちら共なく「ぷっ」と吹き出した。

「ははっ、ねえ、あんたつて結構子供よね？」

「そんなことはない」とムスツと膨れっ面を見せた。気を紛れさせる為に煙草を咥えようとしたところで、フレンドに嗜められ眉間のシワが深くなった。

椅子に腰掛けていたステイルは、ベッドで身を起こしたフレンドにとつて丁度いい高さだった。だからフレンドは、自然とそう動いたのだろう。

「そういうところだつてのに」

そう言つてステイルの眉間を指で小突く。

ステイルは、その姿に見惚れる。

はだけたその病院着は、清廉なはずのものを淫靡^{いんぴ}に見せた。

日の光を通して透き通つて見える金糸のような髪が、雪色の肩や鎖骨を流れる。小突く時に前屈みになり、両手をベッドにつけたま

まのフレンドが、くすりと零す悪戯っぽいその様は普段の何倍も魅力的に見せて“みんな”を魅了した。

「ふわぁ……フレンドって年上だったんだって実感した」

病室の入口の方からまじまじと見ていた涙子が感嘆の思いを漏らす。

「げっ！……」

女の子らしからぬ声を上げたフレンドに、追い討ちをかけたのは絶対領域を死守する少女絹旗。

「フレンドさん、超色っぽいです。ていうか、ちょくエロっぽいですね」

「げげっ！……」

「ドクドク……」

ただ無言で鼻血を出している浜面を見て、神裂はぼやく。

「私にもその魅力が欲しいです」

すらっとした身長に大きな胸、しなやかな筋肉に美しい括れ。それだけに止まらず、むちっとした太股と張りのあるヒップまで持っている。そう言った彼女も十二分に魅力的だ。

他からすれば、それだけのものを持っていて何を！ と思うような、まさに世の女性を敵にまわす発言をする神裂なのだが、如何せん、普段身につけている服装の為に痴女などと言われることもしばしば。そんな彼女からすれば、可愛いお人形のような姿だけでなく大人の色気も持った超人にも等しく、つい、羨望の眼差しで見してしまうのだった。

プリエステス

「何が女教皇ですか……彼女なんて聖女じゃないですか……私なんか、どうせ性女ですから」

最後の方は、ぼそつと呟いていたので誰の耳にも入らなかった。

「なんつ……え？ あ、あんた達はいつから……？」

「“お目覚めかい？”ってところから」

「最初っからってことじゃない！ 何をか——」

頭を抱えているスタイルを見て、口にしようとしていた言葉とは

違うものがついて出た。

「——あんたは、何してるワケ？」

「ふれんだ、暫くそつとしてあげよ？」

滝壺がフレンダを嗜める。呆れたため息をつき、先ほどから気になっていたことを尋ねる。

「結局、みんなどうなったワケ？ 麦野、御坂、上条、『一方通行』に『水支配者』だっけ？——は、どうしてんの？」

「御坂さんは、何処か行ったみたいなんだけど……他の人は別の病室なんだって」

「ふーん……」と唸ったが本当にそれだけなんだろうかと疑念が拭い去れなかったフレンダだった。

すうーつと気持ちよく目が覚めた。最近、こんなことあったらうかとかよく働かない頭で考えていると、

「起きましたか？」

近いところから声がかかった。

「アンタ、御坂……」

麦野が視線を細めた先にあつたピアスを目にして気づいた。

「……の妹の方か。元気？ だったらベッドから出てるか。ま、無事ではあるみたいだね」

体を起こすのも辛いのか、10007号のミサカは顔だけを麦野の方へと向けて話かけた。

「はい。……あの、体が上手く動かないので、ピアスを返すのは後でも大丈夫でしょうか？ と、ミサカは尋ねます」

「構わないわ。……っ！ と……ハアハアッ。さすがにキツイわね」
まだ体を動かすのが辛いはずの麦野は、態々ベッドから身を起こしてミサカの隣に並び立つ。

苦悶の表情を見せる彼女の姿を看過できず、荒げた声を上げて諫

めた。

「何をやっているのですか！ とミサ力は……」

が、その言葉の続きは紡がれずに自身の頭を優しく撫で、髪を梳くという麦野の行為に自分の内から込み上げてくるものを抑えきることができず溢れさせた。

「あ……、れ？ 何か変、です」

「変じゃないわ。……… 変じゃない」

暫くそうしたあと、麦野は手を握って話始めた。

「あんた、覚えてる？ ご褒美あげるって言ってたの」

「あの傲慢なヤツですね。もちろん覚えていますが、鼻を明かしてやるうとがんばりました。と、ミサ力は心内だけでも胸を張ります」

その返答を聞いて、「はいはい」と楽しそうに相槌を打ってからきり出した。

「あんたの、……ね、名前を考えたの」

「名前？」とオウム返しにした様は、ミサ力にとって全くの理解に及ばなかった。

「ええ。世界でただ一つのあなたの為の」

麦野の言ったことにミサ力は目を見開き、興奮冷めやらぬよう目力だけで先を促していた。

「落ち着きなさいって。まったく」

呆れてしまったけれど、くすぐったくて心地いい。久しくこんな気持ち忘れていた。随分と“最近”の自分らしくないと思ったが、以前はこうだったはず。と、薄れた記憶にチクリと胸を痛めた。

正直、怖かったんだろう。

この子に否定されること。そして何より、麦野自身の黒く染まった心と幾度となく真っ赤に染め上げた手と身体のコにまで染み付いた鉄錆の臭い。香水を多く振りまくようになったが、全くもって“血”の臭いしかない。こんな私が陽だまりに浸ってていいのかと尻込みする。

でも、思い出した。

いや、『アイテム』にも合ったそれを見ようとしなかった。

（「けど、もう迷わない」）

「…あのね、あんたの名前は、光利^{ひかり}よ。“光”って漢字に、私の名前の“沈利”からとった“利”。その二つを合わせて“光利”」
「ヒカリ……」

ミサカは、………光利は、確かめるように一語一語ゆっくりと刻んだ。

「私みたく、闇に沈んじゃダメ。光を歩いて、幸せになってもうから」

「はい。ミサカは……いえ、光利は、光利の胸は今スゴく暖かいです」

「それが嬉しいとか幸せってことよ」

「あの……、姉さん。と呼ばせてもらってもいいですか？ と光利は上目遣いで尋ねます」

光利は「なってますか？ 上目遣い」と寝転がったまま聞いた。

「どうぞ。光利の好きになさい」

光利は答えを聞くと、今まで見せたことの無い笑顔で、

「では、姉さんと呼ばせていただきます。光利は幸せいっぱいに答えます」

「じゃあこれからは、私の義妹としてきちんと幸せになってもうわ」

光利は、沈利の手を取って懇願する。

「けれど、約束してください。いつか光で、光利と共に歩いてくれると」

「…ええ。解ったわ」

この子との約束を守ろうと誓い、互いが忘れぬようにと小指を結び合わせる。

「約束する」

皆が子供の頃によくやったであろう誓いの方法で。けれども、沈利も光利も初めて行う契り方。

「……………」

目と目を縛られたかのように絡ませ……………くすり。

どちらからともなく零れた微笑は、光に溢れて輝いていた。

見舞いに来て途中から話を聞いていた黒髪の剣士も、顔を綻ばせた。

目を覚ますと、そこは暗い病室だった。

麻酔が効いているせいか、唇の辺りにおかしな感触を感じながらも、上条は目だけを動かして辺りを見回した。そこはよくお世話になっているお決まりの個室だった。着替えとかお見舞いの果物とかが置いていないところを見ると、まだ病院に運ばれてからそれほど時間は経っていないらしい。

そこまで考えて、ふと思い出した。

「あ、ミサカは!？」

「ここです。と、ボケたあなたに伝えます」

「はい!？」

上条は思わず飛び上がりそうになったが、麻酔の効いた体はピクリとも動かなかった。

相変わらずなミサカの体のあちこちには包帯が巻かれていた。まあそうだろうと、それは置いておき。みー、という鳴き声が聞こえ、おそらくあの黒猫が病室にいるだろうというのも置いておいて、ミサカが上条の手を両手で包むように握っていたことさえもこの際

置いておくが、

ミサカの胸元に、何か上条の手が膨らみに触れるか触れないかの境界線まで持つていかれていることが、今の上条にとって最も重要なことだった。

「み、み、みみみみさか、さん？ あれ、おかしいな。何でこんなハッピーなイベントが起きてるんでせう？ そんなフラグ立てた覚えは皆無なんですけどーっ！」

「……、相も変わらず支離滅裂な会話ですが、念のために伝えておくと手を握ってきたのはあなたの方です、そしてこの位置にまで手を持ってきたのはミサカの意味ですので、とミサカは解りやすい現代力ナ遣いで語ります」

一瞬思考の海に吞まれそうになった上条だったが、理解に及んで言語が危うくなる。

「……、ひめ。なにゆえにこのようなことを？ おこたえねがいたくぞんじます」

「単に生体電気の流れからあなたの脳波と心拍数を計測してただけですが、とミサカは返答します。特に性的な意味合いは含みません。とりあえず、…えっち……」

上条の呼吸が止まりそうになるが、その時ふと気づいた。実は、触れるか触れないかではなく、触れているが、麻酔のせいで感じないんだと。

「ち、ちくしょう……何たる不幸……っ！ あー、クソッ……！」

「あなたの言語中枢には異常が見られませんか、とミサカは」

「何堂々と手を出してんのよアンタ！」

「げっ！ 御坂っ」

「は？ ケンカ売ってんの？」

「落ち着いてください、お姉様。全てミサカの責任なんです」

ギロツ！ と睨み付ける御坂の視線を誤魔化すように茶化したような言い方をした。

「ま、まあ、お互い何とか帰ってこれましたなー」

それでも確かに込み上げるものがあつた。というか、なければ困る。それでは一体何のために死にかけたのか良く解らない。

「ふう…、まあね」

ミサカは黒猫を撫でたまま、御坂の言葉に続ける。

「それについてなのですが、ミサカは未だ、あなたと同じ世界に帰ることはできません、と正直に告げます」

上条も御坂も、心臓を鷲掴まれた。言葉にならないが、同じ思いが頭を過る。まさかまだ『実験』が続いているのか。

「いえ、そうではなく、『実験』は『一方通行』の敗北と共に中止に向かうことが決定したようです、とミサカは懇切丁寧に報告します」

ミサカは、そこで一瞬黙ってから、

「ミサカが問題にしているのは、ミサカの体のことです。と、ミサカは説明します」

「からだ？」

「どういうことよ」

「はい。元々ミサカの体はお姉様（オリジナル）の体細胞から作られたクローンであり、そこへさらに様々な薬品を投与することで急速に成長を促した個体です。と、ミサカはさらに説明を続けます。

よって、ただでさえ寿命の短い体細胞クローンがさらに短命になっているのです。と、言って解りますか？ とミサカは聞いてみます」

「……、」

「そん、な……」

上条は絶句して、御坂も言葉にならなかった。

「だから一時的に研究施設の世話になって個体を調整する必要があるのですが——と、聞いてますか？ とミサカはお二人を睨みつけます」

「は？ 調整？」

「え？ どういうこと？」

「そのままの意味です。急速な成長を促すホルモンバランスを整え、

細胞核の分裂速度を調整することである程度の寿命を回復させることができます、とミサ力は答えます。……あの、もしも？ ひよつとしてここで物語が終わると勝手に解釈していませんか？ とミサ力は問い質します」

「調整つて、治るの？」

上条の言葉にえっへん。とミサ力は薄いそれを張る。

「もちろんです。と胸を張って答えます」

「良かった」

対照的に御坂は俯いて、安堵の息を吐く。ミサ力が、少しムスツとした表情で御坂に言う。

「……。何か、言外に治るはずがないだろうと言われているような気がするのですが……。とミサ力は不機嫌に——お姉様……？」

「っ……、よかった……。本当に、良かった……。生き残ってくれて……。ありがとうございます……、」

「それと」と言葉を切って、まっすぐ目を見てから頭を下げた。

「ごめん！」

ミサ力は何の事だと首を傾げる。

「あなた達を傷つけてばかりで、何もしてあげられなくて……。ホントにごめ……ん、っ、ごめんな……さい……」

ずつと声を抑えていたのか、話の途中から御坂が嗚咽を上げ始めていた。

「お姉様は、泣き虫なんです……」

妹が姉を愛おしそうに撫でる。「お姉様。ミサ力は、いっぱい知りました。」

この世界は、辛くて苦しくて悲しく、怖いのだと

御坂は、何も返せず「ああ、そうなんだ」と悲観めいた気持ちで溢れそうになったが、

「けど、それ以上に幸せもいっぱいあるのだということも知りました」

「え？……」

それを否定されて、御坂の口から変に高い音が出た。

「妹達わたしたちが生きていることを喜んでくれてありがとう。妹達の為に泣いてくれてありがとう。……妹達を生み出してくれて、本当にありがとうございますお姉様……」

「っ、……うん……うん！」

「ミサカは、……ミサカ達は、この素敵な世界に生まれてこれたことを幸せに思い、御坂美琴と姉妹達かそくであることを誇りに思います」

妹は姉の手を握ってまっすぐに見つめて、

「お姉様がミサカを想ってくれたように、ミサカもお姉様を想っています。だからお姉様……自分を責めないでください」

「ありがとう。ごめんは、もう言わない。いっぱいいっぱいありがとうね。もっともつと言い足りない、まだまだ一緒にいたい。これからだもんね？ だから改めてよろしく妹」

「はい、お姉様」

「御坂、もう大丈夫そうだな」

「何がよ？」

「『妹達』のこと。おまえのことだから、自分を責めているんじゃないかと思ってただけだよ」

「まあ、そういう気持ちもあったけど、ね。一万人以上の『妹達』が殺されちゃってその命を背負わなきゃ、一生かかっても償わなきゃ、なんて思ってたんだけど、さっきこの子に言われてすっごい救われた」

隣に座っている妹を見て目で想いを伝えているようだった。

「この子達の為にも——あー違うな。この子達と一緒に頑張ろうってね」

「姉ちゃん想いのいい妹だもんな」

上条の言葉に一瞬驚いたが、御坂はスゴく晴れやかな気持ちで自慢した。

「うん！ いいでしょ？」

アンタにはやらないわよ？ と言わんばかりにぎゅうっと妹を抱

きしめていた。

「そうやって笑って良いんだよ。『妹達』は絶対に、おまえがたった一人で塞ぎ込む事なんか期待してないだろうよ。話しても解つた？ おまえが守りたかった『妹達』ってのは、自分の傷の痛みを他人に押し付けて満足するような、そんなちっぽけな連中じゃねーんだろ？」

上条は落ちてくる瞼に抵抗しながら、それだけはしっかりと伝えた。

いつから意識が無かったのか、はつきり思い出せないでいた。目が覚めたところで感慨深いわけでもなく、真新しくなった病院着と独特な薬品臭さのある白い部屋にいることを他人事のように見ていた。

心は摩耗して、言葉どころか呼吸することすら“忘れている”。

その男にとって、己を顧みる意味なんて無かった。帰る場所も名前も過去も何も……、何も無かった。

「起きたんだね？」

け怠気に視線だけを声の方にずらして見ると、カエル顔の白衣を着た男性が立っていた。

その男が脈拍などを計りながら尋ねる。

「君の状態は非常に危険だったんだけど、君は何があつたか覚えてるかい？」

「……………」

「呼吸はしてくれると嬉しいんだがね。せつかく救けた命を無駄にしないでもらいたい。救からなかった子達の命を侮辱するのに等しい」

返事の代わりなのか、虚ろな瞳をただ曝し続けた。

「運ばれて来た『妹達』全てが救かったわけじゃないんだよ。解る

かい？」

呼吸器は微かに曇り、男の呼吸を促した。

さらに反応を示さないかと確認をしていく。

「君の戸籍は、この町に無かった。外からの来訪者名簿にも存在していない。これは、上に確認したから確実だ。つと——黄泉川先生、盗み聞きはよくない」

「医師、いつから……？」

「さてね。何の道、黄泉川先生に彼を頼もつかと思っていったんだ。

黄泉川先生もそのつもりだったね？」

「……、まあ。医師、彼は？」

「よっぽどのがあつたんだろうね。精神が崩壊してもおかしくなかつたんだよ」

黄泉川は、強く唇を噛む。この間の時も、つい先ほどの時も、自身は特に何もできなかった。

今回黄泉川が病院に出向いて見たのは、大きな怪我をしたミサカ一人だけだった。助けを求めるほどのスキルアウトの抗争でもあったのかと。

だからと言って、大丈夫だと思って何もしなかつたわけじゃない。学園の上層部にかかけあつて『警備員』の緊急出勤を要請したが、頭ごなしに拒否をくだされた。唯一連絡が取れた、後輩で飲み友達の鉄装てつそう 綴里つづりを伴って現場に行くも、目的の場所である列車の操車場は、そこかしこから火煙が上がっていた。微かに香つたのは焦げ臭い香りだけじゃなく、硝煙と肌がベタつくような感触と火葬場で嗅いだことのある独特な人の焼ける臭い。よくよく見れば、血痕や乾ききつていない血溜まりが夜闇と一体化していて、元からそこにあつたかのように炎と血の紅で満たされた世界だった。

想像だにしなかつた惨状を前に、鉄装は吐き続けて子供のように泣き喚き、黄泉川は、その戦場を茫然と見ながら涙を流して大地を濡らした。

何度も間に合わなかったけど、「今度こそ助けてやる」と、拳をこつそり握りしめた。

「はじめましてじゃん。黄泉川愛穂だ。先生なんてやってる」
男の手を取って、包み込む。

「本当は、会った事あるんだけど覚えてないじゃん？ あたしは、アンタに恩がある。だからきつちりと返させてもらう」

黄泉川は「改めて、これからよろしくじゃん」と優しく握手をする。

ふと、思い出した。

「あ、名前な。アンタの名前は——」
同じようなことがあったな。と。

「——黄泉川たくみ。解ったじゃん？ たくみ」
するとさっきまで反応の無かった男が、もごもごと口を動かして声をなぞっていた。

「た……く……み……？」

「っ！ そう！ そうじゃんよ！ 今度こそよろしくな？」

今度は微かにではあったが、握り返してくれて黄泉川の顔が綻んだ。

そして、たくみと呼ばれた男は奈落の底から生還し、しっかりと鼓動が息ずき、彼の息を吹き返したその瞳には、生命力が満ち溢れていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1646k/>

とある忘却の水支配者（ヒュドラー）

2011年12月3日15時49分発行